IS—Black Gunman—

reizen

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

武道の名門「篠ノ之」家。

その家に本来生まれることのない男が生まれていた。

彼は姉と同じで家に囚われず、剣ではなく銃を好んで使っていた。

そして彼はＩＳの犠牲になった。

２０２０／１０／２３

勝手ですが小説展開を一新しました。話の流れは変わりませんが、一部ずれが生じています。

目次

第1話　篠ノ之家の長男 ―― 1
第2話　ドタバタな日常 ―― 16
第3話　武の異変 ―― 30
第4話　そして始まるクラス代表決定戦 ―― 47
第5話　それぞれの思惑 ―― 61
第6話　クラス代表決定戦、終幕 ―― 75
第7話　成長するワンサマー ―― 90
第8話　予定外の出会い ―― 104
第9話　中国からの転校生 ―― 117
第10話　嫌な予感と哀れな少女 ―― 134
第11話　現れた敵 ―― 151
if―もし二人が仮面ライダーだったら ―― 168
第12話　順調に進むクラス対抗戦 ―― 177
第13話　新たなる敵 ―― 193

第1話　篠ノ之家の長男

ある日、姉がインフィニット・ストラトスを発表した。最初は相手にされなかったけど、白騎士事件で活躍したことによって世界から注目されることになった。そして、姉が失踪した。

「引っ越し？」

「……ああ」

僕と箒を呼んだ両親から言われたのはそんな言葉だった。

僕らには生家がある。いずれ僕ではなく箒が継ぐ土地と神社。ずっとそこから離れないと、離れるとしても大学に入学して一人暮らしを始める時ぐらいだと思っていた。

だからそんな言葉は意外で、僕も箒も驚きを隠せなかった。

「こ、ここから離れるのですか!?」

箒が心から信じられないという顔をする。そういえば、こいつって好きな人がいるんだっけ？　一度同じクラスになって睨まれたことがあるけど、男から見れば「本当にこいつで良いのか」という疑問があったけどね。

「……そうだ」

「何故ですか!?　何故そんなことを――――」
「わかり切ってるじゃん。どうせ姉さんが失踪したからでしょ」
そう言うと3人共僕の方を見る。
「じゃあ行って来る」
「おい、どこに行くんだ――――」
「友だちに挨拶だよ。それくらいさせてよ」
そう言ってすぐに外に出ようとしたら、黒い服を着た男の人に阻まれた。
「中に入ってください」
「何で。友達に挨拶するだけだよ」
「なりません。そうすればあなたに身の危険が迫ります」
外に出させてくれないけど、それでも構わず押し通ろうとしたら無理矢理押された。
それからずっと僕らに付きまとっていたのは、大人の事情という理不尽だけだった。

目を覚ますと、そこはベッドが上だった。隣では妹が俺の腕を枕にして眠っている。
割といつもと変わらない日常だ。
妹の容姿は俺の姉によく似ているが、その姉とは絶賛喧嘩中だが妹に対して嫌悪を抱

いているかと問われれば「それはない」と否定するだろう。それくらいには可愛い。……あの姉の頭がもう少しマシだったら弟目線から見てもかなりレベルが高いと思うからマシな奴と今頃結婚しているだろうなぁと思っているが……あ、たぶん無理だ。

時間もあるしまだ眠いしで俺はもう一度寝ようとすると、妹が目を覚まして起き上がる。それなりに高いベッドから降りる姿は少し怖かったが、思いのほかすんなりと降りていた。１０歳だからそれなりにできるだろう。……まぁ、１０歳で未だ兄離れができないのはかなり困るが……いや、こんなものか？

まぁ、俺にはもう１人妹がいるが、個人的にはアレは妹と思いたくない。

「お兄ちゃん、起きて」

まだ寝ていると思っている俺に乗っかかる妹の楓。その後に耳を甘噛みするので流石にそれは止めてもらいたい。全く。一体どこで甘噛みなんてものを覚えてしまったんだか。……心当たりが多すぎる。

「……起きてる」

「あ、おはよう」

「……おう」

そうぶっきらぼうに返した俺はとりあえず今も上に乗っている妹を降ろして朝食の

準備を始める。ここはＩＳ学園の寮で本来ならばいてはいけないところなのだが、俺たちは特例で先に住まわせてもらっていた。

朝食を済ませた後は軽く室内で運動し、昼ぐらいまで楓が見ているアニメを一緒に見ているとドアがノックされた。

『織斑だ』

「……ああ、時間か」

心当たりがあった俺はそう言って立ち上がり、楓に行ってくるから大人しくするように言って俺は着替えて外に出ると、俺に対して睨むような目で見て来る女がいた。彼女は織斑千冬（おりむらちふゆ）。俺の姉の唯一の友人で、今はＩＳ学園というところの教員をしている。一部のＭ属性からは「絶世の美女」とか「いたぶられたい相手」とか言われているが、俺からしてみればただ暴力に訴えることしかできない哀れな女でしかない。

「待たせたな」

「今日から「教師」と「生徒」の間柄になるんだ。敬語を使え」

「アンタがまともに教師をしているならな」

そう言うと気まずそうな顔をする織斑千冬。一体どんなことをしているのか気になるが言うつもりはないようだ。とはいえしばらくすれば判明するのでこちらも様子見で構えよう。

「にしても、まさかアンタみたいな女が教師とはな。弟は知っているのか？」
「知らないな」
「そんな最中でまさかＩＳを動かすとは。つくづく織斑は問題を起こすことが好きらしい」
「……お前が言うか？」
「転校するまで俺がアレにどれだけ巻き込まれたと思う？」
　顔を逸らすその女は世界最強だが、苦労気質の姉だったりするが……付き合う相手は選べば多少は楽になるのではと思ったことは一度や二度ではない。弟の事はともかくあの姉に関わったことが運の尽きだと思えば良い。
　などと思って織斑千冬に着いて歩くと、気が付けば教室だった。電子看板には「１年１組」と表示されており、少しすると「１―１」と表示された。このＩＳ学園は日本のみならず世界から生徒を受け入れるために日本の読み書きに慣れなれていない奴らに気を遣っているらしい。あの姉のせいで世界共通言語が英語から日本語に代わった為、今ではＩＳを取り入れている国で日本語の教育は普通にあるらしい。日本人としては少し笑えてくる。
「私が先に入る。お前は呼ばれるまで待っていろ」
「……了解した」

織斑千冬が中に入った後、早速何かが弾ける音が聞こえた。その後に「げぇ、関羽!?」と聞こえてきたのだが、その声が男だったのでため息を吐いた。何を言っているんだあの馬鹿は。

しばらくすると今度は歓声が聞こえてくる。どうやらここは学園ではなくライブ会場だったらしい。外から聞いていると正気かと思わせる声が凄い。

『さて、ＳＨＲを終わらせる前に、諸君らに紹介する者がいる。入ってこい！』

言われて俺は教室のドアを開けて中に入ると視線が一気に集まってきた。

「あ、あの、この人は……」

「二人目の男性ＩＳ操縦者だ。判明したのもつい数日前のため、余計な混乱を避けるために発表を遅くした。自己紹介をしろ」

「……え？　する必要ある？」

「当然だ。それにさっきから周りが気になっているだろう？」

注目されている事には気付いていたが、だからと言って自己紹介をするつもりはさらさらなかったのだが。……適当にするか。

「……篠ノ之武（しののたける）。男でＩＳを動かしてしまったのでこの学園にやってきただけの一般人だ。別にアンタらと仲良くなる気はないので適当によろしくすれば良い。以上だ」

「……お前もか」

「事実だ。それで敵対しようが別に構わない」
興味ないしどうでも良い。教室の中で唯一開いている席があったのでそっちに向かう間にヒソヒソと話をしていたが、さっきから俺の姓が気になっているらしい。
「さぁ、ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で身体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。良くなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」
どうやらまともに教師をするつもりはないらしい……というかあの女、教員資格持ってたっけ？

一時限目が終わり、俺は机の上で本を読んでいるとこちらに近づいてくる奴がいた。
「久しぶりだな、武」
「……チッ」
「何で舌打ち?!」
「見たくもない顔が現れたらそりゃ誰だって舌打ちするだろう」
そう返すと織斑は顔を引き攣らせる。
「何で俺にそんな辛辣なんだよ……」

「俺はお前が嫌いだから」
「酷くない!?」
「全然。むしろお前を殺したい男の方が圧倒的だと思うがな」
「いや、何でだよ!?」
　俺は単純に興味ないのだが、こいつがこれまで落としてきた女は数知れず。知り合いに聞いたところ大体の女は落ちたと言っても過言ではないらしい。女尊男卑のご時世で珍しいとしか言いようがない。まぁ、そいつは特殊な事情が事情過ぎて織斑を殺そうとは思わないらしいが。
「それだけ恨みを買っているってことだろ」
「……まぁ、確かに色々したけどさ……」
　おそらくだがその「色々」は喧嘩であって、おそらく恋愛要素はゼロだろう。全く。少しは自覚を持ってもらいたいものだ……持ったらそれはそれで面倒だったりするがな。
「それで、一体何の用だ？」
「久しぶりだしさ。それに……男１人だけど何かと辛くて……」
「……まぁ、そうだな」
　まさかこんなところに入れられるなんて誰も予想していなかったしな。特に成長するにつれて男女はその肉体的特徴の差から着替えも別になるからな。それに珍しいか

らかさっきから視線が凄い。まぁどっちも有名人の弟だし、知られればもっと酷くなるだろうが。

「……で、何の用だ？」

「え？　って、箒（ほうき）か」

「……久しぶりだな、武。そして随分と変わったな」

「そりゃそうだろう。誰しも変わらない奴なんて……あ、一人いたな」

「何で俺を見るんだよ？　俺だって変わるんだぞ！」

「性格そのものは変わっていないだろう？　平和な証拠だ」

……あと、こいつの姉もたぶん変わっていないな。未だにダラけている人間だろうし。まぁ表向きは非の打ち所がない人間という扱いなのだが、織斑千冬の私生活はあまり良くないものだった。正しく性別は逆だが夫婦的な状況にあると言える。

「あー、そのだな」

「……別に俺は良いぞ」

「そうか!?」

「？　何の話だ？」

「織斑がこの窓から飛び降りるか箒が連れていくかの話」

そう言うと織斑は顔を青く。

「そのブラックジョークも相変わらずだな……」
「お前が何かを行動する度に俺は苦労をさせられたんだ。そんな言葉も吐きたくなるさ」
　すると今度は箒までも顔を背ける。コイツも思うところがある証拠だ。
「では行くぞ一夏。時間がない」
「え？　俺はもっと武と――――」
「い、く、ぞ！」
　半ば強制的に箒に連れていかれる織斑の姿を見て内心「ザマァ」と思う。あの男には色々と苦労させられた。無駄に正義感を持ち、それが正しいと信じて疑わない。俺には理解できない行動だ。
　まぁそれでも、俺にとってはマシな感情になれる。どれも本気で言っているわけではないのだから。
『随分とセンチメンタルな雰囲気になっているわね、あなた』
　突然脳内に声が響く。実際はＩＳの機能の一つである個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）が起動したのだが。
『次から次へと、何の用だ？』
『あら、主人が一人で黄昏ているから、気遣いができる超優秀ＡＩちゃんが話してあげて

いるのよ。感謝しなさい』
『……そういうことにしておいてやるよ』
『随分な態度ね。でもあなたにとっては退屈じゃないかしら、この学校？』
『否定はしないな。生徒会長を倒せば新たな生徒会長になれるらしいが、最悪ＩＳ学園が溶けてしまう。かといって織斑千冬が死ねば色々と面倒になるからな。しばらくは休暇のつもりで学園生活を楽しむとするさ』
　と言っても俺は諸事情で中学一年時の夏休み以降はまともに授業を受けていない。そんな俺がまともに授業に付いて行けるかわからないが、まぁなんとかなるだろう。
「――ねぇねぇ」
　ウインドウを開こうとすると、右から誰かが話しかけてきた――ああ、こいつか。
「何だ？」
「何でそんなつまらなさそうにしてるの～？」
「さぁな」
　と適当に返す。そうか。つまらなさそうにしていたのか、俺。
「もしかして、ゆうやんに会えなくてつまらないとか？」
「いや、誰だそれ」
「桂木悠夜、知ってるでしょ～。最近できた魔剣を持ってる人だよ～」

「……まぁな。作ったは良いが誰にも反応されなくて、唯一適合したから持ってる奴だろ？」
「そうそう」
　時代錯誤にもほどがあるがな。大体、現代科学で作った機械剣が人を選ぶってなんだろうな。
『そう言う意味では私たちと似たような存在ね』
『しかも破壊力が高いからな。なんとか倉持技研への襲撃は阻止できたが、あれは本当にマズかった』
　何せそいつが可愛がっている奴の専用機が、織斑の専用機に今まで凍結していたものを渡すのに人手がいるという事で開発を凍結されたのだ。俺も憤慨したが無言で立ち上がって殺気で空間を歪ませるようなバケモノが現地で暴れてみろ。文字通り何人かの人間が破壊される……もちろん、物理的な意味で。
　まぁ俺個人としては別にそれでも良いのだが、今度は俺たちの共通の友人である平坂零司が「じゃあコアだけ頂いて最強のＩＳを作らない？」とか言い出すから宥めるのに疲れた。もう休んでも良いよねパトラッシュ。
「ところで、今どうしているかわかる～？」
「さぁな。俺がこっちに入学するって話になって別れたからなぁ」

というのは建前で、あくまでサプライズしたいから黙ってて欲しいらしいので誤魔化しておこう。

「そっかぁ」

と言ってすごすごと去っていく奴はおそらく布仏本音（のほとけほんね）。確かにある意味危険人物だ。油断していれば浄化されるという話ではあながち間違いではないようだ。……何であれを『究極の女』と言っていたのかは流石にわからなかったが。

しかしあの様子だと、悠夜に対して相当お熱なのだろう。まぁ一見人畜無害そうなアレがキレるとヤバい反面、身内にはとことん優しいからな。

『……なんだか、同情してしまうわね』

『昔かなり癒されたって言ってたからな。別の学校だが親戚関係もあるらしいから』

『しょっちゅう会っていたわけね。……まぁあの人間なら、自転車だろうが手段使わずに行きそうだけど』

『……そういえば昔、零司に色々作ってもらったって言ってたな』

零司が作った奴だからさぞ色々と面白い思いをしただろう。なにせ奴は当時から天才少年だなんだと色々言われていたからな。事情があって今は悠夜と一緒にいる。

『ま、向こうはサプライズで会いたいって言ってたからな。そっちを尊重したい』

『あら。酷い男ね』

『俺は女の敵だからな。だったら敵として潰していってやるさ』

なにせさっきから俺に向けられるのは敵意だけだからな。さっきの奴は例外中の例外だろう。

「よくものうのうと学園にいられるわね」

「女の敵が……」

人の口に戸は立てられぬとはまさにこの事だろう。なにせ俺は色々と前科があるからな。中学一年の時に学校に行かなくなったのは引きこもりとかではなく、単純に暴れてたから。……まぁ、一体どういうことかはわからないが、何故か俺がレイプ魔として扱われているが、れっきとした童貞である。

■■■

篠ノ之箒は兄である武と会話すると少し安心していた。なにせ彼女は三年間、次々と聞こえてくる武の話が信じらなかったからだ。特に武が見ず知らずの女を捕まえては

やり捨てているといったレイプ魔的な件が特に信じられなかったのである。
「久しぶり、箒」
「…ああ。そうだな」
とはいえ今の彼女は一夏との再会を喜ぶだけだ。変わらない兄を見たのも安堵することだが、今は自分の思い人と話せることを嬉しく感じている。
そう。箒はほとんど一般人と言っても過言ではない。両親と同じで、だ。
彼女は知らない。自分の以外は既に――――一般人という枠を超えてしまっていることを。

第２話　ドタバタな日常

国立ＩＳ学園とは、インフィニット・ストラトスという宇宙活動を想定して作成されたマルチフォームスーツの操縦者や技術者を育成するための教育機関だ。そしてＩＳというのはインフィニット・ストラトスの略称。主にその略称の方がよく使われる。

まぁそのＩＳが１０年前に暴れたことで今では宇宙に行かず大気圏内で未だに猛威を振るっているのだが。

「――――であるからして、ＩＳの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したＩＳ運用をした場合は、刑法によって罰せられ――――」

前で行われている説明を聞きながら欠伸をし、とりあえずノートに記載していく。まぁ性なのか自分から見てもかなり綺麗にまとめられるのはもう才能と言って良いのではないだろうか。

ちなみに今はＩＳの運用に関する刑法などを勉強しているが、男として言わせてもらうとこんなものがあるのに何故女性を優遇しており、それに乗っかって奴らが好き勝手出来るのか疑問であるが。

にしても、俺の席が窓側最後列にあるという都合上仕方ないかもしれないが、さっき

から織斑の奴が顔を青くしているのが見える。一体今のどこにわからないところがあるというのだろうか。左にいる女にちょっかいをかけて箒がキレているので、その女子は気の毒でならない。

「織斑君、何かわからないところがありますか？」

「あ、えっと……」

「わからないところがあったら聞いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

山田先生が胸を張ったら胸が揺れた。箒のも大概成長していたが、アレは一体何を食えばそこまでデカくなるのか不思議でならない。ここが一般的な高校で今の世が女尊男卑でなかったら、さぞ彼女は生徒からモテただろう……案外、普通の高校に行ったら下駄箱にラブレターが大量に入っているのではないだろうか？

「先生！」

「はい、織斑君！」

「ほとんど全部わかりません……」

……え？　マジで？

と驚いて俺の視線を織斑一夏（いちか）ではなく、織斑千冬の方に向ける。俺に気付いた奴は首を振っていた。

「え、えっと……織斑君以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか

？」

まぁもちろん誰も手を挙げない。てっきり姉を嫌っている筈もかと思ったがどうやらそうではないらしい。……まぁアイツ、勤勉だしな。恐らく勉強はさせられたのだろうが、それでもしっかりやっていたのだろう。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「……あの分厚いやつですよね」

「そうだ。必読と書いてあっただろう」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

出席簿が振り下ろされたが、まぁこれは仕方ない。

「馬鹿が。後で再発行してやるから、一週間以内に覚えろ。いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと……」

「やれと言っている」

「……はい。やります」

相変わらずの眼力である。あれがなければ多少は男にモテたかもしれないのにとは思っている。

「ＩＳはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥かに凌ぐ。そういった『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解が

できなくても覚えろ。そして守れ。規則とはそういうものだ」
まぁ正論だが、何よりあの女がＩＳを「兵器」と言ったのが驚いた。
「……貴様「自分から望んでここにいるわけではない」と思っているな？」
その言葉を聞いて織斑が冷や汗をかく。まぁ至近距離で睨まれたそうなるわな。
「望む望まざるに関わらず、人は集団の中で生きなくてはならない。それすらも放棄するなら、まず人であることを辞めることだな」
集団、ね。じゃあその集団から弾かれた者はどうすればいいのかね。無理矢理弾かれて未来を奪われた奴らはどうなるのか。撃った人間としては、安らかに眠って欲しいというのが本音だ。
「……どうした、篠ノ之兄」
「？　なんでもないですよ」
たぶん俺は今織斑千冬を睨んでいたな……ヤバい。冷静にならないと。
「え、えっと、織斑君。わからないところは授業が終わってから放課後教えてあげますから、頑張って？　ね？　ね？」
「はい。それじゃあ、また放課後によろしくお願いします」
割と普通の受け答えだったはずだが、それを何と勘違いしたのか、授業を担当していた山田真耶（やまだまや）が妄想を口にしていた。

「ほ、放課後……放課後に二人だけの教師と生徒……。あ！　だ、ダメですよ、織斑君。先生、強引にされると弱いんですから……それに私、男の人は初めてで……」

たぶん俺は今、山田先生をゴミのように見ているだろう。本音を言うなら、これだから女教師は気持ち悪い、だ。

「で、でも、織斑先生の弟さんだったら……」

「――――山田先生、授業の続きを」

「は、はいひぃ!?」

ブタみたいな泣き声をあげたと思ったら尻餅をついた。

「……篠ノ之兄、その目は止めてやれ。山田先生が怯えている」

「…チッ」

舌打ちしてから視線を逸らす。余計な事を思い出させやがったゴミはいずれ始末するとして、今は参考書を読むふりをしてとりあえず勉強を続けることにした。

「頼む武！　勉強を教えてくれ！」

「……はぁ」

あのゴミの妄想の次はこいつかとため息を吐く。何でこうも厄介事が絡むかね。

「大体何で……あぁ、あの女のせいか」
「？　誰の事だ？」
「お前の姉以外誰がいるのか？　どうせ奴の部屋は汚物だらけだろう？」
「俺が掃除してるからそれはねえよ」
　真面目な話、今の女尊男卑の世界でＩＳを動かせなくてもこいつは「主夫」として優秀なんだろうなと思った。
「んで、どこがわからないんだ？」
「え？　良いのか？」
「基本的な勉強は自分でしろ。わからないところがあったら教えてやる。あのゴミ女よりかはまだ俺の方が時間が取れるだろうからな」
「……ゴミ女って、もしかして山田先生のことか？」
「それ以外に誰がいるのか教えて……すまん。かなりいたわ」
　と織斑と会話をしていると、俺たちに誰かが近づいてきた。
「ちょっと、よろしくて？」
「へ？」
「あ？」
　俺が返事を返すとその女は何故か怯んでいた。

「き、聞いてます？　お返事は？」
「あ、ああ。聞いてるけど……どういう用件だ？」
俺よりも先に織斑が答えると、その女は今の女にありがちな態度を見せてきた。
「まぁ！　なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけらえるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度という者があるんではなくって？」
思い上がった家畜風情が何を言っているんだという言葉を呑み込んで冷静に応対する。
「知ったことか。そもそもアンタ誰だよ」
「わたくしを知らない？　このセシリア・オルコットを？　イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを!?」
「知るわけないだろ。自国の国家代表すら知らねえし」
数年前に織斑千冬が引退したことは知っているが、その後窯までは知らない。
「あ、質問いいか？」
「ふん。下々の者の要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」
「……代表候補生って、何？」
それを聞いた周りはこけた。それもまぁ盛大に。
「あなた、本気で仰ってますの!?」

「おう。知らん。なぁ武、代表候補生って知ってる？」
「お前の姉ちゃんが国家代表だっただろ？　その代表になろうとＩＳ学園に入学する前に政府の育成機関の試験に合格して鍛えている奴らのことだ」
「そう。つまりエリートなのですわ！」
　豚の肥やしの間違いだろう、とは言わないでおこう。そしてオルコットは俺たちに人差し指を向ける。
「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……いえ、幸運なんですのよ。その現実をもう少し理解していただける？」
「そうか。それはラッキーだ」
「そういうことにしておいてやるよ」
「……馬鹿にしていますの？」
　当然だろ？　そもそも代表候補生とクラスメイトになるより男性ＩＳ操縦者とクラスメイトになる方がよっぽどレアだろうに。
「大体、あなたＩＳについて何も知らない癖に、よくこの学園に入れましたわね。男でＩＳを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたが。もう一人はそれなりにあるようにですが、なんとも悪い態度のこと。どちらも期待外れですわね」

「……俺に何かを期待されても困るんだが」
「そりゃこれまでの人生で最悪な環境にいたからな。当然だ」
　俺の物言いに一瞬怯んだオルコットだったが冷静になって対処をした。
「ふん。まぁでも？　わたくしは優秀ですから、あなた方のような人間にも優しくしてあげますわよ」
　それが本当に優しさだと思っているのかね。
「ＩＳの事でわからないことがあれば、まぁ泣いて頼まれたら教えて差し上げても良くってよ。なにせわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」
「いらねえよ」
　さっきからごちゃごちゃと五月蠅い奴だ。そのうざったい口を二度と利けなくしてやろうかと思っていると、織斑の口からとんでもないことが聞こえた。
「入試ってＩＳを動かして戦う奴だよな？　それなら俺も教官倒したぞ？」
「は……？」
　ショックで固まるオルコット。
「わ、わたくしだけと聞きましたが？」
「女子ではってオチじゃないのか？」
「も、もしやあなたも教官を倒したとでも仰るつもり?!」

「そもそも俺は戦ってないがな」
　そう答えるとオルコットに激怒した。
「入試を受けていない!?　よくこの学園に入学できましたわね!?」
「そりゃそうだろ?　これまで動かせなかった男がＩＳを動かせたんだ。それで保護のためにとりあえずＩＳ学園に入学させるのはある意味当然だろう?　それとお前はＩＳを動かして試験も受けていないのだからとっとと辞めて研究所にでも入れって言うのか?　まさか国家代表候補生ともあろう者がそのような事を言うまいな?」
「……それは、そうかもしれませんが」
「そもそもこの学園は在籍人数に対して学園の所有するコアは圧倒的に少ない。ただでさえ一人目の対応を終えたと思ったら入学式間近で今度は二人目だ。そう簡単に予約が取れるわけでもないしってことで試験は延期という事さ」
　それに俺と会った時の織斑千冬の反応が「お前もか……」だからな。自分の弟が動かしたから、もしかしたらとでも思ったのだろう。その後に楓を見て真顔になったのは笑ったが。
「そ、そういうことならば仕方ありませんわね。ええ、仕方ありませんわ」
　と納得するオルコット。するとすぐにチャイムが鳴り、織斑先生が教壇に昇った。

授業が終わり、俺は寮に戻る――――のではなく、校舎から離れた場所に来ていた。そこは用務員用の家屋になっており、基本的に男禁止の女の園で唯一男がいられる場所でもある。まぁそれは去年までの話なのだが。

俺はドアのチャイムを押すと、インターホンから老人が漏れる。

「篠ノ之です。挨拶に伺いました」

『そうですか。ちょうど話がしたいところだったのです。鍵は開いていますので中に入ってください』

「わかりました」

ドアを開いて中に入ると、用務員の姿を初老の男性がいた。彼がＩＳ学園にいられる理由は彼が実質的にこのＩＳ学園を運営する人間だからだ。

「数日ぶりですね、篠ノ之君。クラスには馴染めましたか？」

「……わかってて言っているでしょう？」

そして俺が敬語で話す数少ない人間の一人でもある。

「そうですね。あなたのような人間は本来ここにいるべきではないことは重々承知しています。ですが――――」

「両親と楓を守るため、ですからね。僕はそれで構いません」

「『俺』で結構ですよ」
「では遠慮なく」
流石に「僕」は堅苦しいからな。これまで大人の事を見下してきた身としてはかなりやりにくかったというのが本音だ。ちなみに彼は轡木十蔵（くつわぎじゅうぞう）。入学の際に色々と世話をしてくれた方だ。
「それで、久々の学校生活はどうでしょう？　慣れましたか？」
「……正直、彼女らのような奴らが女尊男卑を持ち出すのは滑稽だなと思いますね。確かに生身でも強いは織斑千冬の用に何人かいることは否定しませんが、すべてそうだとは思いません。もっとも俺はあの程度の烏合の衆は簡単に消せますが」
「……まぁ、そうなりますよね。ですが止めてくださいね。試合で機体を破壊するならばともかく」
「……しちゃっていいんですね、それ」
これは良いことを聞いたと思った。
「ええ。構いません。私も少々憂さ晴らししたいのでね。何でしたらちょうど五月蠅い小娘が一組にいるので遠慮なく潰してあげてください」
「……えーと」
どいつの事だ？　と聞く前に轡木さんが教えてくれた。

「イギリスの代表候補生です」
「……ああ。あの金髪ドリル」
確かにあの女も大概だったからな。……まぁ、代表候補生の実力も知っておきたいし、やるにはちょうどいいだろう。
「ところであなたはハーレムを作る予定はありますか？」
「……俺みたいな人間を愛せる女なんて、この世界にいませんよ」
そう言った俺はしばらくしてから用務員室を後にした。

さて、これは一体どういう状況なのかね。
寮に戻るとその道中で人だかりができていたので退いてもらいながら進んでいると、顔を青くしている織斑と遭遇した。
「頼む武！　助けてくれ！」
「助けろって……」
と、ドアを見ると、木製のドアから木刀みたいなのが生えていた。
「…誰が同居人だ？」
「箒なんだよ!?　それで色々あって、こんな風になって――――」

「……あの馬鹿」
　ここの寮長、誰かわかってんのか？　織斑千冬なんだぞ。つうか一体何をすれば木刀でドアを貫通する事態に発生するんだか。
「おいこの馬鹿！　一体何考えてんだよ！」
「い、いきなりドアを開けるな！　馬鹿者！」
「ドアを木刀で貫通させる奴が何を言うか!!」
　全く。この妹は……姉は姉で面倒だがこれはさらに面倒だ。
「というかさっさと服着ろよ」
「言われなくてもわかっている!?」
「じゃあさっさと着ろよノロマ」
　後ろに付いて来ている織斑の頭を掴んで俺はそのまま寮長室に案内した。
「とりあえず、ここにいる奴に話をしてドアを変えてもらえ。俺は部屋に戻る」
「そういえば、武の部屋ってどこにあるんだ？」
「言う必要はないだろう。ああ、それとその部屋の主はお前の姉だからな」
　と言うと織斑の顔が青くなったが、そんなの知ったことかと俺は自分の部屋に急ぐのだった。

第３話　武の異変

翌日、朝のＳＨＲで織斑先生が「重要事項がある」というので耳を傾けると「クラス代表を決める」という事だった。今日から早速朝から授業なので楓を適度に愛でて寝たが、足りないようだ。

「クラス代表とはそのままの意味だ。来月に行われるクラス対抗戦に出るだけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席など、まぁクラス長のような仕事をしてもらうつもりだ。ちなみにクラス対抗戦とは、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点で大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まるとよほど悪い事をしない限り変更はないのでそのつもりで選んでくれ」

と言われているが、どう考えてもこいつらは本気で考えるつもりはないだろう。

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「私もそれが良いと思います」

早速出たのは織斑だった。なるほど。それは良いかもしれないな。いざとなれば操りやすいし。しかしこの推薦で一番面白くないと思う奴がいるだろう――――オルコットだ。

さっきから自分が推薦されないことが原因でこめかみに筋が入っている。
「じゃあ私は篠ノ之君を推薦します」
それもある意味アリかもしれないな。なにせクラス対抗戦の優勝賞品はデザート半年フリーパスだ。楓の奴が喜ぶだろう。クラス代表の機体は会敵破壊だろうが。
「何でそいつなのよ！　そんな危険人物！」
「でも実績がある分、クラス対抗戦には勝ち残ってくれそうじゃない」
「でも……」
そんな会話が聞こえてくる。織斑も俺の方を不思議そうに見ていた。どうやら奴は何の話をしているのかわかっていないらしい。
「では候補者は織斑一夏と篠ノ之武だな。他にいないか？　自薦他薦は問わないぞ」
「……って、俺!?」
むしろこのクラスにお前以外の織斑はいないだろうが。
「織斑、席に着け。邪魔だ。さて、他にはいないのか？　いないならこの二人で決選投票をしてもらおう」
「ちょ、ちょっと待った！　俺はそんなのやらないし、武の方が絶対適任――――」
「あながち間違いではないが、自薦他薦は問わないと言った。他薦された者に拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

というか今あの女サラッと自分の弟の意見に同意した!?　適任って何!?　確かにフリーパス手に入れるなら俺の方が適任なのは否定しないがな！

「――――待ってください！　納得がいきませんわ！」

机を叩いて立ち上がるオルコット。一体この選出に何の不満があるというのか。

「そのような選出は認められません！　大体、男がクラス代表だなんて良い恥さらしですわ！　わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと仰るのですか!?」

突然大胆な事を言い始めたな。周りにいる奴も何人か同意するように頷いている。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを物珍しいからという理由で極東の猿どもにされては困ります！　わたくしはこのような島国にまでＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ!!」

……は？　さっきからこいつ何なの？　テメェの国も島国じゃねえか。しかも何でサーカスになる。俺たちが操縦したところで道化そのものだとでも言いたいのか？

「良いですか!?　クラス代表は実力トップがなるべき。そしてそれはわたくしですわ！」

『……さっきから五月蠅いわねあの小娘。潰してやろうかしら』

『お前がそれをするとシャレにならねえし、そろそろ動き出す奴がいるから大丈夫だろ』

と答えを返すとオルコットがある意味最悪な事を言った。
「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくていけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――――」
「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」
そこで料理の話題を出すとか、流石は織斑と言わざる得ないな。果たしてその発言は良いことなのかはともかく。
「あなたねぇ！　わたくしの祖国の侮辱しますの!?」
「先に言って来たのはそっちだろ!?　武！　お前からも何か言ってやれ！」
そこで何で俺に振られるのか甚だ疑問なんだが。オルコットもこっちが何か言うのを待っているようで睨んでくる。
「……まぁ、ヒートアップする気持ちはわかるが、とりあえず――――」
「決闘ですわ!!」
冷静に話し合わせてやろうとしたらこれである。まぁこれはこれで都合が良いが。
「おう。良いぜ。そっちの方がわかりやすい」
「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い――――いえ、奴隷にしますわよ」
「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「ま、何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会なのですから！」

一体素人相手にどんな実力を示すかを突っ込んだ方が良いかと迷っていると、織斑が余計な事を言いだした。

「ハンデはどのくらい付ける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、俺がどのくらいハンデを付けたら良いのかなー、と」

途端に教室中に笑いが起こる。

「お、織斑君。それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「織斑君は、それは確かにＩＳを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよ」

織斑千冬から視線を感じたのだが、俺はそれを無視した。何か言いたくなる前に釘を刺そうとしているのだろう。ちなみに布仏は一緒になって笑っているが、見た目だけで目は全く笑っていなかった。女の世界は恐ろしいからそれに合わせているだけだろう。昨日俺からさらに問い詰めようとしなかったことから、その気は元からないのだろう。

「……じゃあ、ハンデは良い」

「ええ、そうでしょうそうでしょう。むしろ、わたくしがハンデを付けなくていいのか迷

うくらいですわ。ふふっ、男が女より強いだなんて、日本男子はジョークセンスがあるのですわね」
「――くっだらねぇ」
『あら、やっとかしら？』
　向こうからワクワクする様子が聞こえてくるが無視だ。
「何が下らないんですの？　先ほど宥めようとするような腰抜けの癖に」
「腰抜けねぇ。それはお前らだろ？　ＩＳを使わなければ男に喧嘩を売れないゴミ共が」
　途端にさっきまで高揚していたムードは一変して冷めてしまった。というか醒めてしまったというのが正しいか。
「何ですって？」
「では逆に聞くが、そこの人間を超越する代わりに男性が女性に求める一般的な技能を完全に捨て去ったメスゴリラはともかく、他の大した訓練も受けていない女が訓練された男に敵うと本気で思ってんの？」
「と、当然ですわ！　それに今は女の方が――」
「優れているって？　じゃあ何で軌道エレベーターはないの？　優れているなら今頃宇宙艦や宇宙ステーション、月や火星のテラフォーミングも終わっているはずだよな？

女性優遇制度を施行した結果がこれだぜ？　十年もあって高がこの程度の成果しか出せない無能な上、子孫も残そうとしない女に一体何の価値があるってのさ？　女性優遇制度に賛同するっていうのはつまりそういうことだ。未だに重力に魂を引かれた哀れなゴミ共が。お前らの価値はお前らが嫌う男と同等なんだよ」

「黙りなさい！　わたくしたちはＩＳを動かせますわ!!」

「それで今では兵器となったＩＳを動かして何をするの？　兵器は兵器らしく人を殺す？　さぞ大量の汚い花火を見れるだろうなぁ」

　なんて言っていると俺に近づいてきた織斑千冬が拳を振り下ろしたが、それは空中で止まった。

「……何をした？」

「ただバリアを張っただけ。俺は箒と違うんでね。備えあれば憂いなし。むしろこれくらい、ＩＳ使わなくても普通に展開できるでしょ？　できない方がおかしいんだけど」

「……全く。言い過ぎには気を付けろ。お前のさっきの言葉は度が超えている」

「知ったことかよ。言われたくないならやればいい。見下されたくなければ潰せば良い。それだけだ。余計な口を開くから論破される。そして暴力に訴えてくる奴らは本当に――――弱すぎた」

　一時期騒ぎになったが、あっさりと鎮静化したからなぁ。やっぱりあの辺り一帯の奴

らを潰したのが原因かなぁ。
「まぁいい。これ以上余計な騒ぎは起こすなよ」
「どうだか。俺を御したいって言うなら生身で実力を示せば良い」
「……お前を暴力で御したら、ＩＳ学園が半壊するだろうが」
「へー。アンタもそんな評価だったとは、そりゃ意外だったな」
「お前の異質さを考えればそれくらいはな」
だが決して間違いだというわけではないんだけど。
「さて、話は終わりだ。勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコット、そして篠ノ之兄はそれぞれ用意をしておくように」
と言って締めくくられたＳＨＲ。俺に視線が集まっていたが俺はスルーしていた。

「どういうつもりだ、お前は！」
三時限目が終わったところで箒が現れた。
「織斑の所に行かなくていいのか～？」
「そんなことよりも貴様だ！　まさか離れている間にあんなことを考えているとはな!!」

「いやいや。妥当な思考でしょ。男女間の一番の特徴は子どもを孕ませるか産むかの違いなんだ。だったらそれを放棄する女は男と何ら変わらないどころか、身体能力を加味すれば劣化版でしょうが。実際大したことない奴ばかりだったし」
「もうやったのか?!」
「……あのさ、「自分たちが強い」とか言っておいて「暴力反対」ってのが無理あるだろ。男の風上に置けないとかそう言うレベルじゃねえよ」
　しかも質が悪い事に、そう言う奴って大体は既に屈強な奴が味方だったりするんだ。さぞカツアゲし放題だったろうね。それが今度は自分たちがされる番になるとは思わなかっただろうが。
「やっぱり何事も平和が一番なんだよなぁ。男にも女を選ぶ権利はあるっての。つうかそれまで否定されたらそれこそ戦争待ったなしだぞ」
「……よくそんなことを簡単に言えるな、お前は」
「男って立場は色々と苦労するのです。偉い人にはそれがわからんのですよ」
　半分近く的に返しているのに気付いた事に気付いた箒は頭を抱える。
「……全く。この先ちゃんと生きていけるのか、お前は……」
「心配ご無用。むしろ箒がちゃんと生きていけるか心配だなぁ。箒レベルなんてそこらにゴロゴロいるし、簡単に死んじゃいそうだ」

「……あ？」
「いや、そりゃそうでしょ。もしかして姉貴の失踪でまだ家族バラバラにされたこと怒ってる？」
「当然だ！　アレのせいで私たちがどれだけ迷惑を被ったか！」
　どうやら姉に対する怒りはかなり高いようだ。まぁ筈だし仕方ないか。
「むしろ俺は感謝しているさ。おかげで俺は真っ当な人間になれたから」
「何？」
　なんて会話をしていると前の方で織斑が叩かれていた。迂闊な発言をしたせいだろう。
「ところで織斑、お前のＩＳだが準備まで時間がかかる」
「え？」
「予備機がない。だから、少し待て。専用機が用意されることになった」
　すると教室にいたクラスメイト達が騒ぎ始めた。
「専用機!?　一年の、しかもこの時期に!?」
「つまりそれって政府からの支援が出てるってことで……」
「ああ～。いいなぁ……。私も早く専用機欲しいなぁ」
　だが何故か織斑はわかっていないらしい。アイツにちゃんと竿があるのかと疑問を

感じてしまう。
「織斑、教科書六ページを……いや、ここは篠ノ之兄。前に出て説明しろ」
「……は？　何で？」
「あれだけの事を言ったんだ。少しはマシな授業ができるだろう」
とニヤニヤしながら俺を見るメスゴリラ。まだゴリラ扱いされていることが気に食わないらしい。……やれやれ。全くあのゴリラは。
俺は前に出て教壇に昇って説明を始めた。
「さてと、まず専用機云々に関する前にＩＳコアについて触れておくか。さて織斑、今世界に判明している存在するＩＳコアはいくつだと思う？」
「……えっと、たくさん？」
「その後ろの奴。答えて」
「４６７個」
「常識の範囲だな。ちなみに「低俗な漫画を読む[467]な」の方式とか言って男子が読んでいたひと昔前のラノベを破いていた奴がクラスにいたが、その結果が今の世界だからな。Ｒ―１８はまだ早いが、ロボット系の漫画を読めばこの世界の技術がどれだけ遅れているか理解できるからな」
そう言って俺は電子黒板に「ＩＳコアの数（約）４６７個」と書く。

「さて、織斑。ＩＳコアを作成できる人間は世界に一人しかいないが、そいつの事をフルネームでなんという？」
「え？　そりゃあ……篠ノ之束さん――――」
「おしいな。後は（通称・人格破綻者）と入れるべきだ。まぁテストでそんなことを書いている奴がいても点数もらえないけどな」
　と言ってコアの数の隣に「唯一の製作者：篠ノ之束」と書き足した。
「んで、この馬鹿が作ったコアは５年前の失踪を気に本格的に世界に管理されるわけなんだが、それぞれの国、そして国から企業や組織などに割り振られてコアの複製を行うための研究や操縦者の育成が行われているわけだ。実質的な無限エネルギーや絶対防御などの機能、それに加えて人格を持つんだからな。そう簡単に開発できるわけないのだから、十年も経つし教科書もあるんだからそろそろ絶対防御の実現やＰＩＣなんて捨てて人型兵器を開発した方が良いに決まってるのにな。どうせアルビオンとか聖天八極式とか出るんだし。…あ、でもＰＩＣなかったらレーヴァテイン作れねぇか」
「いや何の話!?」
　織斑から突っ込まれたが無視した。いやなんとかドライバ使って無双したいじゃん。原理が違う？　なんちゃってで良いんだよ!!
「まぁその話は置いといて、本題に入るがＩＳが開発されるパターンとして主に２つの

パターンが存在するんだ。そのパターンは主に試作機と量産機。今の試作機は主に今話題の第三世代兵器を搭載されている機体が主だな。俗に第三世代兵器という奴だ。まぁ興味ないからそこまで調べちゃいないからどんな兵装かまでは知らないが、今各国の主流は主に第三世代兵器搭載機の開発と運用で、運用も精々試験的な運用程度となる。そして量産機……って織斑、大丈夫？」

「……わからん」

「ＯＫ。じゃあ簡単に説明すると、試作機は死ぬ可能性が高い機体。量産機は超安全と思っておけ。それで大体行ける」

「適当過ぎるわ。馬鹿者が」

「どっかの馬鹿が無駄に殴った結果だっての。これに懲りたら少しは暴力は控えろよクソゴリラ」

「やっぱり私の事を言っていたのか。後で覚えておけよ」

「それはこっちの台詞だアホが」

　そう返すと織斑が何が言いたそうにしているがとりあえず無視しておいた。

「さて、量産機の方に話を戻すけど、これは大体安全面が正面された状態……イメージするなら簡単に乗れるように、一定のバランスに調整された機体だな。代表候補生になった後は大体この機体で操縦訓練を行うわけ。で、量産機でもカスタム機が存在するんだ

けど、ここでいったん区切るとしよう。ここから先に突入した止まらなくなるから」

あと、ＩＳから脱線するから。

「あとこれはおまけだけど、例外として「その人間専用」の機体だったり、「技術者の趣味全開で作られるたった一つの機体」という意味での専用機が存在することもある。だけど今のところ、ＩＳにはそういうものはなかったはずだよな、ブリュンヒルデ」

「その呼び方で呼ぶな。……まぁそうだな。私の「暮桜」も一応は試作機的な位置に当たるからな」

「でも専用機だと最後にはワンオフ機になる仕様になるから、「その人間専用」機は作る意味ないから、あるとすれば「技術者の趣味全開で作られるたった一つの機体」の方になるわけ」

ちなみにあのクソ姉の場合はそう言う機体を作ろうとしているんだが、止める術はないだろう。諦めろ。

「話をコアの方まで戻すと、ＩＳコアは主に国によって管理され、学園入学前に専用機を手に入れるには高い適性と厳しい訓練の果てとコネでなれる「代表候補生」もしくは「企業代表者」になる必要があるが、織斑はそのどちらにもなっていないイレギュラーな存在で、本来ならＩＳを預けられる立場じゃない。だけどこれまで動かせられなかった男の貴重な操縦データが欲しいから渡されるってわけ。わかったか？」

「ああ。……ん？　じゃあ武にもＩＳが渡されるのか？」
「断ったからそれはない」
「何?!」
　何故そこでアンタが驚くと言いたくなって織斑千冬の方を見る。
「正気か？　というか、そんなわがままが通じる立場じゃないだろう!!」
「え？　あの程度の機体スペックで動かせとか言うなら、俺は今すぐＩＳ学園止めてＩＳを擁するすべての国を滅ぼすよ。ビーム兵器すら量産されていないって何？　兵器として見ていてその程度かよって大森林できるぐらい笑ったわ」
　何せひとしきり笑った後の俺の発言が「うん。この程度で女が強いと擁護するんだから、もう地球なんて滅ぼした方が良いな」だからなぁ。あの時の轡木さんの引いた顔は印象的だった。
「それにこれは世界に通達済みだから。「ＩＳ送ってきてもコアだけ回収してガワは解体しておく」って」
「ふざけているのか、お前は」
「至極真面目だが？」
『当然の判断よねぇ？』
　まぁ、そもそもどっちを先に渡すかで揉めていたらしいから、しばらくすると黙った

んだけど。特に俺って色々なところから危険人物扱いされているからなぁ。
「あ、あの、織斑先生……」
織斑の列に座る女生徒の一人が挙手して発言する。
「篠ノ之さんと篠ノ之君って、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか？」
もしかしなくてもそうなんだが、この女は何と答え――――
「そうだ。こいつらはアイツの弟妹だ」
あっさりバラシやがった!?
まぁどうせすぐばれるし……というかこれまで何度かバレてきたから当然と言えば当然かもしれない……が、よくよく考えればおかしいことだと考えたところまでは良かったが、女たちの爆音に中断された。
「えええええっ?!　す、すごい！　このクラス、有名人の身内が三人もいる！」
「ねぇねぇっ、篠ノ之博士ってどんな人!?　やっぱり天才なの!?」
「篠ノ之さんも天才だったりする!?　今度ＩＳの操縦教えてよっ！」
「って言うかアンタ、篠ノ之博士にコネがあるんだったらＩＳコアを寄こしなさいよ！」
と言った奴が俺に近づいて来た瞬間、俺は怯ませた。
「あの人は――――」
「ひっ!?」

「何をしている、篠ノ之兄！」
「……あ、あれ……？」
　いつの間にか俺の右手には銃が展開されていた。睨みを利かせていただけなのに……ああ、トラウマか。
「あなた、あれだけの事を言っておきながら人に兵器の一つである銃を向けるなんて、一体どういう神経を――――」
「――――ごちゃごちゃ喚くな。男に武器を向けられるのは、お前ら女が行ってきたことの代償だ」
　そう言って俺は教室を出る。
「気分が悪いから落ち着かせて来る」
　念のため告げておく。ああ、ヤバい。今すぐにどうにかなってしまいそうだ。

第４話　そして始まるクラス代表決定戦

屋上で寝ていたら少しは楽になったので教室に戻ると、織斑が箒に投げられていた。
「……何やってんの、お前ら」
「あ、武！　戻ってきたのか!?」
「……多少はマシになったからな」
楓が心配するから部屋には戻れないから仕方なく屋上だったが、誰かが近づいて来たので全力で吹き飛ばして教室に戻ってきたわけだ。
「え、えーと……」
「私たちやっぱり……」
「え、遠慮しておくね……」
それを見て俺は一言。
「明らかに避けられているな、箒」
「ふん。貴様のことだろう。女に銃を向けるなど」
「……ああ。まだ抜けていなかったと驚いている」
てっきり克服したと思っていたからな。まさかあの発言が今も引きずっているとは

思わなった。
「抜けてなかった？　薬でもしていたのか？」
「く、薬って武!?　そんなこと止めろよ!!」
「最初からしてねえよ」
　とりあえず飯に行くので学生証が入った財布を持ってポケットに入れると、箒を連れた織斑が付いてくる。俺は適当に食事を選んで空いている席に着くと、それに習うように織斑と箒がやってきた。
「それでどうしたんだよ武。さっきの状態は普通じゃねえよ」
「……だろうな」
　そう返すと織斑と箒が沈黙する。そして箒は何かを察したのか食事を進めた。
「そうだ箒、武。俺にＩＳの事、教えてくれないか？　このままじゃ来週の勝負で何もできずに負けそうだ」
「下らない挑発に乗るからだ。馬鹿め」
「敵に教えを乞うって、どうなの？」
「そこをなんとか、頼む」
　……まぁ、箒じゃ無理か。それに女に教えてハニトラされるよりかマシだろうし……と思った俺が返事をしようとする前に誰かが割って入って来た。

「ねぇ。君たちって噂の子たちでしょ」
　そいつは見覚えのない奴だったが妙に馴れ馴れしかった。
「は、はぁ……たぶん」
「代表候補生の子と勝負するって聞いたけど、ほんと？」
「はい、そうですけど」
「でも君たちって素人だよね？　ＩＳ稼働時間っていくつくらい？」
「いくつって……２０分くらいだったと思います」
　そう言えば俺の稼働時間っていくつくらいだったっけ。
「数秒」
　何か視線を向けてきたから適当に答えた。たぶん絶対それはないがな。
「それじゃあ無理よ。ＩＳって稼働時間がものをいうの。その対戦相手、代表候補生なんだから軽く３００時間くらいやってるわよ」
　それがどうしたって話なんだが、まぁそれはともかくだ。
「でさ、私が教えてあげよっか？　ＩＳについて」
「はい、ぜ――――」
　俺はすかさず割って入った。
「止めとけ織斑。この手の女は大体身体目的だ。特にお前は織斑千冬の弟って立場だけ

じゃなくて今では「男性ＩＳ操縦者」という立場もあるんだぞ。そいつにどんな後ろ盾があるかわからない以上、安易に関わることはお勧めしない」
「いやでも、いきなり現れて俺たちにオルコットとは違うちゃんとした優しい先輩なんだぞ!!」
「ああ、それはまずない。箒みたいな堅物女ならばまだ希望はあるかもしれないが、人間というのは大体何かを企んでいる生物なんだ。特に年上の場合は力や武器でどうにかできると思っているから色仕掛けをしてくるし、もし失敗しても男が悪いように仕向けることができるから有利な立場に立てるんだ」
「……まるで経験したような言い方だな」
「経験済みだ。まぁもっとも、俺を襲ってきた奴は両耳を飛ばされたことでパニックになり、いきなり家を飛び出して階段のところで足をくじいてそのまま転落。逃げる時に奇声を上げて逃げ去ったから注目を浴びたから緊急搬送されたけど病院で死んだって」
　一気に食堂が静まり返った。不謹慎だったかと思ったが、そうでもないなと思い返して食事を続ける。
「……つまり、それくらい警戒しろってことだ。姉に迷惑かけたくないだろ?」
「……ま、まぁ。でも、もしかしたらこの人は良い人かも――」
「それで付いて行って、なんやかんやで遺伝子情報が漏れて姉に尻拭いさせるんだ。第

二回モンド・グロッソの時のように」
「!?　何でそれを知ってるんだよ?!」
「……さぁ」
　あの時の電撃引退はどういうことかと思ったら、適当に言っただけなのにまさかビンゴだったとは。
「つまりはそういうことだ。女を簡単に信用するという事は、それはそのまま織斑千冬に尻拭いをさせるという事になる。ま、そうしたいなら止めやしないけど」
「……すみません。やっぱりいいです」
「ちょ、ちょっと、私の方がＩＳに詳しい――――」
「だったら宇宙世紀かコズミック・イラ。あ、それともアフター・ウォーの方が良い？　でも個人的に女ウケが良いと思うのは西暦か」
「な、何の話よ!?」
「アニメの話。あ、もしかして事動かすだけなら別に授業を受ける必要がなくても強くなれるって知らない？　そんな簡単な事すら知らないってハッキリ言ってド素人じゃん」
　てっきり詳しいというから少し言ったらこれだよ。決してマイナーというわけではないんだから多少わかる人がいても良いくらいなのに。

「も、もう良いわよ！」
そう言って去っていく女生徒。全く。あれくらい付いてこれない女に一体何の価値が――
「――さっきの話、詳しく」
「……また今度で」
別の女が釣れたが、その女は別の意味で危険なのでしばらく逃げることにした。

放課後。俺は剣道場に足を運んでいた。というか箒に連れてこられた。
「どういうことだ」
「いや、どういうことだって言われても……」
「どうしてここまで弱くなっている!?」
どうやら箒は織斑が弱くなっていることが不服だそうだ。
「受験勉強をしていたから、かな？」
「……中学では何部に所属していたんだ」
「帰宅部。三年連続皆勤賞だ」
へぇ。凄いな。こちとらまともに学校に行っていないと言うのに。

「鍛え直す！　ＩＳ以前の問題だ！　これから毎日、放課後三時間、私が稽古を付けてやる!!」
「え？　それはちょっと長いような……っていうか、ＩＳの事をだな」
「だから、それ以前の問題だと言っている！」
膝の上の所に何か重みを感じつつ、それが楓のモノだと知ると俺は頭の部分を軽く撫でる。透明化していても流石にわかるし、専用の眼鏡があるからな。確認したらちゃんと楓だった。
「情けない。ＩＳを使うならまだしも、剣道で男が女に負けるなど……悔しくはないのか、一夏！」
「そ、そりゃ……まぁ、格好悪いとは思うけど」
「格好？　格好を気にすることができる立場か！　それとも、なんだ。やはりこうして女子に囲まれるのが楽しいのか？」
俺はそっと楓を降ろして少し立ち上がる。まぁなんというか……慣れだな。
「楽しいわけあるか！　珍動物扱いじゃねえか！　その上、女子と同居までさせられてるんだぞ！　何が悲しくてこんな――――」
「わ、私と暮らすのが不服だというのかッ!!」
俺は一気に距離を詰めて振り下ろされる箒の竹刀を蹴り飛ばした。それなりに飛ん

だ竹刀は床に落ち、転がっていく。
「……は？」
蹴り飛ばした右足を床に付けてからため息を吐く。
「……当然だろう？　お前たち女はそれほどの事をしたんだ。以前までの事を平然としても「心が弱すぎるのが悪い」なんて理由で被害者を責めるのが世の常と化したんだからな。つうか男にとって今の女ってそれほどメリットないんだよ」
そう言って織斑を立たせた。
「武……お前……」
「さて、箒も冷めたことだろうから率直に言うが、１時間だ。それ以上はまかりならない」
「貴様には関係ないだろう。それに今度の試合では敵だ！」
「別に良いけど、このままだと織斑は何もできずに敗北する」
「何を馬鹿なこと。貴様も初心者だろう」
「……あ、そう」
それだけ言って俺はそのまま回れ右をして手を振る。
「ま、精々楽しみにしているさ。織斑がまともに戦えるようにな」
仕方なく付き合ってやったが、どうやら手加減はいらないらしい。さて、本気出すか。

「……お兄ちゃん、どうしたの？」
「うん？　別になんでもない。ただどこぞの馬鹿にテメェの知識がどれだけ乏しいのかを教えてやろうと思ってな」
「……箒お姉ちゃん……」
少し悲しそうな顔をする楓をひとしきり愛でた後、俺は手加減を一切止めて本気を出していくのだった。

そんなこんなで月曜日の放課後。俺は第三アリーナのＢピットでＩＳスーツに着替えていた。隣には透明化した楓がいて、さっきから俺が触っている投影型ディスプレイを見ている。
「邪魔するぞ」
そう言って入って来たのは織斑先生だった。
「アンタの弟はＡピットじゃなかったか？」
「……お前の様子を見に来たんだ」
気遣いにでも来たのだろうか？　だとしたら余計なお世話なんだがな。
「そこにいるのは誰だ？」

「？　何の話だ？」
　惚けるが彼女にはこういう事は効かないことはなんとなくわかっていたので、楓にそこから離れるようにハンドサインを隠れて出す。
「？　気の、せいか？」
　楓はこういう回避能力は長けているからな。それに慣れているという事もあって織斑先生も誤魔化せたようだ。
「気のせいだろうよ。さっきからここには俺一人しかいないんだからな」
「……それはそれで寂しいな」
「別に気にしないさ。あんな発言ばかりしていれば誰だって寄ってこない」
「だったら謝ったらどうだ？」
「ああ、それは無理。それに謝るとか何の冗談だ。それなら最初からあんなことしないし、何よりあんな馬鹿げた女共に頭を下げるのは気に食わない」
　別に俺がすべて悪かった上での話ならまだ理解して仲良くしていたかもしれないがな。
「……変わったな、武。少なくとも昔はそうではなかったはずだ。それにお前は束に懐いていたはず。一体何があったんだ？」
「色々さ。それも人格が変わる程の経験、な」

「それはお前がレイプ魔と呼ばれる程の――――」
俺は奴の首を掴んで壁に叩きつけた。戦士の性なのだろう。咄嗟に防御はしたらしいが、俺がそれ以上に早く動いたため満足にはできなかったらしい。
「発言には気を付けろ。俺はアンタの弟と違ってアンタを殺すのは躊躇いはない。他の豚共と同じく四肢を潰してやっても良いのだぞ?」
「……武……お前……」
首を離して織斑千冬を解放する。同時に搬入口が開いてＩＳが現れた。
「……お前用のＩＳだ。どちらか使え」
「……まさか本当に用意されるとはな」
「……いらないのか?」
「ああ。不要だ」
そう言って俺は自分のＩＳを展開した。全身のほとんどを追加装甲で覆われており、外からは顔を視認できなくなっている。
「……何故、持っている!?　……いや、お前のことだ。秘密裏に束に――――」
「もらったとでも。生憎俺は、コアも機体もあの姉からは直接貰っていないさ」
脚部装甲をカタパルト射出機構に接続。すべての起動が確認され、上部に設置された文字が「ＡＢＯＲＴ」から「ＬＡＵＮＣＨ」に変わった。

「篠ノ之武、銃姫（ガンプリンセス）、出る！」

機構が動き、俺たちを空へと打ち上げる。先にオルコットと織斑が出ていてこれで役者が揃ったことになる。それにしても、この人数はまさか学園中のほとんどが集まっているのか？　クラス代表を決めるだけの戦いにこれだけの人員が現れるとは。どいつもこいつも馬鹿ばかりだな。

「その機体……まさか、専用機を持っていましたの!?」

「まぁな」

「ですがあなた、専用機を断ったと言ってたじゃないですか!?」

ギャアギャア喚くオルコット。正直クソ五月蠅い。さて、どうやってこの場を答えようかと考えていると、オルコットの口から聞きたくなかった言葉が出てきた。

「ああ。そう言えばあなたはあの篠ノ之博士の弟なのですから、お姉さんに作ってもらったのですね」

「……アンタもか」

「武……？」

「羨ましいだろう？　俺はアンタたちみたいに政府の犬に成り下がって尻を振らなくてもＩＳがもらえるんだよ！」

侮辱には侮辱を返す。せっかく織斑千冬を殺すことを我慢したのにここでキレてし

まっては意味がない。
「良いですわ！　素直に謝るのならば許してあげようと思いましたが、その必要はないですわね！　ここで落としてあげますわ!!」
「なら見せてもらおうか！　イギリスが開発したＩＳの性能とやらを！」
『ノルマ達成ね！』
　相棒の気遣いはとりあえず無視して、俺たちのＩＳバトルが始まった。
「って、俺なんか置いてきぼり!?」

■■■

　その戦いの様子をＶＩＰ席に座る二人の男の姿があった。そのＶＩＰ席に一人の少女が入ってくる。
「やぁ楓」
「久しぶり、二人とも」
　楓は軽い足取りで二人に近づき、彼らの真ん中に用意されている少し高めの席に座

る。
「織斑一夏、置いてきぼりだね」
「実質、二人だけで戦っているみたいって言っても、どう見ても武は遊んでいるけど」
「……というよりも、アレは追加装甲？」
「これからはビーム兵器が発展するだろうからって急遽追加したって言ってた」
楓の口から聞いた言葉に二人の内一人がポツリと漏らした。
「……まるで愛する人を取り返す黒い騎士だな。愛人はロリ」
「なるほど。転移はデフォルトか」
「……確かお兄ちゃんは瞬間移動できないはずだよ」
そんな会話で話を咲かせる三人。半分試合展開に興味がない様子なのだが、それもそのはずだろう。
現に今はセシリア・オルコットの独壇場で、傍から見れば武の劣勢なのだから。

第5話　それぞれの思惑

セシリア・オルコットは優勢だったか、武に対して違和感を覚えていた。
（この方、一体何故……）
それもそうだろう。さっきから操縦は無茶苦茶。回避できるものも回避しない。挙句には――――攻撃を食らっても一切怯まないのだ。
「あなた、ただの素人というわけではありませんわね。篠ノ之束の弟というのは伊達ではないということですか」
「その素人に釘付けになってライフルしか使わないのはテメェなりの手加減って奴か？」
「……何の話ですの？」
「あくまでも惚けるつもりかよ。おい織斑、お前オルコットのメインウェポンの場所がどこにあるのかわかってるだろうな？」
「いや、わかるわけないだろ!?」
その言葉を聞いた武は本気で一夏に「何言ってんだこいつ」という顔を向けた武は今もセシリアの攻撃を食らっているが怯まない。

「行きなさい！」
　セシリア・オルコットが使用するＩＳ『ブルー・ティアーズ』から四基のビットが分離して武の『銃姫』に襲い掛かる。だが武はその状況に怯まずいつも通りに飛んでいた。
「さぁ踊りなさい！　わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」
「躍らせたいなら躍らせてみろよ」
　そう返した武だが、そのタイミングで一夏がセシリアに対して攻撃を仕掛けた。
「もらった！」
「させませんわ！」
　咄嗟に回避するセシリア。武はすぐにビットによる包囲網を抜け出したが、一向に滞空しているビットを見て織斑に対してアンカーを飛ばす。
「おわっ!?」
「いただきますわ！」
　そしてセシリアは一夏に攻撃し、ビットを移動させる。武はその様子を観察してからセシリアに接近するが、ビットたちの援護射撃に阻まれた。
「あなたの装甲、ビームを無効化してますわね」
　一向に食らっても怯む様子を見せない武に対してセシリアが言った。

「ああ。そうだ。こいつの装甲はお前の言う通りビームを無効化している」
「流石は希代の天才と言われた篠ノ之束博士力作のＩＳですわね。もう対応しましたか」
「……」
急に黙る武。その様子にＶＩＰ席に座る三人はあまり良くない未来を感じ取らせていた。
武は装甲にモノを言わせ、一夏の動きに合わせてセシリアに接近した。
「食らいなさい!!」
背部から腰部へと、ブルー・ティアーズに展開されていた武装が移動する。そして砲口からミサイルが二基、一夏と武に向かって飛んできた。
「うわっ!?」
一夏はすぐに反転してミサイルから逃げ始める。そして武は近くに迫っていたこともあって直撃、剥がれていく装甲と共に地面を落ちていく。
「さて、止めですわ、篠ノ之武。あなたがいくら篠ノ之博士の弟と言えど、所詮は男。無様に這いつくばって許しを請いなさ――――」
だがセシリアの言葉が最後まで続かなかった。それもそのはず。落ちていく武がすぐさま両手にライフルを、そして展開したビット計２２の砲門から同時射撃を行い、直

撃させたのだ。
「何故、無傷なんですの!?」
「さっきの形態の正式名称は「銃姫ビーム分散装甲（ガンプリンセスヴァリエンスビームアーマー）」。宇宙コロニーを開発するにあたって一番懸念するべきことは、いかに今後発展していくエネルギー兵器を防ぎ、中にいる人間たちを守ることが可能か試すための実験形態だ」
「……まさかあなた、わたくしに黙って実験を――」
「ああ、していた。当然だろう？　言ったら意味がない」
　笑みを浮かべる武。セシリアは顔を赤くしていくが、武は追い詰めるように言葉を続ける。
「それとオルコット、まさかお前がここまで厚顔無恥な奴だとは思わなかった」
「何ですって!?」
「自分とビットの同時操作、できないだろ」
　セシリアは冷や汗をかきはじめるが、それでも構わず武は続けた。
「……やれやれ。ビットを出したから少しは期待したが、所詮は雑魚か」
「何を。この操作は難易度が高いんですのよ!?　そんな兵装も持たないあなたに一体何が――」
　瞬間、ブルー・ティアーズの飛行艇浮遊部位（アンロック・ユニット）が背後から攻撃を受けた。右側にのみダ

メージがあり、セシリアは背部を見るとそこには自分のではないビットがある。そして武の方を見て理解した。
「まさか、あなたも持っているなんて……」
「当然だろう。むしろ疑問でならない。これほどまでメジャーな武装が未だ量産化されていないのか」
「流石は篠ノ之博士と言わざる得ないで――――」
その瞬間、武はセシリアの前に現れて自身の左手を彼女の胸に当てる。瞬間、セシリアの身体に衝撃が走り、残っていたブルー・ティアーズの装甲が一部を残して吹き飛んだ。
そのまま落下していくセシリアをずっと間で待っていた一夏が拾う。
「大丈夫か!?」
「……え、ええ……一体何が――――」
「ブルー・ティアーズのシールドエネルギーの残存を確認。ターゲット、マルチロック」
一夏が使用する『白式』とセシリアが使用する『ブルー・ティアーズ』のハイパーセンサーに『銃姫より複数のロック反応を確認。回避推奨』と表示された。
「何やってんだよ武！　彼女はもう――――」
「奴は三度、地雷を踏んだ。安心しろ。出力は２０％に抑えている」

『そういう問題ではない!!』
突如アリーナに千冬の怒声が割り込んだ。
『いい加減にしろ、篠ノ之兄！　お前はオルコットを殺す気か！』
「高が女が一人、死ぬだけだ。世界規模で見れば人類が一人消滅するだけに過ぎない」
『それは詭弁だ!!　それにそんなことをすれば――――』
「国際問題になってイギリスが文句を言ってくる、か？　馬鹿な女だ。女性優遇制度を施行し、あまつさえこの程度の機体しか作れない国に一体何の価値がある」
鼻で笑って武は引き金を引いた。一夏は瞬時にセシリアを庇う様に抱きかかえ、自分のみ攻撃を食らった。
「シールドエネルギーが……」
「織斑さん、わたくしを置いて逃げてください！　彼があなたを攻撃しているのはわたくしを庇っているから――――」
「こんな状態になっている女の子を放って逃げられるか!!」
そんな時だった。Ｂピットから打鉄（うちがね）が現れたのである。
「武!!」
装着者は箒だった。彼女はすぐさま近接ブレード《葵（あおい）》を展開して武に対して切りかかるが、武はあっさりと回避した。

「一夏！　今の内にそいつを連れて逃げろ！　私が時間を――――」
武はすぐさま箒を蹴り落とす。
「この、恥知らずが!!」
すぐさま箒はアサルトライフル《焔備（ほむらび）》を展開するが、武には当たらずぶん投げた。
「普通銃を投げるかなぁ」
「黙れ！」
打鉄で肉薄する箒だが、武は容易く距離を開けて一夏たちに近づいた。
「させるか!!」
近接ブレードを展開した一夏。だが武は近接ブレードを振るう一夏を軽々といなして蹴り飛ばし、もはや絶対防御しか守るモノがないセシリアにライフルの銃口を向けた。
「い、いや……わたくしには……わたくしにはするべきことが――――」
「――――冥途の土産に教えてやる。このが銃姫は、ＩＳコアを除く機構全ては、個人的趣味と実益を兼ねて俺が一から作り上げた、唯一無二の完全オリジナルＩＳだ!!」
――――そう叫んだ瞬間、世界は静止した。

出ました！　照合率９９．７％、間違いなく指名手配されているＩＳです！」
「……そうか」
真耶からの情報に千冬は冷静に答えたが驚きを隠せなかった。
指名手配されているＩＳ――銃姫と言われたその機体を駆っているのは他でもない幼馴染の弟だ。
「どうしますか、織斑先生。ここは――」
「至急、動ける教員を総動員し周囲を囲め。完了次第制圧する」
「――それには及びませんよ、織斑先生」
その声に驚きを露わにした教員２人。それもそうだ。何故なら目の前にいる男は本来こういうことに関わり合いがない。
「な、何故男の人が――」
「この人は特別なんだ。それよりも、それには及ばないとはどういうことですか、轡木さん」
「彼もはっきりと引き際がわかっているということですよ。それに彼がここに入学した理由の一つとして彼の罪を帳消しにするという事がありますので」
その言葉に大きな反応を示したのは真耶だった。
「そんな!?　彼は犯罪者なのですよ?!」

「そうですね。そしてあなたのような方と違って本当の殺し合いを知っている人間です。例え過去にあなたが「銃央矛塵（キリング・シールド）」と呼ばれていたほどの実力者だとしてもです」

その言葉に冷や汗を浮かべる真耶。十蔵は言葉をつづけた。

「もう既に気付いているでしょう？　今の彼の原動力は女性に対する殺意――言わばこれは生徒たちが知るべき現実です。自分たちが見下した相手が力を手に入れた時どう行動するかを知るべきだと思ったが故の授業ですよ、これは」

「だからと言って生徒を犠牲にすると言うのですか!!?」

「ええ。イギリスも了承してくれています。何せ彼らにとってあのような発言をしたオルコットさんは今では目の上のたんこぶ。それを犠牲にすることで容易く新しい操縦者を用意できるし、生きていても十中八九更生されるかトラウマによって交代を余儀なくされるかでしょう。さらには戦闘データも手に入れることができるから正しく一人を犠牲にしたところで向こうはたんまりとおつりが来るわけです」

十蔵の説明が終わると同時に会場にブーイングや罵倒が飛んだ。武がセシリアに銃口を向けたからだ。

「まぁ、もっとも彼には最初から彼女を殺すつもりはないようですが」

「何？」

十蔵が予想した通り、千冬の耳に武の宣言が聞こえてきた。

『――――冥途の土産に教えてやる。このが銃姫は、ＩＳコアを除く機構全ては、個人的趣味と実益を兼ねて俺が一から作り上げた、唯一無二の完全オリジナルＩＳだ!!』

「……何だと……」

「それ故に本来のスペックは彼以外誰も知らないのです。どうやら破壊活動時も６割程度の出力で動いていたらしいので」

「そんな……じゃあ彼を止められるのは織斑先生くらいしか……」

「それはどうでしょうかねぇ。もしこの場で彼が本気になったら、織斑先生でも止められるのか」

意味深な言葉を残して去ろうとする十蔵だったが、足を止める。

「織斑先生、決して彼に兵を向けないようにしてください。当然あなた自身が出ることもダメです。世界がきな臭くなっている今、学園としても戦力が減るのは困りますので」

その言葉を最後に十蔵は管制室を完全に出て行った。その場にはおろおろする真耶と自分にすら出撃禁止を言い渡されたことに対する千冬のみだった。

十蔵が千冬たちを抑えている間、Ｄピットへと移動している一人の生徒がいたが、そ

の前に一人の女生徒が姿を現す。
「あなたは誰かしら？」
「その言葉は随分と酷いと思うけどね、かた――――楯無」
姿はどう見ても綺麗な女性だが、発せられた言葉に楯無と呼ばれた生徒は動揺を隠せなかった。
「何であなたがここにいるのかしら、悠夜」
「君を止めるためだよ。今君に介入されたら色々と困るんだ」
「……どういうことかしら？」
「君では武に勝てないからだよ」
ストレートな発言に楯無の眉は一瞬動いたが、悠夜は構わず続けた。
「今は俺たちがいるから武は何とか大人しくすることができるけど、女に対しては彼もまたかなり辛い状況だったのは君も知るところだろう？」
「だから何かしら？　私はこの学園長の生徒会長よ？　そんな理由で阻まれるわけには行かないわ」
「……そう。仕方ない」
悠夜は右側に手を伸ばすと、そこに片刃の剣が展開された。その剣からは禍々しい雰囲気が発せられている。

「『ダークカリバー』。それを私に向けるつもり？」
「裏切りと取ってくれて構わない。いずれはそうするつもいだったから」
「言ってくれるわね。例えあなたとはいえ、容赦しないわよ」
「わかった。じゃあ俺が勝ったら君の親に結婚の報告に行こうか」
「……は？」
「大丈夫。優しくするから」
「そ、そう言う問題じゃないわよ!?　何でそんな話になるわけ?!」
「俺の勝ちは揺るがないし、負けた時に色々するつもりだからさ」
　照れずにそう告げた悠夜に楯無は心から引いていた。
「よく平然とそんなことを言えるわね」
「君を止めるためならば手段は選ばない。それだけさ。それに今この場で俺たちが戦うのも得策ではないだろう？　傍から見れば君はどこの馬の骨とわからない男と言葉を交わしているのだから、そレだけでもかなり絶望的なんだから」
　そう言った悠夜は指で音を鳴らすと、二人の周囲を闇の炎で囲った。
「火事でも起こすつもりかしら？」
「これは演出なだけだよ。実際俺たちの姿は見られていないさ」
「……演出でここまでする？」

「そこまでするから俺たちは意気投合したのさ」
悠夜は少しだけ考えて楯無に伝えた。
「ところで、君は俺の行動が「響木十蔵の依頼によるもの」と言えばどうするつもりだい？」
「……それはどういうことかしら？」
「戦力を減らされると困る。そう言ってあの人は管制室の方に向かったけどね」
「……織斑先生がいる場所ね」
楯無一体どういうつもりかと十蔵の真意を考えていると、廊下に設置されているスピーカーから会話が漏れた。
『――――冥途の土産に教えてやる。このが銃姫は、ＩＳコアを除く機構全ては、個人的趣味と実益を兼ねて俺が一から作り上げた、唯一無二の完全オリジナルＩＳだ!!』
その発言に楯無は動揺を隠せなかった。
「……嘘でしょ」
「補足すると、俺たちが彼に再開した時点で既にＩＳを所持していた。言うなれば彼はあのフォルムを自作して自分で動かしていたのさ」
だとしたら、と楯無は色々と突っ込みたくなる。だが同時に目の前で未だに変装（女装）を続ける男を見て、さらに画面内に映る男を見て納得した。

「……確かに顔たちは綺麗よね」
「女としての願望はないよ、俺たちは」
悠夜は冷静になって突っ込むが、楯無には届いていなかった。

第６話　クラス代表決定戦、終幕

「ありえない。ありえませんわ…！　ＩＳは――」
「一人で作れないって？　断言するけど、ＩＳ程度のサイズは慣れれば簡単に作れるんだよ」
　そう言って俺はオルコットを撃つ。ハイパーセンサーにブルー・ティアーズのシールドエネルギー……ＩＳで言うところのライフポイントがが０になったことが表示された。
「この野郎!!」
　織斑が斬りかかるが、俺は近接妖刀ブレード《村正》を展開して防ぐ。
「何でオルコットを撃った！　もう彼女には戦意なんてなかったはずだ!!」
「殺さなかっただけありがたいと思ってもらいたいくらいなんだがな」
「何を!!」
　俺は《村正》に力を入れて織斑を弾き飛ばす。
「くっ!?」
「当然だろう。アイツは根っからの女性至上主義。そんな奴を生かしておいても意味は

ない」
「それはお前のエゴだろう!!」
「そうだ。俺のエゴだ。だが、ハッキリ言って奴には失望した。あの程度の実力しかない癖に粋がるとは。本来なら慈悲で首を落としてやるつもりだったがな」
「お前、それは――人としてやってはいけないことだろ!!」
「知ったことか。そしてそれは――ＩＳを纏って言うセリフではないな」
　馬鹿だとは思っていたが、ここまで馬鹿だったとは。
「何を――」
「元々も半分そうだったが、今のＩＳは完全な兵器と言っていいほどだ。十年前時点で世界が諦めるほどの高スペックを持つＩＳは兵器として運用されるのは時間の問題だった。そして兵器は人を殺す為に使われる」
「だからって、オルコットを殺す理由にはならないだろう！」
「慈悲だからな。もっとも、個人的に絶望して存在することを拒絶するが故の行為でもあることは否定しない」
　何せアレだけ言っておいての常識中の常識である自分とビットの同時運用ができないなんて欠点なんてレベルじゃない。もはや恥だ。
「何でだよ、武。確かに前までも少し変わっているなって思ってたけど、だからってそこ

までじゃなかったはずだろ!?」
「……むしろ俺も気になっていた。何故お前は織斑千冬の弟でありながらそこまで無邪気に生きられる？」
「何？」
「おかしいだろう？　有名人の弟妹であるならば比較され、求められる結果を出さなければ酷い中傷に晒されるのが世の常だ。お前もそうだったんじゃないのか？」
だからこそ、鬱陶しかったことは否定しなかったが途中まではそれなりに付き合っていたわけだが、
「……確かに辛いこともあった。でも、それでも俺には友達がいた！　お前にだってそういうの、いただろ！」
……ああ、やっぱりか。おかしいと思ったさ。
こいつは何もわかっちゃいない。他人の感情に全くの無頓着だからこそ成せる技ということか。
「……流石は告白にすらも気付かないゴミ野郎だな。幸せ者と言うべきか。そして俺にはそう言う存在などいなかった」
いたとしても悠夜や零司のような者じゃなかっただろう。それに結局は離れていく運命だったはずだ。

「しかも面白いことに、画像は常にアップされて俺が篠ノ之束の弟だと知れ渡る。常にだ。その結果、どんな奴が群がってきたと思う？　全員コア狙いさ。それも拒否すれば自分の子飼いの奴らに暴力を振るわせる。挙句には俺から遺伝子を採取して第二の篠ノ之束を生み出そうとする始末だ。そいつが勝手に死ねば俺がその殺人者に仕立て上げられる。いやぁ、酷い世の中になったものだ」

「……そうだったのか。ごめん……」

「同情はいらん。全員報復は済ませている」

「……え？」

　何を驚いているんだか。俺も結局は篠ノ之なんだ。しないわけがない。

「報復って……まさか武、お前は――――」

「全員潰したさ。性別、組織、そして年齢関係なく、な。つまり俺は時代によって生み出された怪物でしかない。恨むならば愚かな政策を打ち出した政府を、生身で満足に戦えない雑魚の分際で政策に乗っかった愚かな自分たちを、そして男を見下し続けた結果の低い技術力を恨め、ゴミ共が！」

　そう言って俺は瞬時にエネルギーライフル《リヒトブリッツ》を両手に展開して無防備になった織斑に撃った。さらに追撃のためにスカートアーマーから小型独立兵装《サーヴァントシューター》をすべて飛ばした。

まともに回避できなかった織斑は攻撃を受けるが、煙が晴れて現れた姿が変わったところを見るに第一形態にでも移行したのだろう。
「これは……そうか、白式が……」
織斑も驚くってどうなんだろうな。……まぁ、いいか。
「これで俺も、みんなを守ることができ――――」
「そいつは無理だな」
今、銃姫が白式の性能を確認したが、機体性能は申し分ないほどだろう。世界規模で見ればかなりの完成度の高い機体となっている。だが、武装が異常だ。守らせる前に攻めさせた方がよほど効率的だろう。
「今すぐその機体から降りてちゃんとしたものを受領するべきだろう。全く。どこの馬鹿だ」
「何でだよ!?」
「その機体、そのブレード一本しかないだろ?」
織斑は慌てて確認すると、顔を青くする。
「……何で」
「製作者がどこかの馬鹿姉かそれに類する馬鹿なのか。どちらにしろ、素人に持たせるものではないな」

何せ俺の予想が正しければ、箒に展開装甲を持つＩＳを渡そうとしているからな。あれ凄く燃費が悪いからむしろ持たせない方が良いんだけど。
「どうする？　その機体じゃお前の勝ち目は皆無だ。降参するならしても良いが？」
「するわけないだろ！」
「……ＯＫ。了解した」
そう言って俺は再度《村正》を展開して織斑に接近した。織斑もこっちに接近して俺に斬りかかった瞬間に驚いた顔をする。その後すぐに俺の攻撃をそのまま食らっていた。
「な、何で――――」
「悪いが俺は雑魚と言えど容赦は――――しない」
織斑の背後に周り、今度は右手で織斑を吹き飛ばした。
「ガハッ!?」
アリーナの透明な壁に叩きつけられて変な声を出す織斑。俺は瞬時に後ろから来た箒の攻撃を回避する。
「貴様!!」
【白式、シールドエネルギー０】
「後はお前だ、箒」

銃姫を高速飛行形態に変形させ、アリーナの限界高度に瞬時に移動して人型携帯に戻る。
「か、可変だと!?」
「コード、オーバードライブ」
エネルギーライフル《リヒトブリッツ》を両手に一丁ずつ展開した俺はその銃口にビットを四基ずつ装着させる。
「止まっていれば、ただの的だ!!」
「本当は大気圏に突入しながらなんだよ。まぁ、それは良い」
残りのビットで箒の移動範囲を制限しつつロックオンした。
「やらせん!」
「これが先の人生を見据えた者と見据えず逃げた者の違いだ、箒。この威力、受けるが良い」
引き金を引くと強化されたエネルギー収束帯が打鉄の非固定浮遊部位のシールド諸共両肩を貫いた。その際に絶対防御が発動して一瞬で打鉄のシールドエネルギーを溶かす。
【打鉄、シールドエネルギー0】
その情報を確認した俺は下に降りてピットに着地する。

「武！」
「……」
　俺は無視して銃姫を解除し、ピットに戻ると敵意を向けた織斑千冬が立っていた。
「武、お前は――――」
「イギリスが五月蠅いなら俺に言え。消して来る」
「いくらＩＳでも、一国を相手に戦えると思っているのか!?」
「俺の銃姫ならば大地を消すことは可能だが？」
　そう言うと織斑千冬は俺に手を伸ばそうとしていたので先に掴んだ。
「……それで我慢して耐え忍べ、と？　それで大人しく女の毒牙にでもかかれとでも言うつもりか、アンタは？」
「違う、私は――――」
「俺はアンタと話すことなんてない。むしろ弟の方を気にかけた方が良いだろう？　アレでは早死にするだけだ」
　そう言って俺はピットを出る。……とりあえず、楓の反応はＶＩＰ席か。

■■■

ピットに戻った一夏と箒。そこには千冬が立っており、何か言いたそうな顔をしていたが一夏たちに気付くと元に戻る。
「そうだ千冬姉、オルコットは――」
「彼女なら既に運んでいる。命に別状はない」
それを聞いて一夏は安堵した。
「……良かった。あの時は本当に――」
「殺したと思ったか？」
「……ああ。戦っている武から、それを可能とするんじゃないかってくらいの気迫を感じた」
それを聞いた千冬は「そうか……」と呟くように言った。
「千冬さん、教えてください。武に一体何があったんですか!?　確かに離れる前から色々とおかしいと感じる部分はありましたが、それでもやり過ぎです」
「……すまないが、それは言えない……が、確かに武が女に対して恨むほどの事はされている」
「……そうですか。あと、すみません。勝手に打鉄を使ってしまって」

「……気持ちはわかるからな。ただ反省文は書いて来い。５枚で勘弁しておいてやる」
「わかりました」
　箒はピットに出て行く。一夏はその後を追おうとしたところで千冬を呼び止めた。
「待て、一夏」
「ごめん、千冬姉。俺は箒を――――」
「学校では織斑先生だ。それとこれを読んでおけ」
　そう言って千冬は一夏に投げ渡した。
「これって……」
「後で良いので規則はきちんと覚えておけ」
「わ、わかった」
「あと、他人の心配をするなとは言わんが、帰って休んでおけよ」
「わ…わかりました」
　言い直した一夏は去っていき、千冬は一人残された状態でどこかに電話を掛けたが、繋がらない。
「……チッ」
　そして舌打ちをして彼女もまたピットを後にした。

セシリアが目を覚ましたのは、試合が終わって数時間経った頃だった。自分が気絶する前の事を思い出したセシリアは悲鳴を上げた。

その事に気付いた医師である「月城千鶴（つきしろちづる）」はすぐに駆け込んできた。

「大丈夫よ、オルコットさん。もうあなたを狙う人はいないわ」

「……わ、わたくしは……わたくしは……ぶじ？」

「ええ。無事よ」

その答えに安堵したセシリアは自分が生きていることを実感する。

「……わたくしは……負けたのですね」

「――そうだ」

突然現れた存在にセシリアは驚いた。

「織斑先生……」

「その、済まなかったな。篠ノ之兄があそこまで慈悲を持たないとは思わなった」

「……慈悲、ですか」

少し落ち着きを見せるセシリア。そして冷静になって思い出す。

「――随分持っていたと思うけどね、僕は」

「何者だ!?」

「轡木の関係者と言わせてもらうよ」
　そう答えたのは少年だった。背丈一夏と同じくらいか少し下回る程度で、高校生くらいの少年会だった。
「何故、ここに男が――――」
「僕のような人間が他の教育機関にいた場合、その教育機関が狙われるのでね。言うならばＩＳを動かせないにしろここにいるのが最適解の人間なんだ。この事は既に世界にも周知済み。にしても随分派手にやられたね。ま、当然か。最強と言っても過言ではない銃姫を持つ武にしてみれば、君のような人間があんな振る舞いをすれば目障りに感じるだろう」
「だからと言って、それが許されるようなものか！」
「敢えて言うけど、今の女の対応なんて相当なものだよ？　道行く人を捕まえて奴隷のような仕事を命じ、拒否すれば逮捕。そんな割に遭わない社会なんて一体誰が受け入れるっていうのさ。君たちの生徒の大半はそうじゃないか。自分で作ったものじゃない癖に粋がり、動かせない男たちを見下す。一時的とはいえ姉を尊敬していた武にしてみれば女尊男卑や女性優遇制度なんてものは、人々を宇宙から遠ざける措置でしかない。君はイギリス人だから知らないだろうけどね、当時の武の荒れっぷりは正しく天災そのものだったよ」

その物言いに千冬は気付く。
「……お前はまさか、武の――」
「友人さ。同類でもあり、同じ境遇の仲間でもある。そして製作者サイドの人間だからこそ、君がどれだけ武に酷い事を言ったのかわかる。君が言ったのは、君の立場で言うなら「流石はオルコット家のご令嬢だ」とか「オルコットの血だから」と称賛しているだけに過ぎない」
そう言い残した少年はその場から去る。
「すまない、オルコット。これで失礼する」
「……ええ」
千冬は病室を出て行くのを見送ったセシリアは自身が持つ小型端末にアクセスする。そこには国からのメールが届いていた。

「待て」
「……」
千冬が声をかけるが、少年は無視した。
「待てと言って――」

「黙れよ」
　そう言って少年が向けたのは左腕だ。その左腕には既に大型の砲身が展開され、千冬の顔に向かっていつでも発射できる状態になっている。
「何を驚いているんだい、織斑千冬。君のような人間が僕に話しかけるな。目障りだ」
「……武の事を教えて――――」
「自分で聞けよ。ま、アンタじゃ無理だろうけど」
「ああ。だから教えて欲しい。武の身に何があったのか――――」
「言うわけないだろ。お前の存在でどれだけ僕らが迷惑を被ったと思う！　自分は仲間だと思うんだったらさっさと女権団を君の手ですべて潰せば良い」
　少年はまた去ろうとしたが、足を止める。
「ただこれだけは言わせてもらうよ。今回の試合、武はやろうと思えば君の弟も、そしてあの女も殺せた。だけどそれをしないのはまだ彼の中にある良心が完全に落ちていない証拠だよ。だけどそれが無くなった時、待っているのはこの学園をスタート地点とする全国家の消滅と人類の間引きさ。当然、僕もそれに協力する」
「……本気で言っているのか。そんなことをすれば全面戦争は避けられない」
「それで良いのさ。あと、銃姫はＩＳ学園に入学するにあたり、いくつかの制限が設けられている。昨日の時点で出力はかなり抑えられているから、その制限が解除されたら人

は悲惨な道を歩むと思う」

それだけ言うと少年は姿を消した。

「……全く。怖くなるな。東のクラスの人間がこうも簡単に現れてのか」

ため息を吐く千冬。彼女はなんとなく感じ取っていた――――近い内に戦争が起こる予感を。

第７話　成長するワンサマー

「では、一年一組のクラス代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がりで良い感じですね！」

翌日。クラス代表が発表された俺は素直に驚いていた。

「先生、質問です」

「はい、織斑君」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、何でクラス代表になっているんでしょうか？」

ああ、それはとても不思議だな。てっきり俺になると思ったが。

「それは――――」

「昨日、緊急の職員会議が行われた結果だ。篠ノ之武がクラス代表になった場合、平等ではないという話が上がってな」

「……は？」

まぁ確かに平等ではないだろうが、そんな理由でクラス代表外すか、普通。

「ちょ、いくらなんでもそれはねぇだろ……」

「そうですよ！　篠ノ之君なら私たちに必ず優勝をもたらせてくれます！」

「篠ノ之君はクラス代表になるべき器なんです！」
　正直気持ち悪いと思うんだが。いやまぁ、俺の目的も確かにデザートパスなんだが。
「確かに篠ノ之兄をクラス代表にするのは簡単だが、そうなると不都合が起こるため、織斑一夏にした」
「不都合って何だ？」
「……不利な条件を付きつけられる。そういえばわかるか？」
「わからんな。もしや俺以外のクラスメイトが狙われるとか、か？」
「……それはないだろう。だが、お前がクラス代表になった場合は一組と他のクラス代表になる可能性も否定しきれん」
「……は？　それくらい別に良いだろ」
　そう言うと織斑千冬はポカンとしていた。
「何を驚いている？　むしろ俺は対集団の方が慣れているからな。それに相手は所詮は国如きが開発しただけのＩＳだろう？　なら問題ない」
「……おい篠ノ之兄。本気で言っているのか？　確かにお前のＩＳはブルー・ティアーズ同様一対他向きだという事は理解しているが、いくら何でもそれは――」
「馬鹿にするのも大概にしろよ。ティアーズタイプは精々四砲門程度しかないだろう？
　こっちはそれ以上あるし同時に動ける。何ら問題はない。もしくは今すぐ――女

権団やＩＳ施設を強襲してその能力を披露してこようか？　お前らは俺の実力を見れる。俺は世の中の膿を掃除できる。利害は一致しているだろう？」

織斑千冬は本気で顔を引き攣らせていたが、それくらいの事でそんな顔をされても困るんだがな。

「ともかく、クラス代表は織斑だ。篠ノ之兄。お前は織斑を鍛える事に専念しろ」

「……まぁいいが」

「待ってください！」

箒が立ち上がった。どうやら織斑千冬に対して抗議するらしい。

「私が一夏を教えますから――――」

「その事なんだがな、篠ノ之。お前には剣道部からクレームが来ている。ちゃんと顔を出さないと強制退部もあり得るとな」

「そ、それは……」

「……まぁ、基本的に単細胞で擬音でしか教えられない奴は邪魔だしな。ちょうどいいだろう」

「い、いや、私は――――」

俺は席を立ち上がり、箒の席の前にまで移動して両肩に手を置いた。

「な、何をするんだ」

「まるであのクソ姉みたいに駄々こねるな、お前。ほんっと何も変わっちゃいない。小学生……いや、小学生の方が聞き分けがあるな。うん。強いて言うなら幼稚園児だな。はいはい箒ちゃん。今は大人しくしておきましょうね」

「こ……この———」

今度は右手で箒の顔を掴んで思いっきり力を入れた。

「……篠ノ之兄、そこまでにしておけ」

「へいへーい」

顔から手を外した俺は大人しく自分の席に戻った。

「そういうこともあるので篠ノ之兄は織斑の強化を頼む。必要であればクラスメイトを使うが良い」

「……クラスメイトはいつからアンタの手ごまになったんだか。まぁ、いざとなれば使うけどな」

さてと、早速アリーナの空きを予約しますか、と。あ、なんとかできそう。てっきり無理かと思ったが。

「んじゃあ、先着二名に限り、早速手伝いを募集する。手伝いたいって人は箒以外で俺の所に来るように。ああ、安心してくれ。確かに俺は現行のＩＳ技術は基本的に見下しているが、別に取って食うつもりは全くないから」

と付け加えた後に織斑先生が締めてＳＨＲはお開きとなった。

放課後、たまたま空いた第三アリーナを貸し切った。そこで俺は二基の球体コックピットと二基の人型ロボットを展開する。

「……凄いね、篠ノ之君。いつもＩＳにこんなもの入れてるの？」

「量子変換技術は様々なもので使用可能なんだ。だから銃姫の中にこいつらは入れてねえよ」

「そうなの!?」

クラスメイトの……確かかなりんと呼ばれていた奴が驚いた。

「別に驚くことじゃないけどな。まぁ俺は家が家だったから昔から姉の研究室に潜って資料を読んでいたからな」

「ん～。でもそれって十分凄い事だよ～」

「ま、確かにな。つっても俺はちょっとファンタジーみたいに武器を自由に出し入れしてみたかったから研究していたし。ちなみにＰＩＣは空を自由に飛びたかっただけだ」

「……もしかして、昔からパソコンを持っていたのって……」

「そりゃあ自分の夢を実現させるために決まってるじゃん。時間は有限なんだし」

ま、まさか姉も似たようなことをしていたなんて驚きだったけど。
「これで良し。二人とも、座ってみ」
そう言って俺は二人に座るように促す。インカムを付けていたら一号機がすぐに動いた。座った後にすぐに一号機が動いたのは驚いた。
「おい布仏、動かすな」
『それはできない相談だよぉ！』
「お前も興奮する質かよ。まぁそれはそれで良いが。そうだかなりん、適当にレバー引いてみ」
『う、うん』
インカムから指示を出すと、たどたどしい動きで二号機を動かす。
「とりあえず、布仏はカタパルトに移動して先に出て織斑にちょっかいかけてこい。おい織斑、そっちに敵が行く。そいつを――――」
『倒せば良いんだな！』
「は？　殺すぞ？」
インカムから織斑の悲鳴が聞こえるが無視だ。
「冗談だ。とりあえずそいつの攻撃を回避しろ」
『わかった！』

さっきまで織斑に飛行訓練をさせていたが、奴はフラフラと飛ぶ。試合の時はまだまともに飛んでいたのでおそらくは本番に強いと思って間違いない。
「布仏。チョコレートだ」
『ありがとー。ってどうしたの～？』
「織斑を、殺れ」
『アイアイサー！』
『え？　ちょっと待って!?　今物騒な声が聞こえたんだけど!?』
とりあえず二人は無視して、俺はかなりんのコックピットに向かう。
「やっぱりレバーの操縦は難しいか？」
『う、うん。ごめんなさい。……本音、良いな』
「あれは身内に天才がいたからだ。普通は最初からああもできない」
特に零司は最初から人型の機動兵器を作ろうとしていたからな。その一環として布仏は遊んでいたのだろう。
「だから気にするな。それにレバーでの操作は俺の趣味で作ったものだ。いずれＩＳに並ぶ兵器となるかもしれんが、現状では国連が開発したというＥＸＯＳ（エクステッド・オペレーション・シーカー）の方が優れているからな。なにせＩＳの攻撃を受ければ一撃で破壊できるほどの代物だからな。実弾兵器も装備しているが、生身の人間に向けるならともかくＩＳに向ける程度

なら問題ない」
技術としては既にゲームとして確立しているタイプだしな。ほら、一時期自分でコースを作れると評判だった国民的人気ゲーム。それを真似て作っただけに過ぎない。
「……もう少し、頑張る」
「その粋だ」
とはいえ少し心配だな。後でこの女のアフターケア用にお守りを渡しておくか。

かなりんと布仏の協力があって、クラスの団結性と共に織斑の回避能力が向上してきたある日。オルコットがイギリスに帰ってしばらくするが未だに帰ってこないことに指導面で不足を考えている。とはいえ回避すれば回避するほど織斑の練度は上がるものだ。
「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、篠ノ之兄。試しに飛んでみせろ」
「はい」「へーい」
「……そろそろお前にはちゃんとした返事というものを教えてやらねばならないようだな」

と拳に息を吹きかけている暴力教師の言葉は無視して銃姫を展開した俺は、織斑の展開速度を確認する。少しは早くなっているようだがもう少し伸ばせるだろう。あと０・２秒の壁だな。

「よし、飛べ！」

その言葉と同時に急上昇をする俺ら。チラッと織斑とその姉を見るが、難なく上昇する自分の弟に驚きを隠せない感じだ。

「意外によく飛ぶなぁ、織斑。特訓の成果か？」

「そりゃあ、特訓と称して縦横無尽に銃弾で狙われたらそうなるわ!!」

「いやぁ、布仏が協力的でな。今度お前に恨みを持っている友達を連れてきてくれるそうだ」

「え？　俺に恨みって何!?」

と惚ける織斑。いや、アレは本気だ。……というかあの男に恨みを持つ男は多いだろうが、恨みを持つ女なんて……織斑千冬の弟というポジションと動かせることが判明したのにＩＳ専用機を渡された、というぐらいか。

という事で言われたのは二号機の魔改造である。どこかのマスク天帝仕様にしてほしいとのことだったのでリクエストにお答えしておくことにした。

「そういえば篠ノ之兄、前の試合でその機体が変化して速度が上がっていたな。一体ど

ういう機構だ？」
「可変機構。一般的に数年前まで放送していた有名なロボットアニメだと一部の機体に盛り込まれている機能だな。戦闘機や獣タイプ、砲台に変形したりする奴。普通にそのまま変形すると身体に致命傷を与えかねないのだが、俺の場合は一時的にコックピットを内部展開することで楽な姿勢で行動を起こせるんだ。欠点を言えば変形による隙だな。と言っても本来ＩＳにない機構を無理矢理増設して使っているだけに過ぎないし、そもそも前の試合で使ったのは箒が相手だったからに過ぎないし」
　ただ急上昇とかを単機でする場合は凄い楽なんだけどな。言うなれば強襲専用。
「搭載している理由は？」
「趣味」
「……もっとマシな理由が欲しかったのだがな」
「前に言っただろう？　銃姫は個人的趣味と実益を兼ねて俺が一から作り上げた、唯一無二の完全オリジナルＩＳだと。と言ってもコアはオリジナルじゃないからアレなんだがな」
『もう実質オリジナルみたいなものでしょ。気にしなくて良いんじゃない？』
　そりゃここまで独自路線を走るＩＳコアなんざ聞いたことないがな。未だにＩＳコアでも声が聞こえるのはこいつくらいだ……いや、コアすべてがこんな感じだったら

色々と嫌だなぁ。
『あ、じゃあいっそ私たちを具現化させてハーレム作る？　コアハーレムとか世界に存在しない確率大きいわよ』
『全員姪とか誰得だ？』
『あら、クロエも姪じゃない？』
『姪だな』
『その姪とは言え一時期仲良くなっていた男は一体誰かしら？』
　とりあえずこのコアをぶん殴ってやりたいし、そもそもそこまで仲良くなっていないと突っ込ませてもらおう。
『……とりあえずあなたはあまり織斑一夏に対して人の事は言えないと思う』
『それに関しては心外だな』
　断固として抗議する！　という事はともかく、だ。
「織斑、篠ノ之兄、急下降と完全停止をやってみせろ。目標は地表から１０㎝だ」
「先に行け、織斑」
「わかった」
　織斑に先に行かせる。そして途中で自身を縦方向に回転させてブレーキを利かせた。
「……なるほど。１ｍか。目標には遠く及ばないがブレーキを掛けただけ良しとしよ

う」
「それじゃあ俺がまるでブレーキすら掛けられないみたいじゃないか、千冬ねごヴィバ!?」
「学校では織斑先生と呼べと何度言えばわかる?」
「すみません、織斑先生」
　と姉からキツイお仕置きを受ける織斑。いくらそっちの呼び方の方が慣れているからと言っていくら何でも成長がないな。
「では篠ノ之兄。やれ」
　適当な場所を選んで適当場所で敢えて５０㎝の所で静止すると織斑千冬から「わざとだろ」と睨まれた。
「まぁいい。織斑、武装の展開はできるようになった――――何!?」
「あ、やっぱり驚いた」
「そりゃそうだろう?　この女は他人ができないと思ったことを普通に言ってくるからな。それにお前の武装一つだけだ。その展開に慣れて幅広い戦術を見つけてもらわないとな。そのために土日は休ませている」
「……って言うかリクセム攻略できないんだけど」
「ああ、あれは気合でどうにかしろ」

むしろその後のアンセムの方が鬼門だと思う。その後？　ファイナルミックス要素はあんまりしていないんだ。

「……思った以上に一夏が成長しているな」

「誰が鍛えていると思っている。むしろ織斑に……いや、世界的に足りないのには二次元への適合力だ。それさえ克服すれば織斑のタイプならまだ成長の余地がある。常時中二病男を舐めるなよ」

「……それ、自分で言っていて恥ずかしくないか？」

ま、ここでそんな発想ができたのは素直に部屋にいる俺の可愛い天使のおかげであるのは確かだがな。好きなキャラがいるからと気になって買った統合版をクリアするとは思わなかった。……あれ？　このままいくと引きこもりになってしまう？　今度零司に頼んであの施設にいてもらおうか。少しは身体を動かした方が良いしな。

「さてと、篠ノ之兄。お前も武装を展開しろ」

言われて俺は武装を展開する。右手に近接妖刀ブレード《村正》を、左手にエネルギーライフル《リヒトブリッツ》だ。今度は《村正》を消して右手にも《リヒトブリッツ》を展開した。

「……もういい。お前の展開速度がわかった」

ため息を吐く織斑千冬。俺を弄るつもりが普通に展開されたので悔しがっている感

じだ。

「そろそろ時間だな。少し早いが、今日の授業はここまでだ。では、解散」

そう言って締めくくられる。……今日はアリーナも取れなかったし、トレーニングはたまに箒に任せてやるか。

第８話　予定外の出会い

夜。ＩＳ学園の正面ゲートの前に小柄な体に不釣り合いなボストンバッグを持った少女が立っていた。その少女の近くに一台のリムジンが停止、ここで車の音を聞くこと自体珍しいと思った少女はそっちを見ると、長い金髪を揺らした自分よりも背が高くお嬢様と言った雰囲気の少女が降りてきたのを見て目を奪われる。

「ありがとう、チェルシー。ここまで来れば後は一人でも大丈夫ですわ」

「わかりました。では私はこれで失礼します」

「はい。ご苦労様」

リムジンがどこかへと行くのを見て動揺を隠せない。だが少女にとってそこから出てきた少女がどういう人間かというのはわかっていなかった。

「あの、あなたは……」

「アタシは凰鈴音（ファンリンイン）。中国の代表候補生よ。ＩＳ学園に転校してきたの」

「そうでしたのね。わたくしはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生ですわ」

「そ、そうなんだ。これからよろしくね」

「ええ。こちらこそ」

鈴音は内心「誰だっけ？」と思っていたが、あえて口にしなかった。
「アンタも転校生なの？」
「いえ、わたくしは一年一組に籍を置いていますわ。ただ専用機をオーバーホールする必要があるということで一度本国へ戻っていましたの」
「今年度が始まってまだ三週間よね？」
そんな疑問を持っていると、セシリアは顔を逸らす。
「色々あったんですのよ、これでも」
「聞いてみたいわね。三週間でオーバーホールする理由を」
「の、ノーコメントで……」
には見覚えのある男二人いた。
「桂木!?　それに平坂も?!」
「……誰だ？」
「確か、小五の頃に転校してきたファンファンさん」
「凰鈴音よ！　って言うか誰よそれ?!」
「ああ、そうそう」と言った悠夜に鈴音は睨む。そこでセシリアが尋ねた。
「あなたたち、ここはＩＳ学園ですわよ。何故ここにいるのです？」
「……君たち女が無能だからだけど？」

「零司、それだと反感買うだけだから」
　舌打ちをする零司。悠夜はできるだけ丁寧な口調で応対した。
「ま、こっちも場違いだってのはわかっているけど、色々あってこの学園に来ることになったのさ。ああ、でも基本的にそっちとは関わらないし襲う事もないから安心して」
「そんなことを聞いて「はい。そうですか」って引き下がれるわけないでしょうが！」
「……ＩＳ使えるからって偉そうに」
「あぁん？」
「凰さん、落ち着いてください。まだ向こうは攻撃をしていませんわ。もっとも、今ここで簡単に逃がすつもりもありませんが」
「できれば穏便に見逃してくれるとありがたいんだけどね。こっちは君たちとは敵対したいわけじゃないし、敵対したところでお互いメリットなんてないし」
「――あぁ！　ゆうやんにれいれい！」
　その声を聞いた瞬間、零司はすぐに左腕に砲台を展開して上に何かを撃ち出して離脱する。飛び込むように現れたその少女を悠夜は受け止めた。
「久しぶり、本音」
「そうだよ！　何でずっと連絡してくれなかったのさー！」
「色々とあったんだよ。これでもね」

「……あの、布仏さん、その方たちは？」
セシリアが尋ねると、本音はある事に気付く。
「……あれー？　何で二人ともここにいるの？」
「色々あるんだよ。これからよろしくね。……簪ちゃんの機体の件でも関わるだろうし」
「え――――」
すると悠夜の姿は突如として消失。その光景に本音は泣きそうになるが、涙を流すのを堪える。
「布仏さん、さっきの彼らは一体――――」
「そんなことはどうでも良いでしょ。ともかくアイツらがいることを学園に報告しないと――――」
「……だから無駄だって言ってるだろ」
いつの間にそこにいたのか。零司はセシリアと鈴音の後ろに現れて手を伸ばした。

「……あれ？　わたくしたちは？」
「……うーん。あれ？　アタシ、何かを言おうと思ったんだけど、なんだったっけ？」

しばらくして、二人は立ち上がる。やがて各々の目的を思い出して行動するのだった。

■■■

「「というわけで、織斑君クラス代表決定おめでとう!!」」
クラッカーが鳴らされて紙テープが織斑の頭に落ちる。俺はその光景を遠くから見て食事をしていた。
「……ところで、お前は向こうに行かなくていいのか？」
「そんなことよりも聞きたいことがある。そのＩＳはいつから持っていたんだ」
珍しく箒が二人きりで話したいというから何かと思えばそういうことか。
ちなみに隣で透明化した楓が美味しく色々と頂いているが、箒はそれに気づいていないようだ。
「いつからか。……たぶん小学生になる前かな。普通の綺麗な石だと思っていたから、これがＩＳだと気付いたのは数年前」

「……そんなにも前に気付いていたというのか。なるほど。納得した。だからこそあの動きができるわけだな」
「……いや、あの動きぐらいはほとんど最初からできていたけど」
　むしろ機動方法に関しては成長がないと言えるほどだ。
「それで、何が聞きたいんだ？　まさか自分にもＩＳが欲しいと言い始めるんじゃないだろうな？」
「……」
「図星かよ……」
　と言っても別に珍しい事ではないが、だからと言ってホイホイと簡単に渡せるものじゃない。
「大体、何でお前はそんなにＩＳが欲しいんだ？　織斑と一緒に戦えるとか思っているなら止めてくれ」
「な、何故わかった」
「……マジで止めてくれ」
　そう言った俺に箒は憤慨する。
「何故なのだ!?　何故貴様は持てて私にはないんだ!!」
「……そりゃあ、７０億近くいるであろう人類のざっと半分から２／３が女だとして

も、その内の４６５席しかないんだから誰だって持てるわけじゃないだろうに。つうか文句言うなら姉を嫌って代表候補生になる努力すら怠った自分に言えよ」

と言ってから俺はスパゲッティをフォークでまとめて口に入れる。

「……何故そんなことを言えるのだ、お前は。私たちは姉さんのせいで辛い目にあったんだぞ!!」

「…見解の相違だな。確かに俺は姉が嫌いだが、人間はそれ以上に醜い存在だ。ただ姉がＩＳを発表したからそれがより深く露見しただけに過ぎない。現に俺は中学一年の時に虐められてたし」

「……意外だな」

「これでも我慢した方だよ。別の事を心の支えにしてさ。でも無理だった」

「……武。その、すまな――――」

「あの程度で女の方が強いとか冗談でしょ。ＩＳがなければ空も飛べない、ちょっと殴っただけで漫画みたいに回転してぶっ飛ぶ、銃を媒介に高威力の高炎圧砲は撃てない。おまけに魔法も使えなければ量子変換すら使えない。あんなのと法律でよくもまぁ自分たちが本気で強いと思えたわ。しかも俺を性的に襲ってきた奴は両耳吹き飛ばしてやったら泣きわめいて逃げ出して足を捻って勝手に階段落ちて死んだのに、あのクズ女警官、俺がすべて悪いみたいなことを言うからそいつには消えてもらったよ。何

本か潰しておいたからもう御先は真っ暗だろう。どうでも良いけど」
「……は？」
「ちなみにそいつがあまりに弱かった結果、俺は女が強いと思えなくなったどころかゴミクズのように思えた」
　そう言うと箒は何とも言えない顔をする。
「先に言っておくが、確かに女でも強い奴はいることは理解している。俺たちの身近で言うとクソ姉や織斑千冬がそれに該当するだろう。ＩＳという分野に限ればイタリアのアリーシャ・ジョセスターフをはじめとした強者もわかっている。だが銃姫を前にすればスペック的には遠く及ばないし、何よりも銃姫はあれだけのエネルギー兵器を持ちながら白式のようにエネルギー切れを起こさないほどの安定性を持ち合わせている。そして生身で戦うならば――例え織斑千冬が相手だろうと俺は遅れを取る気はない」
「……随分、自信があるんだな」
「当然だ。俺は幻想に憧れていて、ある程度は再現できる力を持っていた。今の俺が異世界に行ってもＩＳやチート抜きでどうにかできるくらいさ」
　俺の存在そのものがチートだからな。……まぁ、それすら封じられたらどうしようもないが。
「何故異世界なんだ……」

「最近、ＩＳ系よりも異世界系の方が需要高いからな。まぁ、女の冗長はＩＳの登場によるものだと思っている奴らが大半だからそれも仕方ないが」
　なんて冗談も交えていると、食堂の入り口の方が騒がしくなった。視線をやるとイギリスに帰っていたはずのオルコットが現れたのである。
「……帰ってきたのか」
「なんだ。残念そうだな」
「……気のせいだ」
　箒をからかう。どうせオルコットも織斑を狙っているかもしれないが、それはそれこれはこれだろうに。
「少しは友達でも作ったらどうだ？　このまま行くと箒は孤独死まっしぐらだぞ」
「……余計なお世話だ。お前こそ作ったらどうなんだ」
「俺はいるけど？」
「何!?」
　え？　何で俺、本気で驚かれてるの？
「……いないと思っていたのか？」
「……ああ」
「あの、ちょっと良いでしょうか？」

何故かオルコットがこっちに来ていて俺たちに話しかけている。
「どうしたオルコット。織斑なら向こうだぞ」
「知っていますわ。あなたに話がありますの」
「……話？」
話、話か……ボコったとは言えオルコットは女尊男卑思考を持っている。つまりは今度こそ研究所に入れとでも言ってくるのだろうか。いや、その可能性は高いだろう。確かに俺は天才だが、世間的に見れば体の良い生贄。俺が潰したのは違法施設と一つの町の悪者排除したくらいだ。つまり、ただ強いだけのＩＳ操縦者でしかない。つまり今は丁寧に対応しているが、銃姫の待機状態を発見次第実力行使に出るのだろう。
「すみませんでした!!」
と考えていたところでオルコットの口から発せられたのは謝罪だった。
「……どうしたんだ？」
あの女尊男卑の塊が男に謝罪の上、頭を下げただと!?　と内心驚いていた俺は箒の顔を見るが、箒も箒で信じられないという顔をしていた。
「わたくし、あなたに敗れて気付いたのです。強いか弱いかは性別で決めるものではないことに。性別ですべてが決まるなんて、本当ならあるわけございませんのに、わたくしはそれにすら気付かなかった。自分が以下に愚かだったのか、よくわかったのです」

「……いや、そんなの当たり前だろ。馬鹿なの、お前」
「ちょ、武、それは――――」
「いいえ。武さんの仰る通りですわ。わたくしは馬鹿です。大馬鹿のクズ野郎ですわ!!」
　クズ女が正しいだろうが、それはともかくだ。
「まぁ、そこまで理解できていれば俺から言えることはないさ。まずはビット操作をマスターしろ。今のお前は移動砲台程度の価値しかない足手纏いだ」
　そう言うと少し傷付いた顔をしたオルコットだが、俺との実力差を思い出したのか思い直したようだ。
「いえ、そうですわね。ビットを扱えないわたくしの価値など、本当に移動砲台程度の価値しかありませんわ」
「精々、戦艦上に配置されるだけの存在だな。どこぞの足つき一派に乱入されて機体は大破してボロボロになるか、功を焦って砂丘に足を取られるかの二択だな」
「一体何の話をしていますの、あなたは……」
　少し呆れを見せるオルコット。やっぱり通じないか。
「……ところでオルコット、ＩＳは没収されたのか？」
「いえ。修復後にまた渡されましたが、何か？」

「なら明日からの織斑強化プロジェクトに参加してくれ」
「なるほど。指導員としてですわね。わたくしも一組の人間、クラス対抗戦に向けて織斑さんの強化のお手伝いをさせていただきますわ」
　といつもの調子に戻るオルコットを見ながら俺はふと思った――――ようやく気付いたか、と。とはいえ今はＩＳ学園だし簡単には手を出すことはできないだろうな。
「はいはーい！　新聞部でーす！　話題の圧倒系男子、篠ノ之武君にインタビューしに来ましたー！」
「……インタビュー？」
「そうそう！　ＩＳ三機相手に無双するなんて中々できることじゃないしね！　今凄く注目されているんだよ！　って事で何か一言頂戴！」
「生徒会長の役職に着いている者以外の挑戦は時間が合えば受けてやる。対抗戦が終わったらな」
　そう言うと一瞬場が静まり返ったが、すぐにさっきの女が続けた。
「もしかして生徒会長に手を出さないのは負けるから？」
「それはないな。相手が誰だろうと負けるつもりは毛頭ないが、そもそもそいつに勝ったからと言って十年も無駄な時間を過ごした奴らのために動くつもりはないからだ。学園最強が生徒会長をするというのはわかるが、国の相手をしていたら殺意が湧きそう

だ」

「……あ、そう」

これで俺をインタビューするという勇気はもうないだろう。

ちなみに生徒会長関係者に手を出したら本当に後々が面倒なんだよ。主に悠夜のせいでな。

「じゃ、じゃあ、ちょうど専用機持ち三人がいるんだし、三人で写真撮ろうか！」

「俺はそろそろ戻るから後は好きにしてくれ」

そう言って俺は席を立つ。後ろからは楓が付いて来ていることは確認済み。

『良かったね、お兄ちゃん。ちゃんとドリルさんが専用機持って戻ってきてくれて』

『まぁな。移動砲台とはいえ、戦力はあった方が良いからな』

なんて会話を続けながら、人がいないことを確認してから楓を抱えて部屋に戻った。

第9話　中国からの転校生

「転校生？」

教室に入ると、布仏からそんな情報がもたらされたので聞き返す。

「そうなのです！　二組に所属するんだってー」

「……ヤバいな」

この時期に転校生、となれば十中八九専用機持ちだろう。そんな奴がこの土壇場に登場とはついていない。四組は専用機持ちだが倉持技研の怠慢で機体がまだ完成していないからなんとかなると思っていたから完全に油断した。織斑の戦闘方法はまだ確立できていない。武装がブレード一本だけ。セブンソードとかならともかく何故ブレード一本だけなのか是非とも開発者をぶん殴ってやりたい気分だ。

「布仏、その転校生がどこから来たのかわかるか？」

「中国だよ～」

「……確か第三世代兵器が衝撃砲だな。しかも他の国とは違って燃費も良い。零落白夜を使用して削るには確実性が必要だからな。ヒット&アウェイでどうにかできれば良いが、織斑の技量ではあまり期待できないし、何よりも距離を離したらそう簡単に近

づけられない。……こうなったら白式に仕込むか」
「思考がブラックだねー」
「そりゃあ、豪華賞品がデザートフリーパスとなれば手を抜くわけにはいかない」
　楓が喜ぶというのもあるが、まぁ何よりもＩＳ学園が他国から入学してくる奴らに配慮して様々な国を作れるように優秀な料理人を呼び寄せている。そして俺はデザートが好きだ。
「そっかー。たけっちはデザート好きなんだー」
「特に洋菓子類だな」
「なんていうか、二人って結構対極的だねー」
　箒の事だろう。まぁアイツは親父の影響で和モノが好みだし。昔は俺と喧嘩した時に「西洋かぶれ」とか言っていたなぁ。お前が和に染まり過ぎなんだが。
「――その情報、古いよ」
　織斑をどうやって強くするかと考えていると、隣からそんな声が聞こえてきた。
「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」
「鈴……？　お前、鈴か？」
「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」
　織斑の知り合いのようだが、偉く気取っているな。カッコつけたいお年頃って奴だろ

うか。
「何カッコつけてるんだ？　すげえ似合わないぞ」
「んなっ……!?　なんてこと言うのよ、アンタは!!」
「……そろそろ戻った方が良いぞ」
「はぁ。何でよ」
俺は自分の席に戻る。しばらくすると暴力装置がさっきのチビに鉄拳を落としていた。
「……一夏、今の誰だ？　知り合いか？　偉く親しそうだったな？」
ついでに織斑に迫っているアホ共も殴られているが、馬鹿な奴らだ。にしても二組のクラス代表が交代か……後で聞く必要があるな。

「お前のせいだ！」
「……自業自得だろ。未だ進展していないことも含めて」
そう言うと箒が唸るが、俺は無視して織斑を引っ張って食堂に移動する。
「どうしたんだよ、武」
「作戦会議だ。このままだとお前の優勝が難しいからな」

「え？　何で？」
「二組が専用機持ちになった。となれば優勝が厳しい」
　ただでさえ剣一本でようやく他クラスを倒せる程度の力だ。それでも四組は布仏から俺たちと同類に近い存在と聞いているため、周りと違って辛い戦いになるというのに、二組がここに来てクラス代表交代とか洒落になっていない。
「？　何で武が優勝を狙っているんだ？　もしかしてデザート狙い？」
「そうだが？」
「あ、いや、なんかごめん……」
　そんなこんなで食堂に着いた俺たちの前にチビが現れた。
「待ってたわよ、一夏！」
「邪魔」
「あ、ごめん」
　道を塞いでいるチビ。ああ、そういえばこいつも織斑狙いだったのか。しまったな。じゃあ先に姉の方に聞きに行くか。
　食券を出して自分が依頼したものを受け取った後、席に座る。織斑たちもセットで付いて来た。
「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？　おばさん元気か？　いつ代表候補生になったんだ

？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、なにＩＳ使ってるのよ。ニュースで見た時びっくりしたじゃない」

「……」

なるほど。活発系女子か。箒と違ってコミュ力はあるようだが、この様子を見る限りはただの友達だろう……胸はあまりないようだが、だがその分は身長が小さいのでカバーできるか。……そういえばクロエも小さかったが、今はどうなっているだろうか。ま、悠夜も「女の魅力は胸や尻だけじゃない。背が小さくて胸が小さくてもその欠点をカバーできるポイントがあればどうにかできる」と言っていたからな。思えば楓もクロエもそういうポイントはありそうだな……楓は将来、遺伝子的に美人系になりそうだけど。クソ姉や箒を見る限り胸も成長しそうだな。

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが？」

「そうですわ！　織斑さん、まさかこちらの方と付き合ってますの？」

偉く対象的な二人が来たな。片方はライバルが現れて冷や冷やして、もう片方はまるで面白いものを見ている感じだろう。お嬢様は恋愛に興味津々のようだ。

「べ、べべ、別に私は付き合っているわけじゃ……」

「そうだぞ。何でそんな話になるんだよ。ただの幼馴染だよ」

と言われて睨む凰。あ、たぶんアレだな。そこは付き合っていると肯定してほしかったところだな。俺は絶対にしないが。

「幼馴染……？」

と、何故か疑問を浮かばせる。別にお前以外の幼馴染がいたところでなんら不思議ではないだろうに。

「あー、えっとだな。箒と武が引っ越していったのが小四の終わりだっただろ？　鈴が転校してきたのは小五の頭だよ。で、中二終わりに国に帰ったから、会うのは一年ちょっとぶりだな」

「……その計算だと、一年で専用機持ちになったということか？」

「そういうことよ！」

と、ドヤ顔をする凰。素直に驚いている。俺はともかく戦闘以外は一般人の悠夜をはじめとして、普通の人間にとっては難しいＩＳの勉強を手早く終わらせるのだから並大抵の努力でないだろう。ちなみに一般人枠外の俺と零司は割と簡単に終わらせている。まぁ、悠夜はその分戦闘に特化しているからアレはアレで恐ろしいがな。

「で、こっちが箒と男の方が武。ほら、前に話したろ？　小学校からの幼馴染で、俺の通ってた剣術道場の兄妹だよ」

「ふーん、そうなんだ」

と、凰は箒を値踏みするような視線を向ける。
「初めまして。これからよろしくね」
「ああ。こちらこそ」
二人の間で火花が散ったのは決して気のせいではないだろう。
「ンンッ！　わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわね。中国代表候補生、凰鈴音さん？」
「……誰？」
「なっ!?　わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットでしてよ!?　まさかご存知ないの？」
「うん。アタシ他の国とか興味ないし」
「な、な、なっ……!?」
……というよりも、それどころじゃないってのが本音かもな。女って男に対してもそうだが、同性間でも反りが合わなければかなり酷い扱いをするというからな。
「い、言っておきますけど、わたくしはあなたのような方には負けませんわ！」
「そ。でも戦ったらアタシが勝つよ。悪いけど強いもん」
「大した自信だな。その自信が偽りでないことを祈っておく」
「アンタも随分な自信あるじゃない」

「そりゃそうだろう。一部例外を除いて基本的に女は雑魚だと思っている。もっとも俺はその例外を織斑千冬と姉の篠ノ之束以外知らないが」
「え？　じゃあやっぱり篠ノ之って――――」
「ああ。だが俺に接触したところで優遇は期待するな。アレは人嫌いが激しいからな。睨まれたくなければ普通の友人程度の付き合いもしくは純粋な恋愛による恋人同士の付き合いをお勧めする。恋愛に関してはジョークだがな」
　流石に俺に惚れろとは言わないが……というか俺に惚れる奴が現れるか疑問だけどな。一生独り身の可能性が高い。
「改めて。二人目の男性ＩＳ操縦者の篠ノ之武だ。そこにいる無駄乳コミュ障ポニテの双子の兄でもある」
「おい待て。何だそれは」
「お前を表すに実にいい言葉だと思うがな」
　と言ってから凰の方を見ると目を輝かせていた。
「や、やっぱり胸だけがすべてじゃないわよね!?」
「当然だ。確かに胸は魅力の一つであることは否定しないが、むしろ小さいことによって可愛さが引き立つという点もある。そうじゃなければ小学生などに性的興奮を覚える者もいないし、幼児体型に萌を感じる者も存在しないだろう？」

「……なるほどね」
「ま、織斑の性癖なぞ俺は知らんが。いっそのこと二人っきりで襲ったらどうだ？」
「武、貴様風紀を乱させるつもりか!?」
「お前の場合は風紀とは関係ないだろうに。それにお前だって織斑の性癖は気になるんじゃないのか？」
「そ、それは、そうだが……」と小さく呟く箒。それを見て一夏は「何を言っているんだ？」と言い出している。
「そう言えば武さんの好みのタイプはどのような方ですの？」
「……タイプ、か？」
と言われて俺は考え込んだ。俺のタイプ、か。というか俺はそれ以前に――
「性的興奮と無縁だからな。昔に襲われて返り討ちにした時以降、そんなことした覚えがない」
「え？　返り討ち？」
「ああ。相手の銃を奪って、両耳を吹き飛ばした。相手が実銃を装備していたのは驚いたが、あの時ばかりは助かった。前例があったことで女が強いと思っていたからな。だが現実は実銃で耳が吹き飛び、階段から落ちて死亡。その事で俺が殺したと疑いをかけ、暴行を加えてきた女警官を再起不能にしてやった。それだけだ。強者を名乗ってお

いて中学生に素手で負けるなど論外だ。その後警察署で暴れたが、その時は実力者がいなくて簡単に抜けだせた。にしても意外だったのは誰も飛んでこなかったんだよな。ＩＳ技術を応用すればＩＳなしでも人類は飛べるし、何よりＩＳなしで施設の破壊など容易いというのに」

「……え？　飛ぶって、跳躍とかじゃないわよね？」

「飛行に決まっているだろう」

　凰は驚き、オルコットも本気で引いている。一体どうしたというのだ？

「い、ＥＯＳを使っているとかじゃ？」

「あのデカブツだけのエネルギー効率クソ兵器を誰が使うと。普通に飛ぶのさ。ＩＳスーツは必要だけどな」

「……え？」

「姉が篠ノ之束だと言ったろ？　小さい頃に無理言って一着譲ってもらったんだ。それをちょこちょこっと改造して、ＩＳなしでも飛行できるようにしていたのが小五の時。そしてＩＳなしでも人に流れるエネルギーを応用して高威力へと変換する銃を作ったのが小六ぐらい。そして非固定浮遊部位に変換して、今ではどのような衣装でも空を自由に飛べる」

「あ、アンタもそんなことできるの？」

「む、無理だ。私はこれまでずっと剣道しかしていなかったからな。というか姉さんもそうだが、やはり武も十分規格外過ぎないか……」
「そ、そうですわね。あのガンプリンセスも一人で作ったと言いますし……」
「そう言えば、俺との特訓に使っているロボットって武が作ったって……」
「あれくらい普通だろ。というか普通に少し前のロボットアニメ見てたら誰だってああいうのを作ろうとするだろうし。それに十年あって男を見下し続けるならスペースコロニーを打ち上げるなり宇宙艦の百や二百あっても不思議ではないと思っていたからな」
　現に零司はそうしていないことにガチギレしていたし。
「ま、そんなこともあって性的興奮って全然しないんだ。残念だったな」
　そう言ってすべて食べ終わった俺は席を立つ。
「もう行くのか？」
「ああ。職員室に用があるのでな。世界がどれだけ無能を極めたのかという談義も良いが、それよりも少々聞き出す事案があるのでね。ああ、それと凰」
「何かしら？　それとアタシのことは――――」
「放課後、特訓の時は近づかないでくれ。残念ながら一組の代表は弱いのでね。あと、抗議は受け付けない。他クラスに配属された運命とでも思ってくれ」

食器を乗せたお盆を返却口に戻した後、職員室へと足を運んだ。

職員室に着いた俺は挨拶もせずに目的の人物を見つけるとすぐに近づく。

「どうした篠ノ之兄。それと入室する時に挨拶をだな――――」

相手の主張を無視して椅子から無理矢理立たせた後に近くの壁に寄せると同時に相手の顔の近くの壁を叩く。

「お、おい――――」

「どういうこと？　何で二組のクラス代表が変わっている？　基本的に一年間の変更はないという話じゃなかったのか？」

後ろから「か、壁ドン……」とか「ブリュンヒルデに対して壁ドンって……」とか「まさかのタケ×チフ!?」とか聞こえるが今は無視だ。あと最後のカップリングはまず実現しない。

「……何だ。そんなことか……」

「……何で残念そうなんだ」

「気のせいだ」

真顔になった織斑千冬。

「だが教師を壁ドンするのは関心せんな」
「相手を逃がさないには有効と聞いたのだが？」
「……いや、正しくはあるが、そうする場合――」
と何故か山田先生の方を見るので視線を追うと、何故かキラキラしていた。
「私のことは大丈夫なので続けてください！」
「……なるほど。確かにそうだな。とりあえず勘違い教師は後で消すとして、それよりもクラス代表の件だ。何故二組のクラス代表が変更になっている」
「……ああ。その件だがな――」
「――何か問題でも？」
と誰かが話しかけてくる。
「誰だお前？」
「あら、教師に対して敬語を使わないなんて礼儀がなっていないわね。年上には敬語を使うものよ？　それとも知らないのかしら？」
「生憎、俺はお前らのように十年もありながら大して技術を発展させられなかったお前らを敬う気持ちなんて持ち合わせていない。御託を並べる前に努力を重ねたらどうだ？」
「……随分言ってくれるじゃない。そこまで言うならあなたはそれ以上の技術を持っ

ているというのよね？」
「良いだろう。これより倉持技研とやらを消してくる」
「おい！　春原先生も怖い事言わないでください！　コイツの場合は昔から一般的には不可能と思われている技術を平然と完成させるのですから！」
「は、はい！」
　何を焦っているんだ、この女は。
「安心しろ。襲撃にＩＳ装備は使わない」
「それはつまりＩＳなくてもＩＳから逃げ切れるという事だよな。というかお前、何故倉持技研を？」
「そりゃあ白式の権利が絡んでいるからな。それにあそこのもう一機の機体凍結理由が気に入らない」
「……その話か」
「マルチロックオンシステムぐらいは一日あれば組めるだろうに」
「それできるのはお前と束くらいだからな!!」
　と聞いた俺はため息を吐いた。
「あの姉は一時間あれば普通にできるぞ？」
「……否定、できん」

そりゃそうだろう。あの女はとことん規格外だからな。俺の技術なんてあの姉に比べてはまだまだだ。もし俺が本当の天才なら、あの無頓着女の所にクロエを置いて行かなかったのだがな。

「とりあえず、その話は隣で話そう。春原先生も、こいつはなんとか説き伏せておきますので」

「……わかったわよ」

織斑千冬に案内され、応接室に移動した俺たちは話の続きをした。

「それで、何で二組のクラス代表が変わった？　確か規定では既に締め切られていたはずだろう」

「別に珍しいことではない。特に凰の場合は元々入学予定があったが、機体の調整で遅れていたのが理由だったからな。その事もあって予め交代するかもしれないという連絡があった。それとも何か不都合があるのか？」

「デザートフリーパス」

「……そう言えばお前、デザート好きだったな」

と言ってから俺の腹部に目をやる織斑先生。

「どうした？」

「何でもない」

「……んで、それで俺をクラス代表にすることは」
「不可能だ。……というよりも、伏せるように言われたが一番反対したのは教師よりも学園長なんだ。あまりにも強すぎるため、という理由でな」
　……なるほど。合点がいった。つまり理事長が阻んだという事か。……確かにクラス代表をさせるよりもサポーターにさせた方が俺たちの目的のために動きやすい。
「……そう言えば私もお前に話があったんだ」
「どうした？」
「……お前は今も束と繋がっているのか？」
「向こうはともかく、俺はそのつもりはないさ」
　そう言うと織斑千冬は本気で驚いている。……そういえば、こいつは俺が姉貴にべったりだった時しか知らなかったな。
「……その、どうしたんだ？」
「別に。ただもうあの姉を目標から外しただけだ」
　それでもあの姉が本当の天才であることは認めている。馬鹿要素が混じっているのは理解しているが……というかあの女が開発したのは公式的には白騎士と暮桜の二機だけだが、白騎士はともかく暮桜の仕様はどう考えても異常だ。良く優勝で来たな、この女。

「……そう、か」
「安心しろ。俺は確かに異常者の自覚はあるが、だからと言ってこの学園に手を出す気はない。その代わり俺の好きにさせてもらうがな」
「……倉持技研を襲うのは？」
「とりあえず延期しておいてやる。だが織斑の成長が限界を迎えた時、考えるがな」
そう言って俺は応接室を出る。とりあえず、織斑の訓練メニューを変えよう。

第１０話　嫌な予感と哀れな少女

放課後、第三アリーナに訪れた俺たちの前には意外な顔があった。
「な、なんだその顔は。おかしいか？」
「いや、その、おかしいっていうか……」
「おかしいというより似合い過ぎているな。切腹でもするの？」
「せんわ!!」
したら流石に両親に申し訳がないので止めるが。
「では一夏、構えろ」
「……待とうか、箒」
「何だ？」
「オルコットも加わったことだし、織斑には新しく特殊軌道を覚えてもらう予定だから、今日は余計にいらないぞ？」
「なっ!?」
本気で驚愕している箒。
「織斑、オルコットは先に行け」

「あら、構いませんの？」
「問題ない。箒は箒でいずれ鍛えるつもりだったからな。今日はアリーナ全て使えるから、織斑とオルコットは向こうの方で、こいつは俺が面倒を見る」
「私は一夏と――――」
「わがまま言うなっての。つうかお前は筋は良いんだから鍛えればかなりの物になると思うぞ」
　そう言って俺は先に出る。箒も渋々という感じで出てきた。
「それで、どうすると言うんだ？」
「まずはお前の腕がどれだけ発揮できるか確認する。この攻撃を防げ」
　そう言って俺は近接小型連射砲《ヘッジホッグ》を右肩部に展開して発射する。すると箒はそれをいとも容易く捌いてみせた。
「……あれ？」
　いや、技術として切り払いとかあるけど、いくら何でもＩＳ初心者の動きじゃない。
……いくら篠ノ之とはいえ、ここまでなのか。
「どうした武。もう打ち止めか？」
「いや、妹ながらその動きに驚いているのさ。ランクＣだと普通、そこまで動けないはずなんだがな？」

まさかあの姉が細工したか？　いや、むしろ今開発中の機体に全力を注いでいて、何よりもその驚きようを見たがるのがあの姉のことだ。ということはこいつ自身の実力か。
「私とて、伊達や酔狂で竹刀を振っていたわけではないのでな」
「……なるほど、な」
よく考えれば、特訓の際に親父だってできていたのだから、コイツにできない……いや年期が違い過ぎるだろ!!
「まぁいい。これもまぁある意味喜ぶべきか……」
「どうした？　もう終わりか？」
「安心しろ。まだだ」
本来ならミサイル迎撃用なんだが、どこまで防げるか気になったので遠慮なくぶっ放すことにした。
「……おーい……うん。あれ絶対に聞こえてない」
「なんだかんだで仲が良いのですわね。はぁ。わたくしも弟妹が欲しかったですわ」
なんか外野が五月蠅いので、後で潰すとしよう。

「よし。今日はこの辺りで終わりにするか」
「お、おう……」
　と、唯一体力切れに近い織斑を見下ろす俺たち三人。
「ふん。鍛えていないからそうなるのだ」
「つうかお前は少し体力付けろよ。当日は三連だって考えられるんだからな。ってことで箒。明日からはその胸使って早く起こせ」
「……ふ、ふざけるな!!」
「じゃあいつ使うんだよ」
　果たしてこのコミュ障に使えるタイミングなんて存在するのだろうか？　いや、ないな。
「とりあえず織斑、お前は後で整備室な」
「え？　何でだよ」
「試合前に一度白式を見ておきたいんだ」
「……わかった」
「じゃあ、俺は先に行く」
　ピットに戻って着替えて整備室に向かう。着いたら今いる場所からの道を織斑に送っておく。どうせ迷うからな。

整備室に入ると、そこは珍しく人があまりいなかった。
「いい加減にしない、簪」
奥の方で二人の生徒が言い合いをしているそうだ。関わる気はないので俺はそのままスルーしようとしていると、二人の内の一人に妙に見覚えがあった。
「……」
まさか、な。いくらなんでもあり得ないだろう。確かに悠夜の顔は美人のソレだが、いくら女装して学園内に潜入するなんて、ありえない。
首を振って自分の機体の状態を見ていると、一夏が現れた。
「悪い、武。待たせた」
すると二人が織斑の姿に反応し、その内一人が織斑を睨む。
「な、何だよ」
「……で、織斑。あの子は何番目の被害者の関係者だ？」
「何で!?」
そりゃあお前の事だからな。どうせどこかで傷つけて怒らせたに決まっている。
「……あなたが」
「？」
「あなたのせいで……」

機体を量子化したその女はどこかへと行く。
「何だ、アレ」
「ごめんなさいね、二人とも。ちょっと今の彼女、神経質になっているの」
だろうな。そうじゃなければあんな態度はそうそうされない。
「えっと、あなたは――」
「あの子の関係者とだけ名乗らせてもらうわ」
「そ、そう……」
「また後でね」
そう言って去っていく誰かさん。その後、俺が持つ端末からメッセージが届いた。
【俺の女装、最高だろ？】
やっぱりお前か、悠夜め。
全く。何で女装してやがるんだとか、色々言いたいのだが――
「なぁ武」
「……あ？」
「さっきの人、凄い美人だったな……」
「……ああ。そうだな」
織斑の様子がおかしくなった気がしたが、とりあえず俺は白式のスペックを調べるた

めに織斑に四角のエリア入るように指示する。少しばかり心ここにあらずだったが、なんとか従ってくれた。

そしてスキャンを始めさせて詳しいスペックを見せてもらうが、結果を見ると白式は正気と言えないものになっていた。

「一体何の冗談だ、これは」

「どうしたんだ？」

「正直、これはどう考えても織斑程度の操縦者に渡す代物じゃない」

そもそも、暮桜からしてまともな戦闘タイプとはいえない。それを可能とし、一時期流行らせた織斑千冬は剣道の経験を上手く活かしたと言っても過言ではないだろう。正直、その分技術の発展が遅れたとも言いたいし何より女が助長した原因として言いたいが、それはともかくだ。制作者は一体何を考えて――――あ？

俺はもう一度その画面を見て舌打ちをする。

「……とりあえず、追加装備を入れられないという異常はあるが問題はなさそうだ」

「そうなのか？　その割には武の顔が怒っているんだが……」

「気のせいだ」

そりゃあ、怒りたくもなるさ。誰が作ったのかわかっちまったんだからな。

「ともかく、またクラス対抗戦の前に一度見る。近い内に姉からパーツの発注を習って

おけ」

「わかった」

そう言って織斑は白式を受け取って整備室を後にする。俺も軽く銃姫のチェックを行ったかが、やはり自動修復機能が優秀過ぎてあまり弄るところがない。

そして自分の端末にメッセージが他に来ていないか確認し、楓から「今日はパパとママの家に泊まります」というメッセージが送られてきて、その後に親父から「楓をこちらで預かる」とメッセージが来ていたことを確認した。まぁ両親と上手くいっているようでなによりだ。ま、楓はあのクソ姉並のスペックを持っているのに、俺たちを反面教師にし続けた結果として人を誑し込む術まで手に入れてしまったある意味での悪魔の子になっている。流石は天才。

整備室に誰もいないことを確認した後、電気を消してロック機能をかける。それから俺は二人に連絡を取った。

ＩＳ学園には前年度終盤から大まかに分けて三つのエリアが存在する。

一つは俺たち学生が利用するエリア。そして二つ目はＩＳ学園内に存在する研究機関に出入りする人間たちのエリア。ここまではＩＳ学園ができた時から存在していた

が、三つ目からは最近できたエリアで、孤児たちが自分たちの生活を確立するために増設されたエリアだ。

　元々ＩＳ学園の人工島は十年前に建設が開始されそうになっていたところを国が買い取ったので日本の監視下に置かれているので土地を私有化できないのだが、そこは轡木十蔵の手腕というか零司の技術力の高さがそうさせたのか知らないが、最近になってＩＳ学園には農業などの研究を名目に孤児たちの住居が許可されたエリアがあった。そこはもしかしたら本当を超えるほどの厳重な警備を敷かれており、場合によってはその島独自で離脱が可能となっている。

　そんなところに移動が許可されているのは、本当の人間では今のところ俺と楓のみ。特例中の特例なわけだが、俺はそこに足を運んでいた。

「急に時間を作ってもらって済まないな」

「……別に良い。基本的に僕らは自由だし」

「そう言ってもらえると助かる。これは後で悠夜にも行っておいて欲しいのだが、今度のクラス対抗戦でどこかの馬鹿が襲撃してきそうな気がしてな。その対策を立てておきたいんだ」

　そう告げるとさっきからパソコンに視線を向けている零司の手が止まった。

「……誰？」

「十中八九、篠ノ之束だ」
「……何のために？」
「これを見てもらえるとわかる」
そう言って俺は先程白式からコピーしたデータを見せる。
「……これ」
「ああ。一体何を考えているのかわからないが、何故か白式唯一の武装《雪片弐型》に展開装甲が使われているんだ」
展開装甲とは、攻撃と防御、そして機動の支援機能が搭載された通常装甲から生える形で存在する高性能エネルギー兵装だ。それを機体に搭載すれば正しく最強の機体となるだろう。だがエネルギー兵装に分類される機体にあるあるなのだが、常時展開していればエネルギーを漏らしているようなものなのでエネルギー切れを起こすのだ。それこそ無限エネルギーが存在するならばともかく、ＩＳには存在するのは存在するが制限がかかっているためフルチャージに時間がかかるしでデメリットだらけというべきだろう。銃姫にも搭載されているがあくまで切り札的な使い方しかしていない……というか使ったっけ？
そんなエネルギー大量消費武装なんて一体どうしようというのか。
「……普通に忍び込んで回収、とかじゃダメなの？」

「あの姉はともかく派手好きだからな。特に織斑千冬を警戒しているし、動けない状況にさせて襲わせる事を考えるだろうな。突入させてあっさり撃破されましたとかだったら意味ないし」
「……確かに」
　まぁ、徹底的に邪魔されたら最終的にこっちに来るだろうけど。特に今俺以外に織斑の白式に接している奴なんていないし、俺と接触してデータをもらった方が向こうも楽だろう。
「……それで、本音は？」
「姉のわがままでデザートフリーパスが無くなるのは惜しい」
「……似た者同士」
「……まぁ、そんなわけだ。頼むが俺に協力してほしい」
　そうやって頼み込むと、零司は「大丈夫」と答えた。
「……分け前」
「襲撃者次第だと言わせてもらおう」
　おそらく俺の事は警戒しているだろうからな。たぶん一機ずつ確保できると思うが。あくまでも希望論だ。
「……わかった。それにどうせ、武は研究している時間がないからこっちで引き取るこ

とになるし」
「痛いところ付くなよ」
確かに最近、研究できていないけどな!!

寮への帰り道に自販機を見つけた俺は、何かかって帰ろうとするとすすり泣きが聞こえてきた。
「そんなところで何やってんだ、凰」
そいつの名前を呼ぶと俺に気付いたのか、慌てて目を拭いて「なんでもない」と答えるが、どう考えても何かがあっただろう。まぁ織斑絡みなんだろうが。
「……織斑への告白にでも失敗したか?」
なんて、そもそも告白する勇気がこいつにあるわけが――
「……」
え? したの? てっきり箒と同じでそんな勇気を持てずに燻ぶっているものかと思ったがどうやらそうではないらしい。
「マジ?」
「……そうよ。笑いなさいよ。どうせアタシもずっと笑っていた奴らの仲間入りよ。

蓋を開けてみればこれよ。アタシなんて……アタシなんて……」
　ダークサイドに落ちようとしているし、そろそろ門限だし、流石に帰った方が良いだろう。
「あー、別に取って食うつもりはないけどさ……部屋に来る？」

　部屋に戻ると、そこには俺の作りかけのプラモとかが置かれている反面、楓の物だけはぴっしりと整頓されている状態だったのを見て凰は心から驚いている。
「アンタ、あんまり掃除しないの？」
「同居人が今凝っていてな。一時期一人暮らしだったし、それなりにはするさ」
「……そうなんだ」
「ま、主夫極めた織斑には劣るだろうが」
「……そうね」
　と、遠い眼をどこかに向ける凰。これまでの女は大体姉みたいなぶっ飛んでいる奴とか、織斑千冬みたいな暴力女とか、箒のように意固地な奴とか、クロエのような大人しい奴か……もしくは大体俺に危害を加えようとする奴だったのでこれはちょっと珍しいと思った。

冷蔵庫にあるジュースが入ったペットボトルを二本取り出してからベッドに座った俺は、凰が椅子に座っているのを確認してからペットボトルを差し出す。受け取ったのを確認して手を離すとすぐに彼女は呑み始めた。どうやら喉が渇いていたらしい。

ひとしきり飲み終えてから俺は凰に尋ねる。

「そういえば、何で織斑の事が好きになったんだ？」

「……その、昔ね。日本に来た時に言葉の壁で虐められていたことあって」

「あー……」

子どもってそういうのがあるからなぁ。言っている本人にしてみれば大したことはないが、言われたら傷付くものだ。

「それで織斑に助けられた、というわけか」

「……まぁ、ね」

テンプレ過ぎて草生えるとはまさにこの事だろう。まぁ似たようなことで惚れている奴がいるからどうも言えまいが。

「ってかよくそれでＩＳ操縦者になろうと思ったな。普通、別の手段で日本に来た方が安全だろ」

「そりゃあね。ま、才能があったってのもあるけど、やっぱり一夏と並び立つならちゃんとした女の方が良いじゃない」

それが今完全に無駄になっているわけだが、なんとも思わないのだろうか？　にしても、ちゃんとした女になりたいならマジで花嫁修業してって感じだ。
「変わってるな。いや、今の世の中だとそれが普通なのか？」
「どうかしら？」
まぁ、今の世界だと「私たちの力になるから」って理由でＩＳを動かそうとする奴が大半だっただろう。それがどれだけ愚行なのかを理解せずに。目の前にいるコイツも同じかと思ったが。
「そういうアンタだってかなり変わっていると思うわよ。あれだけ女の事を否定しておいて、今はアタシを慰めようと部屋に連れてきて――――あ、もしかしてアタシの身体目当て――――」
「安心しろ、凰」
「何よ」
「俺がお前に手を出す時は、この地球が俺の手で更地になってもお前が生き残っていた時に限る」
そう言うと凰は俺が冗談でも言ったと思ったのか笑い始めたので俺も釣られて笑った。
「そういえば、凰はなんて織斑に告白したんだ？」

「……」

重大な事を尋ねると凰は沈黙する。「言ってもらわないとわからないだろ」と言うと小さな声だったが「……料理が上達したら、毎日私の酢豚を食べてくれる？」とはっきりと口を出したので俺は思わず頭を抱えた。

「凰。それは悪手だ。相手はあの織斑なんだから」

「……ええ。見事に勘違いされたわ。奢ってくれるものだって」

……は？

いや、素直に、は？　だ。何でそんな発想になるのやら。今の世の中の女は皆男が奢るものと思っているような存在だぞ？

「よくもあそこまで能天気に育ったものだな。道理で今の機体に普通に適応できるわけだ」

「……ちょ、アタシが言うのもなんだけど、それって酷くない？」

「いや、織斑の方が酷すぎる。何をどう勘違いすればそんな勘違いに至れるのやら。俺には理解できない」

「……アンタの女批判って凄く根が深いってことはよくわかったわ」

と同情的な視線を向ける凰。そんな目で見られても俺の根底は変えられない。

「気にするな。考えたところで無駄だ」

「……そういうことにしておくわ」
　凰は立ち上がって俺を観察する。
「話を聞いてくれてありがと。思ったより良い人じゃない。女批判は激しいけど」
「……一つ勘違いしているぞ、凰」
「何よ」
「俺は女だけじゃない――――世界を批判している」
　そう言うと驚く凰だが、当然かもしれないが、それでも俺は世界が嫌いだ。だが凰は小さく「当然かもね」と呟いてから俺に言った。
「でも、対抗戦は負けないわよ」
「むしろ織斑に負けないように気を付けるんだな」
「わかってるわよ。絶対に泣かせて買ってやるんだから。ジュース、ありがとね！」
　部屋を出て行く凰。そんな彼女を見て俺は内心、別世界では「姉御」とか呼ばれてそうだなと思った。

第１１話　現れた敵

あの日から数日が経過したが、凰が行動を起こそうとはしていなかった。たまにすれ違ったが織斑と一緒の時は無視して俺単独だと挨拶する程度。あの部屋で危険人物だという事は認識できたようだ。ま、箒の存在があるから俺の事は基本的に敵だと思っているのだろうが。

そんな状態だったのだが驚いたのは織斑が何もしないことだった。一度その事について聞いてみたが、「向こうが放っておいて欲しそうだった放っておいた方が良いだろ」という事だが、たぶんそれは間違いだろう。恋愛経験が無い俺の意見なんて参考にならないが、それを聞いたオルコットは顔を逸らしたからあながち間違いではなさそうだ。

「……織斑さんに惚れる方は、苦労しそうですわね」

と呟いていたので、どうやら彼女は織斑には惚れていなさそうだが、その事については間違いではない。まぁ箒に関しては行動しなさすぎているところはあるが。

そんな現状が続いている中、クラス対抗戦はいよいよ近づいてきてアリーナが調整に入るのでＩＳでの特訓は今日でおしまいになる。後はトレーニングするなりで自力を

上げるしかない。その事を今回もまたＩＳを使えるようになった箒が述べているが、誰がお前の相手をすると言ったのか。

今では織斑の戦闘方法に納得している箒だが、当初戦い方を見た時に「剣を投げるなどふざけているのか！」と怒鳴ってきた時は姉の存在を隠しきった俺を誰か褒めるべきだろう。妹にすら配慮できる俺、素晴らしい。……なんだろう。涙出てきた。後で楓に癒してもらおう。クラスメイトに癒し代表と言われている布仏がいるが、悠夜に殺されたくはない。

「ＩＳ操縦もようやく様になってきたな。今度こそ――――」

「まぁ、わたくしと武さんが訓練に付き合っているんですのもの。このくらいはできて当然。できない方が不自然というものですわ」

「あんまりプレッシャーを与えてやるな。いざと言う時に縮こまって動けなくなっては困るからな」

別に戦わなくても良いが、流石に逃亡手段まで忘れられては困るしな。

「どうせなら最後なんだし、実戦形式でもやるか」

そう言うと織斑が「待ってました」とテンションを高める。それをオルコットが妙に冷ややかな目で見ていた。心なしか箒もやる気のようだ。

「それで、一体どのような組み合わせで行いますの？　わたくしが単体で、というのなら

ば成長したことを証明しますわ」
「それも良いかもしれないが、織斑と箒の二人だと証明にならないだろ。せめて俺レベルが１０人いたとしても圧倒できるくらいには育ってもらないと」
「あなたレベルが１０人なんて悪夢そのものですわ！」
「……え？　そこまで言う？」
まぁ確かに俺が１０人もいたら世界終わっているかもしれないけど。
ピットに着いたのでドアを開くと、そこには先約がいた。
「待ってたわよ、一夏！」
と、アホが腕を組んで立っていた。哀れな奴だ。腕を組んでも胸がそこまで目立っていない。愚妹ならば間違いなく揺れるのに。オルコット？　知らん。
「貴様、どうやってここに来た！」
「……関係者以外は、基本的に入れないはずなのですが」
「アタシは一夏関係者よ。だから問題なしね」
「……ほほう。どういう関係かじっくり聞きたいものだな」
ただの腐れ縁程度だろうと突っ込んだらたぶん今度こそキレると思ったので自重した。織斑が箒を見て妙な反応をしているなと思っていると、何故かオルコットが俺の腕を掴んで箒から隠れるように移動している。

「な、何なんですの、あなた方兄妹は。もう既に人間を辞めていません!?」
「あの程度で、か。それならまだクソ姉の方が十分辞めてるな」
「……はい？」
俺とオルコットでやってて思ったがおかしな会話をしていると、織斑と箒の方でもおかしな会話をしていた。
「……おかしなことを考えているだろう、一夏」
「いえ、なにも。人斬り包丁に対する警報を発令しただけです」
「お、お前と言う奴は――――」
織斑掴みかかろうとする箒だが、その間に凰が割って入って止める。
「今はアタシの出番。アタシが主役なの。脇役はすっこんでてよ」
「わ、脇や――――」
「はいはい、話が進まないから後でね。……で、一夏。反省した？」
あ、箒が大人しくなった。戦略的撤退だろうか。
「へ？　何が？」
「だ、か、らっ！　アタシを怒らせて申し訳なかったなーとか、仲直りしたいなーとか、あるでしょうが！」
全く。無駄なことをしていることに気付いていないのか？　そんなことを言ったと

ころでどうにかなるわけないのに。そもそもあの女、どれだけ織斑に気付いてほしいんだっての。

「いや、そう言われても……鈴が避けてたんじゃねえか」

という奴にまともな告白をしないといけないって何故わからないのか。あの時の会話でそれをわかったのじゃなかったのか？

「アンタねぇ……じゃあ何？　女の子が放っておいてって言ったら放っておくわけ？」

「おう」

……これに関しては俺も同感だな。藪蛇を突いたところで自分に不利な状況なんて誰も作りたくない。ましてや今は女尊男卑。下手に関わって冤罪で訴えられたらその冤罪が真実になるくらいの酷さだ。そんな世の中で押してダメなら引いてみろなんて作戦、通じるわけがない。

「なんか変か？」

「変かって……ああ、もうっ！」

とは言え織斑の態度にも問題があるな……と言ってもこいつ、何で凰がキレているのかわかっていないんだよなぁ。

「謝りなさいよ！」

だからこそ、今の織斑に謝れって正しく悪手だ。

「だから、何でだよ！　約束覚えてただろうが！」
「あっきれた。まだそんな寝言言ってんの!?　約束の意味が違うのよ、意味が！」
　さて、どうしたものか。こっちはそんなじゃれ合いに時間をかけられたら困るんだがな。
「下らいことを考えてるでしょ!?」
　織斑は織斑で集中力が無くなっているのか別の事を考えているみたいだし、そしてそれで凰のボルテージが上がっている。
「あったまきた！　どうあっても謝らないっていうわけね!?」
「だから、説明してくれりゃ謝るっつーの！」
「せ、説明したくないからこうして来てるんでしょうが!!」
　たぶん、当事者だったら今頃凰を入院――――下手したら再起不能にまでしていたな。まぁ今回は凰の気持ちも少なからず同情できるし我慢してやっているが。
「じゃあこうしましょう！　来週のクラス対抗戦で勝った方が負けた方になんでも一つ言う事を聞かせられるってことで良いわね!?」
「おう、いいぜ。俺が勝ったら説明してもらうからな！」
「せ、説明は、その……」
　と顔を赤らめる凰。ま、告白をしたことを説明させるとか拷問でしかないからなぁ。

「何だ？　止めるなら止めてもいいぞ？」
織斑のその一言が凰にとっては余計なお世話だったのだろう。凰は一気に沸騰した。
「誰が止めるのよ！　あんたこそ、アタシに謝る練習しておきなさいよ！」
「何でだよ、馬鹿」
「馬鹿とは何よ馬鹿とは！　この朴念仁！　間抜け！　アホ！　馬鹿はアンタよ！」
「うるさい、貧乳」
その瞬間、俺たちの後ろで爆発音が響いた。その衝撃でピット内が揺れる。凰は右腕部を肩までＩＳを展開しており、アーマーに紫電が走る。
「言ったわね……。言ってはならないことを、言ったわね！」
「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん」
「今の『は』!?　今の『も』よ！　いつだってアンタが悪いのよ！」
俺は盛大にため息を吐く。そして――
「ちょっとは手加減してあげようとかと思ったけど、どうやら死にたいらしいわね。良いわよ、希望通りにしてあげる。全力で――」
さっきからごちゃごちゃと五月蠅い凰を蹴り飛ばした俺は残念に思いながら言った。
「少しはマシな奴が現れたと思ったが、どうやら見込み違いだったようだな」
「ちょっと、どういうつもり――」

「――――黙れ」

オルコットの危機管理能力の向上を素直に喜びながら凰に銃を向けて発砲した。それを直に食らって凰は察したらしい。

「アンタ、何でそんな攻撃――――」

「コピーとでも思った？　敢えてそう念じて放出しただけに過ぎない。俺はお前ら女とは違うんでな。ましてやお前で証明できた。俺の作ったものはＩＳにもダメージを与えられる」

「調子乗んな！　アンタからスクラップにしてやるわ!!」

「……俺をスクラップに？　やるもんならやってみろよ」

そう言って武装を展開しようとした瞬間、後ろから殺気を感じたので回し蹴りをすると受け止められた。

「チッ。アンタかよ」

「……お、織斑先生……」

「……凰、あれはお前だな？」

織斑千冬が顎で指したのを見て、凰は顔を青くする。

「で、でも、それは、一夏が――――」

「さっき私の端末にこのデータが送られてきてな」

ズボンのポケットから取り出した映像には、凰がしっかりと織斑の近くを狙ってＩＳを使って攻撃をしていた映像が流れていた。
「こ、これ――」
「出所は知らんが、貴様がＩＳを使って生身の人間に撃っている風に見えるが？」
「そ、それは、その――」
「とりあえず、来てもらおうか」
凰は無理矢理織斑千冬に攫われてどこかへと連れていかれる。その間に俺の事も色々と言っていたが、俺は無視して銃姫を展開する。
「ちょ、武」
「重要度は凰の方が高い。さてと、織斑。相手の武装はわかったんだ――俺が呼ばれる前に対策しようか」
「……あ、うん。わかった」
織斑もＩＳを展開してカタパルト発射口から出て来るのを確認した俺は、織斑に徹底して凰の攻略を教え込むのだった。

それからしばらくして、凰は反省文５０枚。俺は凰を殴ったことで反省文１０枚を言

い渡されたが、その反省文１０枚を使って俺が反省する必要性が皆無であることと、世界が施行した女性優遇制度がどれだけ愚かという事と、織斑一夏がどれだけ鈍感すぎるかを書き綴ってやったのだが、やり直しを要求してきたので、ＩＳの本来の使い方と今の世界がどれだけ間違っているのかを書き綴ったら呼び出しを食らったので「反省する事はありません。最も反省するべきは世界でありますが、なんでしたら今すぐどれだけの愚行をしていたのかを証明したしましょうか？」と尋ねたら諦めたようだ。

■■■

クラス対抗戦、当日。第二アリーナの管制室には二人の生徒が訪れていた。一人は武の要請で一夏の特訓を手伝ったセシリア・オルコット。そして回数こそ少ないが積極的に関わっていた篠ノ之箒の二人である。本来ならば第一管制室と第二管制室にそれぞれセコンドの随員が許可されていたが、第二管制室には二組の担任以外は誰もいない。というのも凰鈴音の存在を好ましく思っていない派閥が大半だからである。

そんな状況だが、それよりも千冬はセシリアと箒を見て疑問に思った。

「篠ノ之兄はどうした？　今回のことで一番動いていたのはアイツだろう？」
「……さぁ。たださっきすれ違った時に「箒でも呼べば？」と言っていたので……」
「……私も何も聞いていません」
すぐさまそう答える箒にため息を吐く千冬。とはいえ、これで条件は満たし問題はないだろう。
（大方、どこかで待機はしているだろうが、奴がいないのは少し不気味だな……）
と考えたところで、ある事に気付いた。
（そういえば、妙に物分かりが良かったな）
千冬も昔から武が一夏を嫌っている節があることは感じていた。それは妹が取られそうだからとかではなく、純粋に自分の領域に足を踏み入れる敵と認識している雰囲気だった。だが今は一夏の事を助けているため、成長したのではないかと思ったが。
（まぁ、いない者の事を考えても仕方ない、か）
これから始まる弟の戦いに注目しながら、千冬は自分のするべきことを考えていた。だからこそだろう。そこに一人、異物が混じっている事に気付いていないのは。

アリーナの映像を見ながら武はコックピットで待機する。既にいつでも出れるよう

に操縦桿を握っていた。
『来たわよ』
「そうか。零司、行ってくる」
『……了解』
　フットペダルを踏みこむと同時に飛行形態の銃姫がカタパルトを疾走、射出されてブースターを噴かせた。
『目標は一――――いえ、武の予想通り二機よ』
「零司、俺の周囲５００ｍだ」
『……わかった』
　武が出てきた場所とは別の場所から槍のような形状をしたものが現れて散る。そして武からキッチリ５００ｍ離れた場所に移動して滞空を始めた。
『起動しなさい』
　武だけが聞こえる声がそう言うと周囲に滞空していた槍が開いてバリアフィールドを形成した。
『首尾はどうだ?』
『上々よ。どちらもエリア内に捕らえることができた』
　武は下の方に視線を向けると、さっきまで姿がなかった一機が壁に阻まれてぶつかっ

て透明化が解けていた。
『上から来るわ』
武はすぐに人型に戻りながら回避する。上には下にいるタイプとは形が違うタイプの敵がおり、武を狙う。武はすぐにエネルギーライフル《リヒトブリッツ》を展開して攻撃を始める。そして何かを感じた武はさらに右に回避した。
『下からも来るわね』
『先に上を片付ける。下を行かせた方が万が一まだ倒せるからな』
武は上にいるＩＳに集中的に攻撃を浴びせる。下から攻撃してくるがそれは展開したシールドやビットを使って防いでいた。そんな状況に一本のビームが戦況を変える。
「武、下は引き受ける」
「…頼んだ」
武はすぐさま二機目の角ありのＩＳに迫る。下にいたＩＳは一機のマシンの登場によって武に対する攻撃ができなくなっていた。
「……僕らの夢に、武には死んでもらっては困るから」
白銀の機体の両肩に着いている長い砲身から高威力のエネルギーを発射させた。すぐに離脱した両腕に大型の砲身を携えたタイプのＩＳ離脱するがビームが曲がって上にいる武ともう一機のＩＳに向かった。武は咄嗟に躱したが反応が遅れた構えていた

銃器が爆発する。
「ちょ、撃つなら先に言ってくれ！」
「……敵を欺くなら、まず味方から」
「今考えただろそれ！」
武は今の一撃を食らって相手がやられたと思って油断していたが、敵の攻撃に反応して腕部に仕込んでいるビームサーベルを抜いて相手の腕を切り落とす。
「……中身は？」
「あ……いつも通りやっち……こいつ、中身ねえな」
「……じゃあ、こっちもか」
二人が話をしている最中に進行ルートを塞ぐバリアを破壊しようと行動をしているもう一機に視線を集中させた。
「……さよなら」
零司はまた両肩の砲身をまた向けると、反応したＩＳが零司に迫る。だが零司は顔色を変えずにチャージを続ける。
「おい零司――――ってまたこいつか!?」
「……大丈夫。そして逃げて」
高威力のエネルギー砲が発射される。だが大型の腕部を持つＩＳは簡単に躱し、右腕

部を零司にぶつけようとしたところで零司が纏う兵器の左肩から巨大なエネルギー刃が現れて腕部を切断した。さらに右肩から巨大ビーム刃で機体を両断する。

その頃、エネルギーはまた曲がって零司に迫るＩＳを容赦なく焼く。

「流石は零司。えげつないな」

「……これくらい普通だよ。ただの妄想で済むならともかく、外宇宙に地球のように発展した存在がいないと限らない。そんな奴らから身を守るためにはどうしても力は必要だから」

次々と相手の攻撃を回避する武は零司が味方で良かったと思いながらも相手の攻撃を回避して右脚部装甲で胴体を真っ二つにした。

「俺も負けてられないからな」

深刻なダメージを受けて落下するＩＳ。床の役割を果たすそこに落下した機体は爆発し、燃え上がる。零司はすかさず消火剤を撒いて、あるものに気付いて回収した。

（とりあえず、一件落着か……）

機体を回収しながら武は思ったが、まだ今日は終わらない。

自分が放ったＩＳ。一機はある目的のために放ち、もう一機は武の介入を防ぐための

機体だった。だが結果はその襲撃すらあっさりと防がれたのである。
「……まさか、男でも乗れるＩＳが完成していたなんてね」
　しかも既に世界レベルを遥かに超えた代物。それが既に実用化しているなんて思わなかった束は舌打ちをする。しかもそれが弟に協力しているとは。
（普通だった私を殺しに来たり、この世界じゃ女に対して復讐でもしそうなのに）
　だがそんなことは一切せずにＩＳ学園に所属しているなんて。その事に違和感を感じていた束は盛大にため息を漏らした。
「ま、たっくんがＩＳ学園にいるからもしかしたらとは思ってたけどさ……あー、嫌だなぁ」
　未だに寝ている時に時々見る夢。まだ少し幼さが残る武が自分に言った事。
『――――結局、アンタが可愛いのはアンタが一番嫌う筈だってことかよ。あんな頭でっかちで姉さんが開発したインフィニット・ストラトスがどれだけ凄いものかわからない世界と一緒のレベルなのに。だったらそうやって可愛がっていれば良いさ！　俺は俺の道を行く！　アンタが行こうとしなかった道をな!!』
　武が自分と同種――――とまではいかないにしろ、かなり自分に近い存在だと理解したのはこの後だ。武は次々と自分が予定していた場所を襲撃し、すべてのデータを奪い取り、研究所を更地に変えていった。コア・ネットワーク内で例年以上に集中しているの

はそのためだろうと束は推測している。
　思えば、家族の中で武だけだったなと、後から悔やんだ束。確かにコアを手に入れたのは偶然かもしれないが、それでも破壊される予定のなかった機体を破壊し、これまで自分以上の非道を行ってきたその実力は本物だと束は認めているが、その後何度もかけた電話は取られることなく、メッセージはことごとく削除されている。武の近況を知れるのは自分の娘のコアにのみ送信されるメールのみだった。コピーとすら思えた領域外の妹とメールをしていた自分の娘に物凄く感謝したのは言うまでもない。
　束は立ち上がり、隣の部屋でＩＳの勉強をしている自分の娘に声をかける。
「くーちゃんくーちゃん！」
「……何ですか、束様」
「今日の夜、たっくんのところ行くから！　準備して！」
「！　わかりました！」
　くーちゃんと呼ばれた銀色の髪をした少女はすぐに準備に動く。その姿を見て束は自分の娘の行動に癒されるのであった。

ｉｆ―もし二人が仮面ライダーだったら―

「ではこれより、クラス代表者を決める」

一日目の夕方。織斑千冬が突然そんなことを言い出した。

「クラス代表者とはクラス対抗戦にも出てもらう代表者もそうだが、クラス委員のように生徒会に開く会議や委員会などに出席もしてもらう。基本的に一年間変更することはないので、慎重に選ぶように」

そう言ったのにも関わらず、クラスメイト達は次々と俺と一夏を推薦する。そもそも一夏はＩＳの事を一通り検索し終えたとはいえ、操縦はてんで素人。俺も似たようなものだ。そんな俺たちにクラス対抗戦に出ろと言うのは酷だと気付いてもらいたいものだ。

こっそりドライバーを付けて相談すると、向こうもやはりそんな気分らしい。ここは俺が例の彼女を推薦して、なんとか場を濁そうと考えていると先に向こうが動いた。

「待ってください！　納得がいきませんわ!!」

机を叩いて立ち上がる例の彼女――――もとい、セシリア・オルコット。先程、俺たち二人で今後の方針を話し合っていると割って入ってきたイギリスの代表候補生だ。

「そのような選出は認められません！　大体、男がクラス代表だなんて良い恥さらしですわ！　わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間に味わえと仰るのですか!?　実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいという理由で極東の猿にされては困ります！　わたくしはこのような島国にまでＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！　良いですか!?　クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！　大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとって耐え難い苦痛で――――」

「――――その意見、少し待ってくれないか?」

そう言ってオルコットの意見にストップをかけたのは他でもない一夏だった。

「おい一夏ぁ!」

「さっき君の事を検索したが、君には自分で言うほど実力はない。君の戦闘能力と武の戦闘能力を比較してみたが、君の持つ遠距離無線誘導型の兵器操縦技術は下の下。同型の機体で高威力の武の銃姫の方が圧倒的に強い」

「お前なにサラっとばらしてんの!?」

「だが武。ここは反論しておくべきだろう。それに彼女は今日本を馬鹿にしているが、個として日本人としてカウントされる武の技術力には全く及ばない」

「お前実は日本好きだろ!?」
「ああ。日本の娯楽技術は世界でもトップクラスのようだ。日本発祥のゲームなども今では世界大会として――――」
「もういい！　わかった！　わかったから！　落ち着け！」
　馬鹿と天才は紙一重と言うが、姉といいこのアホといいどうしてこうも面倒しか起こさないのか。しかもさらっと今検索したとか言ったな。勝手に入りやがったな。
「決闘ですわ！」
　そう言ってオルコットが指を差したのは――――俺だった。
「何で!?」
「当然ですわ！　わたくしよりもあなたの方が強いと言われて黙っていられません！」
　そりゃそうだよな。そうじゃなかったらさっきまであんなことを言い続けられるわけがない。
「……あー、悪いんだけどさ」
「何です？」
「悪いが俺も一夏も、クラス代表になるのは都合が悪いんだ。だからオルコットがクラス代表になってくれない」
「……何ですって？」

なにせこっちは本業がある。副業も手を抜くつもりはないが、現時点で色々と問題を抱えている以上、俺たちは本業に専念した方が良いだろう。
「あなたまさか、勝ち逃げするつもりですの？」
「……まだ戦っていないと思うが、まぁそんなものかな。ともかく俺はアンタと戦うつもりはないし、クラス代表になる気もない。これは既に学園長にも伝えてあり、正式に認められていることだ。だから俺は改めて、セシリア・オルコットを推薦する。彼女は代表候補生で、その中でも珍しい専用機持ちだ。実力は申し分ないと思うがね」
「……ま、まぁ、そこまで仰るのなら、わたくしがクラス代表になりますわ！」
アレだけ語っておいてそれか、とクラス中から思われているだろうが、誰もそのことは敢えて口にしなかった。

なんとかクラス代表という大役は回避できたものの、俺たちは放課後の教室で待機していると一人の生徒が目の前に現れた。
「久しぶりね、二人とも」
「やぁ鈴、久しぶり」
「久しぶりだな、チビ」

俺がそう言うと鈴と言われたチビっ子はどこからかスリッパを出して俺の頭を叩く。
「いってぇな。なにすんだよ」
「アンタがアタシにチビって言うからでしょ」
「それで鈴、二組の様子はどうだい？」
一夏が聞くと鈴は少し困った顔をしてから答える。
「あー、まぁ、普通よ。ちょっと怖い思想の子がいるけど」
「流石は天下のＩＳ学園だな。女の質が酷いと見た」
「……それに関してはノーコメントね。そっちはどうなのよ」
「どこかの検索馬鹿のせいで決闘騒ぎに発展しそうだった」
「だが事実だろう？　ＩＳの戦闘能力では既に武は一線を画していると言っていい」
それに関しては否定しないが、だからっていくらあの場であんなことを言わなくても良いだろうに。
「ま、アレに関しては本当に凄いもんね。正直もう戦いたくないって感じ」
「お前にそう言われると俺としては困るんだがな」
と話をしていると、俺がよく知る人物がこちらに近づいて来た。
「――――どういうことだ！」
何故か俺の机を叩いたそいつだが、それを見た一夏が睨む。

「君こそ一体何なんだい？　出会った瞬間になれなれしく接してきて」
「私の事を本気で覚えていないのか、一夏！」
「君の事を知らないと言っているだろう！　知っていたとしても、君のような恐ろしい女は願い下げだけどね」
　一夏からの言葉は効いたようで、ショックを受けた顔をする箒はそのまま涙を流して去っていく――――姿が最後まであったらアイツはさぞヒロインとなっていただろう。
「ちょっといいかしら？」
　去ろうとした箒の腕を掴む鈴。本名は凰鈴音という名前で中国代表候補生をやっている彼女だが、今では彼女は俺たち――――特に一夏の理解者となっている。
「武、ちょっと一緒に来て」
「ああ。わかった」
　どうやら一夏の事を説明するつもりなのだろうと察した俺は席から立って鈴に手を引かれる箒の後ろを付いて行く。鈴は適当な部屋に引っ張りこんだ。傍から見たら女を襲うそれだがとは言わないでおこう。
「な、何をするんだ。お前は」
「アンタでしょ、こいつの妹で一夏の知り合いって」
「幼馴染だ！」

「……まぁ、それに関してはどうでもいいわ」
　と言い始める鈴に箒が反論し返そうとするが、その前に鈴は言った。
「適当に誤魔かすの逃げてだから最初に言うけど、今の一夏は記憶喪失な状態なのよ」
「……ど、どういうことだ？」
「詳しい事はアタシも知らないけど、ちょっと色々あってね。見つかった時には今の状態ってわけ」
　そんな会話を聞いた時にスタッグフォンから着信音「Ｃｙｃｌｏｎｅ　Ｅｆｆｅｃｔ」が鳴る。相手は一夏からでディスプレイには「ＯＮＥ　ＳＵＭＭＥＲ」と表示されている。
「どうした一夏」
『大変だ武。ドーパントが外にいる』
　すぐに俺は窓の方に移動すると、確かにドーパントと思われる怪物が外にいる。相手は……セシリア・オルコットか。
　俺はすぐさまダブルドライバーを腰に付けると制服のポケットから黒いガイアメモリ「ジョーカー」を取り出してボタンを押すと辺りにそのメモリの名前が響いた。
《ジョーカー!!》
「「変身」」

一夏がソウルサイドに刺したサイクロンメモリが転送され、俺はそいつを押し込んでジョーカーメモリをボディサイドに差し込んで対極に開くとまた音声が流れた。
《サイクロン!! ジョーカー!!》
「な、何だそれは。遊んでいるのか?」
ベルトから音声が流れ始めると同時に俺の姿が変わる。窓を開けて俺たちは跳び下りると同時に俺はジョーカーメモリをベルトから抜いてマキシマムスロットに入れてボタンを押す。
《ジョーカー!! マキシマムドライブ!》
「『ジョーカーエクストリーム!!』」
身体が正中線を中心に身体が分割され、時間差でドーパントに蹴りを叩きこむとドーパントはまだ動けるのか逃げ出した。
「逃がすかよ」
『武。それよりも先に彼女を保護する方が先だ』
「……ああ、そうだな」
俺は変身を解かずにオルコットに近づくと、怖がったのか彼女はそこから逃げ去るように消えていった。

■■■

いきなり飛び出した武に驚きを露わにする箒。先程の形態の説明は鈴がした。
「あれは仮面ライダーW（ダブル）。一夏が記憶を失った時に持っていたベルトで変身してるのよ」
「一夏が持っていた？」
「そう。それで今二人は一夏の記憶に関係しているかもしれないドーパントを倒しているってわけ」
「……いや、待て。何故一夏が関係しているんだ？」
「Wは武の身体をベースに一夏が憑依する形で変身しているのよ」
その説明を受けた箒はそんなベルトを作った相手が誰なのか察し、脳内で姉に対して怒りを露わにするのだった。

第１２話　順調に進むクラス対抗戦

戦闘が行われている下で一夏は鈴音と戦っていた。当初一夏は中国の第三世代ＩＳ『甲龍（シェンロン）』のパワーと衝撃砲に圧倒されたが、それもすぐに収まる。

「このっ！」

衝撃砲が放たれるが、一夏は回避して無茶苦茶な機動を取り始めた。

「そんな機動でアタシを惑わせられると思ってんの!?」

「思っているさ！」

そう言って一夏は自身の唯一の武装である《雪片弐型》をぶん投げる。

「馬鹿ね！　そんなことしたって――――」

――――瞬時加速（イグニッション・ブースト）

エネルギーを一度放出し、放出したエネルギーを吸収して加速を行うＩＳの操縦技術の一つだ。それで一気に鈴音に近づいた一夏だが、鈴音は内心馬鹿にする。

（そんなタイミングで一体どうやって攻撃を――――）

鈴音はハッと思い立って後ろを振り向く。だがそこには《雪片弐型》がなかった。

（え!?　じゃあ――――）

その時鈴音は、思いっきり切られた。そう思った瞬間一夏はさらに鈴音を切っており、それが一気に続く。

「俺は負けられない……負けられないんだ!!」

攻撃を防ぐために鈴音は衝撃砲を放つ。だが一夏は――零落白夜と瞬時加速を同時に発動した。ここぞと決める時の必殺技である。当然自分のシールドエネルギーを大幅に消費させるが、それでも武が調整したためである。その結果――衝撃砲から逃れて鈴音に一撃を入れた。

【甲龍、シールドエネルギー０。勝者、一年一組、織斑一夏】

そのアナウンスがアリーナ内に響き渡る。一夏はガッツポーズをして素直に勝ちを喜んだ。

「……そんな……アタシが……」

ショックを受ける鈴音。彼女に待っているのは「素人の男性ＩＳ操縦者に負けた」という称号だろう。この試合で明らかに国からの評価は下がったことは間違いない。

信じられない目で一夏を見る鈴音。その視線を感じた一夏は鈴音に近づく。

「嘘でしょ……何で……何でアンタがそんなに――」

「そりゃあ、ずっと武に鍛えてもらってたからさ。ってか本当にこの間はずっと怖かったんだからな」

と、武との特訓を語ろうとする一夏だが、鈴音は呆然としたままピットに戻っていった。

■■■

機体を破壊した俺は、久々に見るメールアドレス宛てにメッセージを入れながら歩いていると、前の方で引っ叩かれている凰の姿を見つけた。随分と物々しい雰囲気である。

「何が専用機持ちよ。あんな雑魚に負けて世話ないじゃない」

「アンタ、まさか自分の思い人が相手だからって手を抜いたんじゃないでしょうね？」

「そんなわけないわ！」

「じゃあ普通に実力で負けたってことなんだ。ダッサ」

あんまり揉め事に関わる主義ではないが、目の前のやり取りは見てられないな。ハッキリ言って無様すぎる……が、俺は別に「女の子は俺が守る!!」なんて言うような正義感があるわけじゃないのでスルーする。

関わらないように無視して歩いていると、女の一人が俺に気付いて気持ち悪い笑みを浮かべて近づいて来た。
「あなたは二人目ね。ちょうどいいわ。この女を犯しなさい？」
「……は？」
突然言われたことに驚いた俺は真顔になっているだろう。
「あら、嫌かしら？」
「……すまん。今なんて言ったのかもう一度言ってもらえないか？」
聞き間違いだろうと思った俺は問い直すと、その女は俺を馬鹿にしたような笑みでもう一度言った。
「この女を犯せって言ったのよ。もっとわかりやすく言うなら、この女と交尾をしろってこと」
「……ＯＫ、なるほど、そういうことね」
まさかそんなことを言ってくるとは。この１５年と少し生きてきて初めての経験だったので思考が追い付かなかった。
「わかったら早くしなさい」
「興味ないな。女尊男卑の女なんか、気持ち悪くて手が出せるか」
「……あら、言うじゃない」

それが合図だったのか、取り巻きが武器をこちらに向ける。俺の真後ろに陣取った女が何かを振り下ろそうとしたのですぐにその場で回転しながら武器を展開して武器を切り飛ばす。どうやら鉄パイプみたいだ。

「え？　嘘？」

「アンタ……その武器……一体……」

「どうやら立場を理解していないようだな。例えお前らがＩＳを持とうが持つまいが――お前らは俺に狩られる側だ」

俺が黒寄りの灰色の鍵とも言えそうな剣を展開したことに驚いている女たち。この武器作れた時の俺のテンションの上り具合はおそらく俺史上滅多にないほど興奮していたと言っても過言ではない。これでいつアイツらが現れても狩れ――ねぇな。大体これ心を解放することできないし。

「に、逃げるわよ!!」

金髪のボスの号令で奴らは逃げていった。形勢不利と判断したのだろう。奴らはすぐにどこかへと消えた。脅威は去ったし、俺も織斑の様子を見に行こうとすると凰が声をかけてきた。

「無様よね。こんな醜態をアンタの前で晒すなんて」

「自覚があるなら良い方だろう。アイツらは女尊男卑思考を持っている時点で無様だと

いう事に気付いていない。それよりもマシだろうな」
「……アンタ、本当に女尊男卑嫌いよね」
「むしろ好きな男がいるかよ」
　よほどのＤＭか何か……ならば可能性は高いな。
「それにしても、一体どうしたんだ？　お得意のＩＳ使っての脅しをすればそれで終わりだろ」
「……あの後、凄く怒られた」
「そりゃあ、いくら貧乳呼ばわりされたからってＩＳを使って脅すのは禁止行為だからな。それに織斑を諦めれば胸が小さくても良い男が拾ってくれるかもしれないぞ？」
　中にはそういうのが好みって言う奴もいるんだ。決して胸が小さいからと悲観することはないだろうに。
「……ねぇ、聞いていい？」
「何だ？」
「あの時、どうしてアタシを蹴ったの？」
「ムカついたから」
　むしゃくしゃしてやった。反省はしないがな。
「そもそもＩＳは本来宇宙開発のためだぞ？　同族を殺すための兵器じゃない。強いて

言うならば対宇宙からの侵略者用の兵器としての運用までは考えていたかもしれないけどな。それでもあんな理由で人を殺すかもしれないことをされて黙って見過ごせなかった」

まぁ、正直これに関しては完全に手遅れなんだがな。それでも目の前で起ころうとする悲劇を回避したくなったわけだ。

「それにお前にムカついた。恋愛のセオリーもわからずにあんな態度を取るなど、女尊男卑――粋がる弱者そのものだ」

そう言うと凰は俺を見て立とうとしていた体勢からそのまま座り込んでしまう。

「……アンタ、何者よ。その殺気、いくら何でも異常すぎるわよ」

「……ただ天災の弟というだけだ」

それだけ言って俺はその場から離れた。久々にやっちまった感じかなぁ。

「あ、武！」

織斑が俺の姿を見つけたからか、手を振ってこちらに近づいてくる。

「鈴に勝った！」

「そうか。それは良かったな」

「だろ？　それで今鈴を探しているんだけど、どこにいるか知らないか？」

「……まさかあの時の理由を聞くつもりか？」

「ああ。そうだけど」
　その答えを聞いた俺は織斑を殴ろうと思ったが冷静になってから織斑に言った。
「つまりお前は強姦しに行くのか。欲求不満だからと言ってそんなことをしに行くとは意外だな」
「な、何でそんな話になるんだよ?!」
「お前がその質問をするというのはそういうことだ。凰にその質問をする前に少しは考えろよ」
「え？　何を？」
「凰が言った言葉の意味だ。その答えを俺に伝えない限りその質問は禁止。破った場合――白式を修復不能にまで破壊する」
「それはいくら何でも――――」
　俺の顔を見た織斑は俺が本気だと思ったのか黙った。
「では俺は試合の観戦を続ける。他の二戦、気を抜くなよ」
　そう伝えた俺は離れながらふと思った。身長的にどうしてもクロエがダブってしまうな、と。

■■■

一組対四組の試合が行われた結果、一組が――――一夏が勝利した。四組のクラス代表である更識（さらしきかんざし）簪は打鉄で試合に臨んだったが、接戦まで持ち込んだが負けてしまったのである。その事に彼女の従者である布仏本音（のほとけほんね）は慰めようとしたが、彼女から発するプレッシャーによって引き下がるしかなかった。

「……らしくないわね、簪」

「……うるさい」

声をかけてきた生徒を見た瞬間、簪はその人物を睨む。

「彼を格下と侮った結果よ。訓練機でも勝てると。私前に言ったわよね？　織斑一夏は今まで以上に強くなってるって」

「……でも、彼は――――」

「じゃああなたは「操縦時間が短い男に負けた」という事になるわね」

ハッキリと言われたことで簪はその相手に苛立ちを感じた。

「……あなたに何がわかるの？」

「さぁ？　でも私、なんだかんだで負けたことないから」

その発言が簪の神経を逆なでさせ、ピットから無理矢理追い出した。
「……ダメだったみたいだねー」
「そうね。少しは素直になってくれると嬉しいんだけど」
外で待機していた本音は相手の容姿を見て思わず黙り込んでしまう。何故なら目の前にいるのは知らない人間が見れば絶世の美女そのもの。しかし男なのだ。しかも変声機を用いていると思われるが、それがどこかわからないからこそ普通の生徒にしか見えない。
「そもそも、あの話が本当なの？」
「何が～？」
「あの楯無が一人でＩＳを完成させたって話。私の記憶間違いじゃなければそういうのは簪の方ができていると思っていたけど」
だが本音が出した答えは首を可愛く傾げることだった。可愛さのあまりその女装男は抱き着いて撫でまわすが我に返って持っていた櫛でボロボロになった本音の髪を梳く。
「でも～。もしかしたらゆうちゃんが離れてから覚醒しちゃったとか～」
「……この前会った時に見た感じ、そこまで強くなっているとは思えなかったけど？」
「あ、うん」

「むしろ強いと感じさせなくなる方が上手くなったのか。どちらにしてもいい具合に成長しているようで何よりだわ」

と言ってから優子は本音のある部分を凝視してから視線を逸らすと、本音に足を踏みつけられた。

「なにかな～」

「なんでもないわよ。それよりも本音、お腹すいちゃったからどこかで食べない？」

「いいね～。どこで食べる～？」

「どこでも良いわよ」

そう言って二人は簪がいるピットから離れる。それを確認した別の姿がピットに足を踏み入れた。

■■■

クラス対抗戦の一組の戦績は上々だった。織斑は既に二組と四組相手に勝利を納め、残りは三組のみとなる。今の戦績は大体こんな感じだ。

一組……二勝。残り対戦相手…三組
二組……一勝一敗。残り対戦相手…四組
三組……二敗。残り対戦相手…一組
四組……一勝一敗。残り対戦相手…二組

三組は代表候補生と聞くが、おそらくは四組の代表候補生よりも実力としては弱い。驚きなのは四組の代表で凰に対応できなかった戦法を初撃で見切ったようで対応し始めたのだから冷や汗ものだった。やはり織斑に教えさせた戦法は付け焼刃が過ぎるということか。ただ気になったのは「二刀流じゃない」とか「どうして逆手持ちしていないの？」とか言っていたから、もしかしてアイツも同類なのではないのかと少しばかりに気になっている。ま、あんまり関わり過ぎると悠夜がキレるから自重はするが。

「――――ちょっと良いかしら？」

「……何か用か？」

そいつの顔を見た瞬間、俺は逃げ出したくなった。誰だって溶岩地帯に入りたくないだろう。つまりそういうことだ。

「あら、お姉さんの相手をするのは嫌？」

「こっちとしても、友人が暴走する姿は見たくないのでね」

しかも相手を破壊するまで止まらないからな、アイツ。容赦なく魔剣に呑み込まれよ

うとするから恐ろしい。思えば、女装も自分の暴走癖を抑えるための手段だったりして……いや、どこの主人公の兄貴だよ。

「大丈夫よ。彼はそんなことで怒ったりしないわ」

「それで、一体何の用だ？　言動を直せと言うなら無理な相談だ。強い女もいることは認めるが、だからと言って弱者が粋がっていい理由にならないだろう」

「……ま、私も今の社会は酷いと思っている人間だから、それに関してはどうでも良いわ。それよりも聞かせてもらいたいのは、あなたたちの目的ね。この学園で一体何をしようとしているの？」

　ああ、その事か。って言うか悠夜の奴、何も言っていないんだな。意外だ。

「知りたければ自分で調べたらどうだ？　対暗部組織更識（さらしき）の十七代目楯無（たてなし）さん？」

「その事は知っていたのね」

「君の家には少しばかりに世話になっていたからね。日本からの圧力で俺を嵌めるために小学生までは頑張ってくれていたんだ。その事に関しては感謝しているさ」

「……そうね。あの事は申し訳ないと思ったわ。その後にまさか我が家の配下の組まで壊されるとは思わなかったけど」

「……そうか。それは悪い事をしたな。すまなかった」

　そのつもりはなかったが、まさか壊滅させていたとは驚きだったな。

「それに関しては問題ないわ。ただ、一般人であるあなたが壊滅させたことで周りからの評価はがた落ちだけどね」
「……そもそもの原因を知らず、攻めたのはそっちだと記憶しているが？」
「……その、ごめんなさい」
　向こうは軽口のつもりだったのか、素直に謝ってきた。
「わかっているわ。そもそものあなたがあそこまでの事をした原因は私たち女にあると思っている」
「……どれだけしおらしくしたところで俺はアンタたち女を疑う事を止めるつもりはないがな」
　そう言うとその女は「ちぇー」と口をとがらせてきた。たぶん思っていることは本当なんだろうが、俺たちを利用したいという腹だろう。
「もう行っていいか？」
「あら、お姉さんの相手をするのがそんなに嫌？」
「言ったろう？　友人の暴走は見たくないんだよ。止める方法はアンタらの内の誰かが犠牲になる、だしなぁ」
「……否定できないわね」
　前までなら説得させるとか発散させるとかがあったけど、今なら生贄がいるから暴走

停止は楽だ。
「安心してくれ、会長。俺はアンタが妊娠したらちゃんと祝ってやるし、余計なことを言う奴らは気が付いたら死体に代わるか洗脳しておくから」
「満面の笑みでシャレにならないことを言わないでよ!!」
　現状、悠夜が暴走したら間違いなく被害に遭うからなぁ。でも決して悠夜は悪魔と言うわけじゃないから結ばれたとしても問題はないだろうに。あ、もしかして既に好きな人がいるとか？
「……悪い事は言わないから悠夜を選んでおけ。生まれは一般人とはいえ、友達を助けるために単身悪魔の住処に特攻するような奴だ」
「それはわかっているけど……」
「だったら何が不安なんだよ」
「……だって本音ちゃんも悠夜君の事が好きだし」
　もしかして、危惧しているのは別の事なのか？　彼女の様子からしてそうだと判断せざる得ないが。
「わかってるわよ。悠夜君がどれだけ異質なのかってことくらい。両親が事故で亡くなったことで平坂家に拾われてほとんど兄弟同然で零司君と仲が良いし、零司君が作った魔剣にも適応して何度も私や簪ちゃん……妹なんだけどね。助けてもらっているし、

信頼できるわ」
「……じゃあ何で」
「異質な力を持っているからこそ、政府に知られればその力を悪用するかもしれない。そして更識は政府が主人である以上、命令に抵抗することは難しい」
……なるほど。そういうことか。
「……ちょっと安心したわ」
「……そう」
「ああ。そろそろ一組の試合が始まるし、これで去らせてもらおう」
俺はすぐさま更識会長と距離を取って誰にも来れないところに移動する。にしてもあの生徒会長がそこまで悠夜に対して思っていたとはねぇ……まぁ、日本は俺が直接手を下すまでもなく消えるな。悠夜を怒らせたらどこぞの黒い騎士王が宝具ぶっ放すようなことを平然とするから。

第13話　新たなる敵

　ＩＳ学園の上空。ほぼ成層圏にも近いところにて一台の男たち四人を乗せた輸送機が滞空していた。その内の一人が映像を確認し、一組と三組のクラス代表同士の戦ったのを確認した。
　ハッチが開き、風が吹き荒れて一番近くにいた人間が投影されていた映像を消した。
「これより任務を始める。オーガは予定通り第二アリーナに襲撃を。そして我々ファルコン部隊（チーム）は新たにできた施設の調査だ」
「了解」
「……」
「問題あるか、オーガ」
　その男の身長は１６５程度だが、オーガと呼ばれた男に近づく。大してオーガは１８０程あり、近づくたびに威圧度合いが増しているのにも関わらず物怖じしなかった。
「……問題ねぇ」
「そうか。だがまだ殺すな。場合によっては我々の苗床になるかもしれん存在だ」
「だろうな」

そう言ってオーガと呼ばれた先に降りた。
「先に行かせてよろしかったのですか、隊長」
「……気にするな。ああ見えてきちんと仕事はする奴だ。では我々も行こう」
隊長と呼ばれた少年とも言える男はそう言ってハッチから飛び降りる。下降中に彼らは光を纏い、身体に装甲を纏う。その姿はまるでＩＳだった。
「我々の目標はあくまでもＩＳ学園にできた施設の偵察だ。無用な殺しは避けるように」
「わかりました」
「が、頑張ります」
「あまり気負うな。いざとなればお前たちは逃がす」
隊長と部下二名が着地し、ＩＳ学園に新たなに増設された施設へと移動を開始する。だがそこには既に白銀の鎧を身に纏う者がいた。
『……これ以上は進ませない』
機械音声でそう言った相手に侵入者たちは驚きを露わにする。
『驚いた。我々の襲撃に勘付いたのか？』
『……ここは子どもたちの楽園。だから行かせない』
白銀の鎧を纏った存在の言葉と同時に警報が鳴り響く。

『そこを退け。我々はこの下らない世界を――――』

だがその言葉は最後まで言う前に白銀の鎧の両肩からビームが打ち上げられ、雨となって三機に降り注いだ。

更識簪がいるピットに一人の来客が訪れた。その客は意気消沈している簪をいきなり蹴り飛ばす。

「無様ねぇ、更識簪。どうしてあなたみたいなのが専用機なんて持てるのかしら？」

「……誰？」

その答えを言う前に簪は顔を踏みつけられる。

「酷いよね。コネ持ちってのは本当に酷い。ちょっと近い血筋の人間が凄いことやったからってそいつらもそうなるって思っちゃってる。アンタなんか！　典型的な！　出がらしなのに！」

三度簪の顔を踏んだその生徒は痛みで動けなくなった簪の指から待機状態になっている打鉄弐式の指輪を回収した。

「……や、止めて……」

「嫌よ。だってこれは私の物になるんだから、さぁ!!」

かかと落としが偶然にも簪の首に極まり、一時的に息ができなくなった。
「じゃあね出涸らしさん。さようなら」
そう言って懐からワルサーＰＫＫを取り出した女は簪に銃口を向けて引き金を引こうとした瞬間に無理矢理引っ張られる。
「うえ!?」
そして思いっきり蹴られてピットの壁に叩きつけられた。
「かんちゃん！」
後から入って来た本音が簪に駆け寄ろうとした瞬間、急に地震が起こった。
「う、うわぁ!?」
「おっと」
咄嗟に本音を掴んだのは先に入って攻撃をしていた女性――もとい、女装男である。
「大丈夫？」
「う、うん」
転がりかけていた本音を逆手で咄嗟に掴んだことで本人はまだ気付いていないがダイレクトに胸を触っており、恥ずかしさを見せる本音だったがすぐに体勢を立て直して簪の所に急ぐ。

「かんちゃん！」
「死ね!!」
そう言った女は先程まで簪が動かし、エネルギーを補給していた打鉄に乗り込んでおり、アサルトライフル《焔備》を本音と簪に向けて発砲した。
「ザマァ!!」
そう吐き捨てた女性はすぐに廊下の出入り口を出て廊下を飛ぶ。彼女は今の攻撃で二人が死体になったと思ったのだろうが、実際は女装男が咄嗟に割って入り、大型の盾を展開して守っていたのだ。
女装男は簪の方に駆け寄るとそこの傷――――そして彼女の右手の中指にあるはずのものがなかった。
「……あの女か」
簪は涙を流す。それを見た瞬間、空間が歪むほどの殺気が放出し始めた。
「何が起こった――――ひっ!?」
現れた瞬間、楯無は悲鳴を上げるが女装男の近くで倒れている簪を見つけた瞬間、駆け寄った。
「簪ちゃん！　一体どうしたの!?」
「お嬢様、ダメです。今彼女は――――」

「とりあえず冷やしておけ。知り合いに無免許だが名医がいる。最悪そいつに頼む」
「む、無免許って――――」
楯無は言葉が出なかった。保冷剤を受け取った楯無だがそれ以上に放出される殺気の源から黒い翼が生えていたのだから。
「ちょっと悠夜君、それ――――」
「楯無は簪に付いて医療室まで。俺はちょっと取り返してくる」
そう言って悠夜は姿を消す。楯無は言われた通りに簪をと考えたが、それよりもすでにアリーナ内でも戦闘が始まろうとしている。ピット内に弾丸が入らないようにするためか防弾シャッターが降りて締め出した。
「お嬢様、悠夜の方に行ってください。彼女は私が」
真剣さが増した本音はストレッチャーを操作して簪を寝かせる。
「で、でも、私は――――」
「今行かないと、あの敵は死んでしまいます」
その言葉が効いたのか、楯無はすぐに悠夜の後を追った。

突然の乱入者に第一管制室にいる面々も混乱し始めた。

「な、何だあのＩＳは!?」
「山田先生、すぐにレベルＤの警戒態勢を。動ける教員はすぐに準備させてください」
「わ、わかりました」
「――必要ありません」
　唐突の声に全員がその場で一時硬直した。
「こ、子ども？　何故ここに――」
「――全システム掌握完了。第二アリーナ内のバリアの強度上昇完了。シャッター閉鎖。シャッターの表面にバリア展開。お兄ちゃん、銃姫のスペック解放をレベル６まで使えるよ」
『わかった。邪魔だから他の奴は入れるなよ』
　武の声に一番驚いたのは他でもない箒だった。
「どういう意味だ、今の会話は。何故お前の顔はそんなに――」
「束お姉ちゃんに似ているのか？」
「…そうだ」
　今にも掴みがかりそうな勢いだが、それを制したのは千冬だった。
「落ち着け箒。今その事で争っている場合ではない」
「ですが！」

「……イノシシ」

楓がその言葉を呟いた瞬間、箒の怒りが頂点に達した。

■■■

突然、何かが光ったと思ったら地震が起こった。余震とかがなかったので人為的と判断するとすぐに楓の場所を確認すると、第二アリーナ内に反応が見つかった。

『楓、今どこにいる！』

『第一管制室だよ。箒お姉ちゃんと千冬ちゃんと一緒』

『……とりあえず安全、か』

フィールド内ではさっきまで織斑と三組のクラス代表が戦っていたはずだが、今は二人の近くに灰色の二本角を持った全身装甲の機体が現れた。俺はすぐさま銃姫を展開して相手の情報を探すが、出てきたのは【ＵＮＫＮＯＷＮ】という言葉だった。

『もしかしてこれ、ＩＳじゃない？』

『どういうことだ？』

『でも零司が密かに開発していたあのタイプとも違う。もしかしてあの男以外にも天才がいたの？』

俺も素直に驚いている。零司の技術力もある意味異常だが、そんな奴が他にもいるなんて、世界は広いな。

すぐに奴が開いた穴に向かう。

「な、何だ？　何が起こって……」

「一夏、試合は中止よ！　すぐにピットに戻って！」

次の試合に出るため準備でもしていたのか、凰が織斑にそう言った。

「一夏、早く！」

「ついでにその三組の生徒も回収しろ。邪魔だ」

穴から降りる中に入り織斑たちと所属不明機の割って入る。だがすぐに動くつもりはないようだが。

『……殺す』

相手は機械音声ということは、身元バレは防ぎたいということだな。

「どこの所属かは知らないが、今すぐ引くと言うならば深追いはしない」

『……何故お前はこいつらの味方をする？』

話し方が零司に似てるなと思いながらも質問の意図を探る。

「……お前が何を言いたいのかわからないな」
『わからない……こんなゴミ共を守って……お前に何が残る……』
「さぁな。というか俺は何も守りに来たんじゃないぞ」
『お兄ちゃん、銃姫のスペック解放をレベル６まで使えるよ』
　レベル６。それは俺が数か月前まで使っていた銃姫のスペックまで使えるという事だ。流石は賢妹。
「わかった。邪魔だから他の奴は入れるなよ」
　そう言うと俺は銃姫の制限をレベル６まで解除した。
「俺は戦いに来た。それでビームがバリアを突き破って誰かが死のうがぶっちゃけどうでも良い。この学園に来ている以上は全員死ぬ覚悟ぐらいできているだろうしな」
『……こっちが言うのもなんだけど、ちょっと無茶ぶり』
「そうか？　つうかもう始めようぜ？　そっちだって戦いに来たんだろ？」
『……人呼ばないのか？』
　相手の言葉に俺は思わず噴いてしまった。向こうとしては気遣ったつもりかもしれないだろうが、こっちとしてはそんなのはいない。
「悪い悪い。生憎俺に合わせられる奴は全員出払っていてな。それに俺は一人の方が戦える」

『……なるほど。同種か』

瞬間、敵から殺気が放たれた。その濃さはこれまで戦って来た誰とも比較的にならないほどだ。

『貴様のような思いきりの言い操縦者は嫌いじゃない――精々楽しませろ』

「……上等だ」

こうして俺たちの戦いは幕を開けた。相手は近接ブレードを展開して俺に斬りかかる。その様相はさながら鬼の様で俺から冷や汗が出てきたが、それを近接妖刀ブレード《村正》を展開して受け止めた。その太刀筋から恐らく奴は剣道とかの類はしていないと思われるが、それでも力だけはあるようで押される。

見た目からは感じられないほどのパワー。機体のおかげと感じたかったが、それはすぐにそうじゃないと気付く。

――ミシミシ

嫌な音が銃姫からもそうだが、何故か向こうの装甲からも聞こえてきた。俺はすぐに身体を捻って力を逃がしつつ距離を取る。

「やべぇな。どうやらアンタを相手にするにはこっちも本気で行かないといけないみたいだな」

『……来い』

俺は《リヒトブリッツ》を両手に展開し、周囲にビットを飛ばす。そして《リヒトブリッツ》の銃口でエネルギーを貯めて放出した。相手は瞬時に移動して俺の首を取ろうとブレードを振るうがそれよりも先にビットが光線で阻害する。すると向こうの背中がビームが曲がりながらこっちに迫ってきた。

ウイングスラスター上部に備わっている《コンヴェルジェンザ》を展開してビームごと奴を吹きとばす。さらに《リヒトブリッツ》とビットでおまけもやる。

今のでかなりのダメージを食らっただろう。だがそれはあくまでも俺の希望的観測に過ぎなかった。相手の推定全長の二倍はあると思われるメイスが迫ってきたのだ。

「嘘だろ!?」

回避したが今ので後ろにいたビットがいくつか破壊される。これまで破壊なんてされたことなかったのに。

『どうした？　何を笑っている？』

「……笑っている？　俺が？」

ああ、たぶんそうだろう。だって――――こんなに楽しいことはない。

「最高な気分だ」

《リヒトブリッツ》を収納してまた《村正》を展開した俺は《村正》の特殊システムを起動させた。

■■■

西条朋美（さいじょうともみ）は成し遂げた自分を褒めながら打鉄で指定されたポイントに向かって飛行する。聞けば既に仲間がこちらに向かって飛んでいるとのことだった。

「勝った。勝ったんだ、私！」

後は二つの土産を献上すればいいだけ。そう考えていた朋美は一瞬で地獄に叩き落とされそうた気持ちだった。

「え？」

ハイパーセンサーからアラートが発令。高威力のエネルギーが自分に迫っているとのことだった。後ろを向くと黒いエネルギーが自分に向かって飛んでくるのだ。咄嗟に身体を捻って回避する朋美だったが、打鉄の右側の盾が一瞬で消え去ったのである。

「う、嘘で――――」

だが朋美が驚くのはこれからだった。後ろには戦闘機が物凄いスピードでこちらに迫ってくると思えば、自分を抜き去って人型に戻ったのである。

「な、何よそれ――――」

『やっぱり死ね。今すぐ死ね。死ぬことが義務と心得ろ』

暴論なんて言葉で足りないほどの暴論をぶつけられた朋美だが、相手の攻撃力は凄まじく反論も反撃もできない。

『萌えもロマンも理解できない無能風情が、死ね』

朋美が最後に見たのは、黒い機体から出て来る力によって形成された三本の黒い巨大剣。それらが自分が使用する打鉄に襲い掛かり、零落白夜を上回るスピードでシールドエネルギーを削りきった。

（……なんなのよ……）

彼女は銃姫の強さにも驚かされた。それが自分よりも下であるはずの男がたった一人で作り上げたということも信じられなかった。その上――――明らかに常識外の攻撃を行う兵器と来た。

意識を手放しかけた朋美に待っていたのはアッパー。腹部を思いっきり殴られ、強制的に戻される。

「な、何を――――」

頭を掴まれたと思えば打鉄弐式の指輪を奪われるだけでなくそのままＩＳ学園に戻され、港に着くとすぐに地面に叩きつけられた。

「がっ、がはっ、げほっ」
ＩＳが強制的に解除され、打鉄から放り出された朋美はそのまま逃げようとしたが、右足に衝撃が走りそのまま倒れた。
「な……なに……」
そこにあったのは自分の右足。そして自分の右足があるはずの場所になく、朋美は悲鳴を上げたが誰も助けないどころか前に立つ存在はそれを許すつもりはないようで、朋美の右腕を奪った。
「み、みぎ、みぎぃいいいい」
「喚くなブタ」
朋美はその声を聴き、目の前にいる存在がどういうものかをようやく理解した。
「え？　お、男……なんでぇ」
「死ね」
今度は首を落とそうとしたのは女装を解いた悠夜だった。そんな時、誰かが悠夜に跳びついたのである。その存在はすぐさま悠夜の唇を奪って何度もキスを繰り返した。
状況を理解できなかった悠夜だが、次第に相手が誰か理解するとそのまま受け入れてし返す。犯人とはいえ瀕死な人間が目の前にいるのにやっていい光景ではないだろうが、それでも暴走を止める手段としては有効だった。

正気に戻ったと判断したその存在――――楯無は悠夜から離れて深呼吸する。
「はぁ。良かった。戻ってくれたのね」
「……あ、うん」
「……ところで」
打鉄が大破。右腕と右足が切断された生徒を見て、楯無は悠夜に尋ねる。
「これ、何かしら？」
「……家畜の末路」
「やり過ぎよ!!」
気絶している朋美を見てすぐに楯無は行動に移るが、悠夜はどこか不満げだった。

白銀の鎧――――正式名称は『白鋼（しろがね）』といい、広域殲滅を目的にかつて女権団にその存在を狙われた平坂零司に合わせたカスタマイズがされている。ＩＳに似た存在ではあるが機体相称としては『アチーブ・ストレングス』と呼ばれる。「成し遂げるための力」の名を付けられたそれらは零司のある目的のために元から考えられていたものだ。
確かに零司自身もＩＳの二番煎じだとは思っているが、彼もまた行使するための力として必要と感じて完成させたのである。

そんなことは全く知らない敵は脅威度が高いと考えた。
『……今日の所は引こう』
『……』
零司は武装を向けるが、それ以上は攻撃するつもりはないようだ。その様子に少し安堵した隊長と呼ばれた男は動けない二機を掴んで離脱する。
『……良いのか？』
零司の後ろに別の機体が現れて問いかける。
『……甘いかもしれないけど、僕は人を殺すためにＡＳを作ったわけじゃないから。……それに向こうは最初からこちらを攻撃する様子はなかった。たぶん、偵察が目的』
『そうか。だが何にせよ、あっさり引いてくれて助かった』
すぐさま反転して姿を消す零司。もう一機もそれに倣って同じように姿を消した。

第二アリーナの戦闘。そこもまた激しくなっていく。
二機の機体は攻撃をして回避し、相手のダメージを回避する。観客は今ピットにいる一夏と鈴音、そして三組のクラス代表。管制室にいる各教員と箒とセシリア、楓のみだ。
二人は鍔迫り合いを行っていたが、《村正》から離れた武は《リヒトブリッツ》を展開し

て相手に撃った。しかし銃と言うには異質な形をしたものを展開した相手はビームを撃って相殺する。
「舞え、《村正》！」
　ひとりでに動いて攻撃を加える《村正》を援護するように舞う武とビット。だが敵は見た目とは裏腹に俊敏に動いて攻撃を回避する。
『……何？　そうか。了解した』
　すると何かに応えるように返事をした相手は上昇した。
「逃がすか！」
　武もその後を追うと、敵は既に待ち構えていた教員部隊に包囲されている。
「撃て!!」
　隊長と思われる存在がそう叫ぶと全員が引き金を引く。だがさらに加速した敵機は攻撃を回避して離脱したことで味方が放った弾丸がそれぞれに直撃した。出てきた武もすぐに後を追う。
『待て武！　深追いはするな！』
　千冬はすぐに通信を繋いで武にストップをかけるが、それよりも先に別の機体が現れた。
『……二人目か』

「退け！　俺はアイツに用がある！」
『そう急くな。君がここにいる限り、僕たちは何度も対峙するだろう』
そう言い残した別の機体も離脱する――――が、その後ろにさらに加速した銃姫がいた。
『この機体に付いてくるだと!?』
「女とは違うんだよ、女とは!!」
『……あ、でももう無理よ』
すると銃姫の背部から煙が噴き出し、減速する銃姫。距離を開けられた武は舌打ちして停止し、飛行形態に変形してＩＳ学園に戻るのだった。